

都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書 第一冊

か　わ　み　な　み　に　し
川　南　・　西　遺　跡

1999. 3

高松市教育委員会

はじめに

今日、30余万市民の生活が展開されている高松市は、その都市景観の骨格を16世紀後葉、生駒親正による高松城築城の頃に形成したものと言えましょう。

注目されつつ進む「サンポート高松」計画とも関わりあって、高松城の旧状や変遷を跡づける調査も成果を重ね、周辺を含めた整備も進んで参りました。

他方で、一般国道11号高松東道路の建設・開通やこれと結ばれた都市計画道路の拡充・整備に伴う発掘調査を通じて、高松平野の縄文・弥生時代以来の歴史像も、市街地から近郊・周辺部を含め次第にその復元可能な範囲を広げております。同時に、景観の急激な変貌も惹き起こしております。

それら事業の一つである「都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査」においては、高松平野北東部に位置する「川南・西遺跡」の姿が明らかになり、あたかも中世後葉から近世初頭の高松城築城を前後する時期を中心とした集落とこれに隣接する耕作域の実態を確認することが出来ました。そこは、16世紀頃の事として『南海通記』が「山田郡小山ノ下マデ潮サシ来ル」「其比マデハ高松ト笑原ノ間入海ニテ春日ノ里ヨリ木太ノ郷ニ涉ル潮瀬ニ海ノ中道アリ」と伝える一帯です。洪水砂の堆積による僅かな微高地を足場に開拓を進めた先人の足跡が残されており、また当時発生した地震による噴砂跡も検出されました。そして、集落は比較的短期間で廃絶したことが示されています。

今次調査では、従来やや看過されがちであった中～近世の遺構・遺物が主体となり、文書記録では知れない当時の実景を再現する資料を得た点で、意義が大であると考えられます。

郷土の先人が土に刻んだ地下からのメッセージを「温故知新」の言葉どおり今後の都市づくりと市民の暮らしに活かす一助にもなれば幸いと存じます。

平成11年3月

高松市教育委員会
教育長 山口 寮式

例　　言

1. 本書は、都市計画道路室町新田線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書である。

2. 発掘調査地ならびに調査期間は、次のとおりである。

調査地　高松市春日町454番地3他

試掘期間　平成7年(1995)3月8日～平成7年3月24日

本調査期間　平成8年(1996)4月2日～平成8年7月3日

3. 発掘調査及び遺物整理・関連資料調査その他に下記の方々並びに諸機関から玉稿をはじめ各種の貴重なご教示、ご指導を得た。記して厚く謝意を表する。(敬称略、順不同)

通商産業省工業技術院地質調査所大阪地域地質センター 寒川　旭

環境考古研究会　金原　明

佐賀県立九州陶磁文化館学芸課　鈴田由紀夫

同　　上　　家田　淳一

4. 現地調査、遺物整理、本報告書作成について下記の方々のご協力を得た。記して謝意を表する。(敬称略、順不同)

中西克也（讃岐文化遺産研究会）、大嶋和則、山内康郎

5. 発掘調査および本報告書の作成にあたっては、高松市教育委員会文化部文化振興課文化財専門員山元敏裕が担当し、讃岐文化遺産研究会末光甲正が補佐した。

6. 本報告書の執筆は、第1章第1節を山元敏裕、その他を末光甲正が行った。

7. 本報告書に関わる自然遺物のうち樹種鑑定につき環境考古研究会（金原明氏）に依頼し、報告（第4章）を頂いた。

8. 本報告書の編集は、山元・末光が行った。

9. 出土遺物ならびに図面・写真類は、当教育委員会において保管している。

10. 本調査に関する以下の業務を下記の業者委託発注により実施した。

発掘調査掘削工事　豊工業株式会社

航空写真測量　アジア航測株式会社

遺物写真撮影　西大寺フォト　杉本和樹

11. 本報告書における表記および記述に関する凡例は以下のとおりである。

①図の縮尺は、原則として次のとおりである。

遺構－遺構配図：全城＝1/200、地区別＝1/100　掘立柱建物：1/80

土坑：1/40　　ピット：1/20　　溝：1/40, 1/20　　井戸1/80

遺物－土器・陶磁器：1/4　　土製・金属製品：1/2　　石製・木製品：1/4

例外のものも含め、各々についてその縮尺値を表示する。

②本報告書で使用する遺構略号は次のとおりである。

S B	掘立柱建物	S D	溝	S E	井戸	S K	土坑
P	柱穴	S T	墓壙	S X	不明遺構		

③遺物番号は原則として記述順序による一連番号とし、必要に応じ插図番号を併記表示する。

④本報告書で用いる高度値は海拔高、方位は原則として磁北である。

⑤「周辺遺跡分布地図」作成に、国土地理院発行1/50,000地形図「高松」及び「高松南部」を使用した。

目 次

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	1
1. 発掘調査の経過	1
2. 整理作業の経過	2

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
付 引用文献等	10

第3章 調査の成果

第1節 土層序と遺跡の概要	11
①噴砂検出区	11
②W I 拡張区	11
③W I・II区	11
④E I・II区	12
第2節 噴砂検出区の噴砂跡と遺物	15
1. 噴砂（液状化）跡	15
2. 遺物	19
①上層 I	
②上層 II	
③拡張区噴砂跡検出面	
④拡張区上層	
⑤拡張区噴砂跡下層	
⑥試掘区噴砂跡上層	
第3節 W I 拡張区の遺構と遺物	20
1. 溝	20
2. 火葬墓	21
3. 柱穴・建物跡	24
4. 遺物	26
第4節 W I・II区の遺構と遺物	35
1. 溝	35
①III層（／IVa層）	35
②IV層	36
③V層	37
④E I・II区溝群との関係	40
⑤遺物	40

2. 土坑	54
①「上坑形」トイレ遺構例	57
②水田関連土坑（貯水坑）	60
③遺物	62
a. 土器・陶磁器	62
b. 木製品	63
3. 柱穴・建物跡	66
①掘立柱建物	68
②柱根	70
③柱根掘方	76
④遺物	78
4. 井戸	83
①S E 0 1	83
②遺物	84
5. WI・II区包含層の遺物	85
第5節 E I・II区の遺構と遺物	93
1. 溝及び溝状遺構	93
2. その他の遺構	103
①草耕起跡	103
②牛蹄痕跡	103
③その他	103
3. 遺物	103
第6節 その他の遺構と遺物	106
1. 土器埋納遺構	106
2. 性格不明遺構	107
3. 金属製品	107
4. 円盤状土製品（駒石）	109
第7節 調査のまとめ	110
第4章 木製品の樹種について	
川南・西遺跡出土木材及び炭化材の樹種同定	111
川南・西遺跡出土種実の同定	120

插 図 目 次

第1図 調査区設定図	3-4	第33図 S K 2 2 実測図	57
第2図 周辺遺跡分布図	9	第34図 水田関連土坑図	61
第3図 E IX・W区南壁土層断面図	13~14	第35図 S K 0 1~2 2 遺物	62
第4図 噴砂検出区土層断面図	16	第36図 木製品遺物-1	64
第5図 噴砂跡断面図	17	第37図 木製品遺物-2	65
第6図 噴砂跡検出平面図	18	第38図 S B 0 4~0 7 平面・断面図	69
第7図 噴砂検出区遺物	18	第39図 S B 0 8~1 0 平面・断面図	70
第8図 W I 拡張区溝遺構変遷図	20	第40図 7 0 1 / 7 0 3 / 7 0 9 実測図	72
第9図 W I 拡張区溝等土層断面図	20	第41図 7 2 1 / 7 3 3 / 7 3 6 実測図	73
第10図 S T 0 1 実測図	22	第42図 7 2 6 / 7 3 9 / 7 4 1 実測図	74
第11図 S B 0 1~0 3 平面・断面図	25	第43図 7 1 8 / 7 3 7 / 7 3 8 実測図	75
第12図 S D 0 1 遺物	26	第44図 7 2 4 / 7 3 2 / 7 3 4 実測図	76
第13図 S D 0 2 遺物	27	第45図 杜穴掘方断面図	77
第14図 S D 0 3 遺物	27	第46図 P 1 4~2 4 5 遺物	79
第15図 S D 0 4 / 0 6 遺物	28	第47図 P 2 5 0~2 7 2 遺物	81
第16図 S D 0 7 遺物-1	29	第48図 S E 0 1 実測図	83
第17図 S D 0 7 遺物-2	31	第49図 S E 0 1 遺物	84
第18図 S D 0 7 遺物-3	33	第50図 W I ・ II 区包含層遺物-1	87
第19図 W I 拡張区包含層遺物	35	第51図 W I ・ II 区包含層遺物-2	89
第20図 W I ・ II 区溝変遷図-1	38	第52図 W I ・ II 区包含層遺物-3	91
第21図 W I ・ II 区溝変遷図-2	39	第53図 溝状遺構変遷-1	98
第22図 S D 0 9 遺物	41	第54図 溝状遺構変遷-2	99
第23図 S D 1 0 遺物	43	第55図 溝状遺構変遷-3	100
第24図 S D 1 2 ~ 2 4 遺物	45	第56図 溝状遺構変遷-4	101
第25図 S D 2 5 ~ 2 8 遺物	47	第57図 溝状遺構変遷-5	102
第26図 S D 3 0 遺物-1	49	第58図 E S D 0 1 / 0 5 遺物	103
第27図 S D 3 0 遺物-2	51	第59図 E I ・ II 区包含層遺物	104
第28図 S D 3 2 遺物	52	第60図 S P - A / S P - B 遺物	106
第29図 S D 3 3 ~ 4 2 遺物	53	第61図 不明遺構遺物	107
第30図 S K 1 4 実測図	56	第62図 金属遺物-1	108
第31図 S K 2 1 実測図	56	第63図 金属遺物-2	109
第32図 S K 0 1~0 9 実測図	56	第64図 円盤状土製品（駒石）	109

図版目次

- 図版 1 A) W I 拡張区完掘状況（空撮平面）
B) W I・II 区完掘状況（空撮平面）
図版 2 A) E I・II 区完掘状況（空撮平面）
B) 噴砂跡検出状況（試掘区・平面）
図版 3 A) 噴砂跡検出状況（試掘区・断面）
B) 噴砂跡検出状況（調査区・平面）
C) S T O 1 火葬墓検出状況
図版 4 A) S D O 1 / 0 7 / 1 0 完掘状況
B) W I 区完掘状況 C) SD32検出状況
D) SK14完掘状況
図版 5 A) SE01完掘状況 B) SK22完掘状況
図版 6 A) P08出土状況 E) P46出土状況
B) P25出土状況 F) P64出土状況
C) P27出土状況 G) P88出土状況
D) P29出土状況 H) P試掘出土状況
図版 7 A) SD17完掘状況
B) SD17木製品出土状況
C) SD32捕鉢出土状況
D) SD17青磁碗出土状況
E) SD32捕鉢出土状況
F) SD07瀬戸ソギ皿出土状況
図版 8 A) 埋納土器群 B 出土状況-1
B) 埋納土器群 B 出土状況-2
図版 9 金属製遺物
図版 10 土師質小皿（埋納土器群A）
図版 11 土師質小皿（埋納土器群B）
図版 12 土・陶磁器皿等-1
図版 13 土・陶磁器皿等-2
図版 14 土・陶磁器皿等-3
図版 15 土・陶磁器皿等-4
図版 16 土・陶磁器皿等-5
図版 17 土・陶磁器皿等-6
図版 18 土・陶磁器皿等-7
図版 19 土・陶磁器皿等-8、瓦質捕鉢片等
図版 20 A) 陶器片口鉢 D) 肥前磁器碗
B) 青磁碗 E) 肥前磁器水滴
C) 瓦質茶釜 F) 肥前磁器碗
図版 21 備前焼・土師質擂鉢
図版 22 陶磁器片-1
図版 23 陶磁器片-2
図版 24 陶磁器片-3
図版 25 陶磁器片-4
図版 26 陶磁器片-5
図版 27 陶磁器片-6・駒石
図版 28 備前焼片-1
図版 29 備前焼片-2
図版 30 備前焼片-3・土師質土器片-1
図版 31 土師質土器片-2
図版 32 土師質土器片-3
図版 33 A) 石臼片 B) 石臼 C) 動物歯牙等
図版 34 ヒト頭骨・歯
図版 35 A) 瓦片 B) 木炭片
C) 漆椀-1 D) 漆椀-2 E) 漆椀-3
図版 36 木製品
図版 37 柱根
図版 38 木材顕微鏡写真 I
図版 39 木材顕微鏡写真 II
図版 40 炭化材顕微鏡写真・種実

表目次

第 1 表 春日村他人口推移等	12	第 6 表 「土坑形」トイレ遺構例	58~59
第 2 表 県内外噴砂・噴礫事例	17	第 7 表 水田闊連土坑例	60
第 3 表 層別溝一覧	36	第 8 表 中世農業経営例	66
第 4 表 土坑一覧	55	第 9 表 溝状遺構分類	94~95
第 5 表 方位別土坑一覧	55		

付図目次

付図 1. 遺構全図
付図 2. W I 拡張区遺構図

付図 3. W I・II 区遺構図
付図 4. E I・II 区遺構図

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

今回の発掘調査の原因となった都市計画道路室町新田線は、高松市中心部から東に抜けるという地理的条件から、その北側に位置する国道11号の朝夕における慢性的な渋滞緩和を目的として建設されたもので、西は国道11号室町交差点を起点とし東は新田町の県道屋島西塩江線までを結び、それ以東は県道高松志度線として隣町の牟礼町に抜ける幹線道路である。

道路建設工事に先立ち、道路建設の主管課である都市開発部都市計画課より道路予定地における埋蔵文化財の照会があり、確認したところ当該地には周知の埋蔵文化財は確認されていないが、建設予定地が広大な面積であること、香川県教育委員会が県道屋島西塩江線より東側で県道高松志度線建設工事に先立ち試掘調査を行った結果、縄文時代から鎌倉時代にかけての小山・南谷遺跡を確認したこと、周辺部に遺跡が埋没している可能性があることなどから、事前に道路予定地内について埋蔵文化財の有無を確認する必要があった。

このような状況から1995年3月に試掘調査を実施し、南北幅約20m、東西約200mの範囲について中世末から近世初頭の集落跡を道路予定地内に確認したことから、平成8年度に面積約2,540m²の範囲について本調査を実施した。

第2節 調査の経過

1. 発掘調査の経過

本調査実施に先立ち、1995年3月8日から同月24日にかけて道路予定地のうち春山川～新川X間の水田部分に、道路延長に沿った東西方向をとる約2m幅のトレンチを設定して試掘し、遺構が検出された部分については更にトレンチを増設してそのひろがりを確認した。

WT-1～6の試掘区のうち、WT-3-2については人為による遺跡でなく地震による噴砂跡であり、-4は居住域、-5は農耕域と考えられた。WT-6も居住域であるが異なる遺跡として扱い、これら4地区につき本調査を実施することになった。前者を川南・西遺跡、後者を川南・東遺跡とした。

本調査は、1996年4月2日から7月3日に亘って実施した。

調査区は西から東へ1. 噴砂跡検出区、2. WI拡張区、3. WI・II区、4. EI・II区として設定し、概ね1.、3.、2.、4. の順序で進行した。夫々地表耕作土層厚20cm程度を重機掘削し、その後精査・遺構検出・掘削は全て人力作業で進行した。

1. では、試掘例より小規模の3cm×1m程度の噴砂跡3条を確認した。
3. では、溝及び多数の柱穴を確認し、
2. では3. よりやや稀薄な柱穴群及び火葬窓が出土した。
4. では、錯綜する溝跡・溝状遺構のみが検出された。

調査期間は梅雨期を含み、砂質の低地で地下水位も高く溝、柱穴、土坑等の遺構は、通常で夜間の作業休止時間中に掘削部分がほぼ満水状態となつた。2度の豪雨時には深夜の排水作業を要したが極端な長雨ではなく、期間中の実働現場調査日数は58日であった。

なおW及びEのI・II区の別は、共にI=南部、II=北部で調査手順の前後によるもので遺跡の内容等には差はなく、調査結果はW又はE区として一括記述した。

2. 整理作業の経過

陶磁器を主体とする遺物の水洗、接合・復元、注記については、基本的には1997年3月末日までに終了した。木製品については水洗の後、柱根、板、細工物、破片などの態様により遺物コンテナ、ボリ・シール容器、チャック袋により水浸漬で保管した。

遺物の実測については、これら遺物整理の進行に応じて、若干の例外を除き1998年10月末までに終了した。引き続いて遺構・遺物等トレース作業を行い、1999年1月中にはほぼ完了した。一部並行して挿図・図版の作成作業を進め、同2月末には依頼原稿等一部を除いて終了した。

陶磁器について、本課大嶋和則主事が九州陶磁文化館に唐津・輸入磁器を主体に特徴的資料を持参して同館鈴田由紀夫、家田淳一両氏から有益な教示を頂いた。

なお遺物写真に関しては「西大寺フォト」杉本和樹氏（奈良市西大寺本町）に依頼、陶磁器・木製品を合せた約200点について円座整理事務所において1999年1月6～8日に撮影した。

木製品の樹種同定については柱根、漆楓、曲げ木材同底板、箱材、桶材、種実等に関する、環境考古研究会（金原明氏・奈良県天理市）に依頼することとし、1998年11月13日に円座整理事務所に出張を得て、木製品等41件、種実2点の資料抽出及び三断面の標本作製を行い、後日同定結果及び標本の顕微鏡写真等成果品の送付を受けたものである。



第1図 調査区設定図 (1 : 1,000)

第2章 地理的・歷史的環境

第1節 地理的環境

本遺跡は高松平野の北東隅に位置する。行政上の用途区分は「市街化調整区域」で高松市春日町454番地3他に所在する。住宅団地に隣接するが水田地帯であって西を春日川、東を新川が限る低地（調査地耕作面の標高2.3m）に、この平野通例の「散村」形態の名残を窺わせている。

高松平野は香東川を主体に、これとともに讃岐山脈から北流し瀬戸内海へ注ぐ西部の本津川と東部の春日川・新川によって形成され、地形として山地域、丘陵域、平野域が東西方向の断層によって画されながら南から北へと展開して、平野域は、最も低位の沖積面と河川による氾濫原面とが相対的な河床低下によって一部浸食された、更新世に属する4面の段丘面で構成される。そして河川沿いに亂れを見せながらも平野全域に条里制地割がひろく見受けられる。

但し、沖積面は現実に洪水の被害を受ける現氾濫原面と、これとは比高0.5~2m程度の崖により明確に区分されて既に洪水を受けなくなった完新世段丘面とに区分されることが知られて来た。段丘化以前のこの面の河川は弥生中期に氾濫していたことが近年の発掘調査で確かめられたのである。

また地形帶としては4面の更新世段丘面が扇状地帯として形成され、沖積面の大部分が網文海進最盛期に海没していた三角州帯と当時陸地で河川の影響下にあった扇状地帯とに二分されている。

高松平野を形成した主な營力は香東川でありその最も東の流路=旧河道は由良山北西端近くに認められ、影響は現春日川のすぐ西にまで及んでいたことが知られる（1992高橋学）。

高松平野の東限は大部分が花崗岩類から成り、一部山頂部に讃岐岩質安山岩塊を残した開析溶岩台地であり、平石山（289m）、立石山（272m）、雲付山（239m）など標高200m以上の山頂が連なる雲付山地である。

本遺跡はこの山地を東に望みその土石流扇状地帯裾部から西1km余、旧香東川による三角州帯北東端部からは東1km余に位置する。春日川・新川がこれら東西の埋積作用と拮抗しながら形成して來た三角州上に立地する。調査地点を挟み北流する両河川は天井川であり、二河川の東西間距離は1kmに満たない。この三角州帯は南へ2km弱のび以南は1m余の傾斜変換をみせながら自然堤防帶に移っている。北は1km弱で江戸時代初頭までの海岸と想定されている線に達し、さらにその後形成された新しい三角州帯が北約1kmの間にひろがって河口に達している。

但し、埋没旧河道から判断すれば、本来の新川流路はこの三角州帯北端を起点に南約3.5kmの地点から北西方向に1.2kmのび、そこで春日川に合流していたものと考えられ、新川の下流部分3.5km区間は『寛永10年（1633）讃岐国絵図』成立以前の一時期に新たに開削されて春日川から分離し、北へ直進させたようである。

なおこの1.2kmの埋没旧河道について江戸時代以降の（新川から春日川への）放水路とする見解もある。ともかく新川・春日川の氾濫による埋積が近世末まで頻繁に繰り返された地域である。

本遺跡付近では、ごく部分的に条里制地割の遺存ともとれる徑溝線等が散見されるものの、明瞭な条里型の地割は認められていなかった。

従来、この一帯は条里制地割が行われた当時、施工に耐えぬ条件下にあり、もともと条里制地割は存在しなかったとの見解と、条里制地割施工後の氾濫・埋積により失われたものとする二様の見解が示されてきたところである。

第2節 歴史的環境

本遺跡が立地する高松平野東縁部一帯は弥生後期の標識遺跡として著名な大空（スベリ山）遺跡、碧玉製鍬形石を出土して、その畿内的性格が指摘されている県指定史跡・高松市茶臼山古墳、陶棺・石棺を持った巨石墳で承台付銅鏡を副葬した久本古墳はじめ、その豊富な遺跡の分布が早くから注目された地域である。

本遺跡南東2kmの久米池南遺跡は弥生中期後半の高地性集落であるが、その調査時に大・中型の国府型ナイフ形石器が採集されたほか水和層の顯著なサヌカイト片数点が地山直上で認められた。同遺跡が立地する久米山丘陵西端の支峰にあたる諏訪神社遺跡一帯でも、中型の同種資料が得られている。更新世の地形環境は未解明であるが現状では完新世（4000～2500年前）の自然堤防帯および三角州帯（2500～1600年前）が目前にひろがる。河谷に臨むこの山丘上に旧石器時代人類の活動も展開されていたのであろう。

従来、この周辺に縄文時代の遺跡は知られていなかったが、近年、南西約2.5kmの大池遺跡池底で、摩耗のないサヌカイト製柳又型有舌尖頭器の大・中二点が発見されて高松平野の縄文時代草創期の一端が明らかとなった。国道高松東バイパス道路が開通した前田東・中村遺跡に後期の注口土器等、林町の林・坊城、浴・長池遺跡等で晚期の木製農耕具・土器等が出土した。

弥生前期に入り、上記大池遺跡や諏訪神社遺跡の山頂部をめぐる溝から、木葉文をもつ壺が出土した。浴・長池II遺跡等でもこの時期の出土遺物は少なくない。浴・長池遺跡や大池遺跡に接した弘福寺領讃岐國山田郡田岡比定地でこの時期にさかのぼると推定される不定形小凹田水田遺構が広範囲に検出されている。中期では、前記久米池南遺跡の鉄錠・鉄剣・鉄斧が国内でも最も早い時期に属する使用例とみられており、国内初例の平入り高床建物が描かれた絵画土器片とともに注目される。同遺跡は比高約20m余の低丘陵にあるが、土器に描かれたものと同一の可能性もある高床建物を中心に、柵列跡とみられるピット群をもったテラス状遺構が周囲を断続的にめぐる高地性集落である。この丘陵一帯と周辺の水田で、過去に多数の石鎚が採集されており、その凹基／凸基構成比にも「畿内的」性格が強く示唆されている。

本遺跡東約2.5kmの南谷遺跡周辺に、中・後期にかけて規模の大きい集落遺跡の所在が推定され、後期前半の標識となる土器を一括出土した大空（スベリ山）遺跡がこれに近い。久米池から久米山丘陵の鞍部を南へ越えた川添浄水場遺跡の工事中、弥生終末期の壺等が地表下数mで数点出土した。前記諏訪神社遺跡では、改築前の木殿直下を中心に竪穴式石室の主体部3基をもつ庄内併行期の墳丘墓が営まれていたことが確認されている。

諏訪神社遺跡に次ぎ、古墳時代は前期前半の前方後円墳、高松市茶臼山古墳が出現するが、この系譜を直接引き継ぐような盟主墳は付近に見当たらない。なお本遺跡西方1.5kmに径30m級の円墳白山神社古墳があり、現海拔2mという三角州帶に立地して該期地形環境や低地開発の足跡を物語っている。多量の朱散布の他には遺物がみられず時期を明定できないが、竪穴式石室から前～中期前半の築造と認められる。

南方2km余の六条・上所遺跡で韓式系土器を伴った4世紀後半～5世紀前半の竪穴式住居が出土し、河川に接した立地とともに注目される。近年一連の調査が続く南西約3.5kmの空港跡地遺跡では、弥生後期前半に生活遺構の初現があり、後期後半から盛行して古墳時代に踏襲される。古墳後期後半は竪

穴式住居が消滅し小規模な掘立柱建物集落に変わる。

東方1km余一帯に、平野全域でも目立った存在である後期の巨石墳の久本、山下、小山古墳が連なる。久本古墳は亀甲形陶棺で吉備との関連も指摘されて来たが奈良市山陵町狐塚横穴群2号横穴出土3号陶棺が本例と同型同大とわりその系譜関係が注目される。このほか高松町、新田町、東山崎町、前田西町、前田東町にかけて雲付山地の裾部斜面・尾根一帯に、群集墳もまじえて後期の横穴式石室墳がひろく分布する。高松市茶臼山古墳裾部山腹には終末期の横穴式小石室墳もみられる。

前出、久本古墳の銅鏡はこの地域に早くから仏教文化の影響があった微証となっているが、同墳近くに7世紀後半の瓦を出土する山下廃寺があり他に旧山田郡内では前田(宝寿寺)廃寺、押師廃寺、下司廃寺、高野廃寺が知られる。『日本靈異記』中25話に「山田郡の布敷臣衣女」の説話が収められる。本遺跡所在の高松市春日町は『和名抄』山田郡本山(毛止夜萬)、高松(多加萬都)、喜多郷に係わる地域である。この地域の古代遺跡は近年ひろく知られて来た。前田東・中村遺跡で、A区の奈良時代中頃の大規模掘立柱建物群はじめ7~12世紀代掘立柱建物群がみえる。出土遺物にI類:素縁单弁軒丸瓦とII類:子葉をもつ12葉細弁单弁軒丸瓦があり前者は宝寿寺、後者は始覚寺(旧三木郡)に類例が知られる。後者と同文例の軒丸瓦は宝寿寺北西1kmたらざの岡崎神社祠でも採集されている。

南海道は山田郡条里施工の基準線とみられるが、三谷町で7世紀後半で復元幅12m、平安期で復元幅6mの、2期にわたる道路遺構が確認された。山田・香川郡境に近い香川郡条里1条17里の南北坪界線にあたる松綱下所遺跡で7世紀中葉~8世紀後半にわたる新旧2面に、それぞれ幅約1mの溝2条に挟まれた幅2m前後の幹線道路状遺構が検出されている。これには、1辺約80cmで隅丸方形の柱穴を持つ3×4間以上の柱建物等が伴う。このほかに『弘福寺領讃岐国山田郡田図』関係調査等で、条里制地割による径溝網の出土例が蓄積されている。

都市計画道路室町・新田線地内にある本遺跡からの路線が1.5km東進した地点先に、小山・南谷遺跡があり、7世紀代にさかのほる溝、井戸、建物が確認された。ここでは同時に「新田街道」を南北基準線にとり、西方へ1町幅ひろがり2町分北方にある片本池の線を北限とするおおむね方1里の範囲に、山田郡北(東)部の独立条里地割の存在が報告されている。先述の山田郡条里よりも5°西偏するとされている。久米池南遺跡に接する久米池は石礫・石底丁や備前焼まで含む複合包蔵地遺跡で久米寺伝承地でもあるが、池底には須恵器、土師器片を伴う方形掘方柱柱穴が確認されている。条里制地割との方位関係等検証が待たれる。空港跡地遺跡は、奈良時代は特段の土地利用がなく平安時代に原初的・計画的水路網の整備が始まり、その方向性を活用した掘立柱建物集落の構築と全城の耕地化がみられる。

高松平野でも、近年徐々に中・近世遺跡調査例も増加した。先述、松綱下所遺跡南西にある伏石町のキモンド遺跡は、国人領主香西氏配下で天正11年(1583)勝賀城で戦死とされる佐藤氏(孫七郎)の城館『佐藤城』の伝承地である。現存条里坪界線にほぼ重なる位置で東側堀跡及び石垣約90mとその南端から西へ約20mの南側堀跡及び石垣を検出、16世紀後半と確認された。これらに客土を施した上部で、18世紀代の石壁、石敷の蔵跡等が検出されている。

江戸時代の建物遺構では空港跡地遺跡で1棟、浴・長池II遺跡で1戸分とされる6棟のほか東山崎・水田遺跡で2小期11棟で形成された掘立柱建物の集落が報告されている。本遺跡南方約2.5kmに所在し、地形帶でみると春日川・新川による自然堤防帶Iの北端近くに立地する。ここではA~E地区にかけて13~18世紀代までの田畠・屋敷地等が確認されたが、A・B地区は耕作地で屋敷地は元の川添保育園から琴平電鉄「長尾街道踏切」地点まで東西約300m区間のC・D・E地区にある。E地区に

は溝で囲まれた掘立柱建物の集落が13世紀前半から15世紀初頭に営まれ、E地区に加えて前代に耕作地であったC地区にも16世紀前半～末にかけ2方向に主軸を持つ2時期の掘立柱建物群が出現し横列をめぐらすやや規模の大きい建物も加わる。16世紀末～17世紀代におおむね2時期の掘立柱建物群がD地区に認められる。18世紀代以降C・D地区に灌漑用井戸、溝がみられ19世紀以後これが廃絶、耕作域となり現在踏襲されている水路等が設けられたとされている。

空港跡地遺跡は先代までの遺跡が廃絶、平坦地化したあと鎌倉時代の小規模集落が散見され、溝で囲む1町方格の13世紀代建物群がみえる。室町後期までに全域に4群の集落を形成し水路網整備も活発化した。江戸時代以降大部分が耕地化されたことが示される。同地域は『弘福寺領譜岐国山田郡田図』比定地に接し条里制地割に沿う徑溝網が顯著に残されて来たが、条里制地割に合致する方向性を持つ溝で8世紀末～9世紀初には埋没する例が確認されている一方、12～13世紀代に始まり近世を通じ機能するもの、18～19世紀以降飛行場造成までのものが確認されている。なお、この地域については文化15年成立の『山田郡下林村順道絵図』があり当時の土地利用等の詳細が知られる貴重な資料となっている。川南・東遺跡は新川の現堤防西側に接し、埋没河河道上の洪水による砂層に立地し、近世末～近代初期の建物跡等がみられる。

川南・西遺跡は、銅1点など僅かな武器の出土があり「戦国時代」の片鱗も窺えるが、付近は高松平野の城跡分布状況からみれば「空白」といえる。周辺で城跡とされるものも発掘調査などを経た例は稀で詳細は知られていない。古代の朝鮮式山城である屋島城跡も全容は未詳であるが最近その遺構の可能性も指摘される地形や石垣の一部等が確認されている。現喜岡寺は譜岐守護舟木頼重が延式2年(1335)築城、一度落城後に再興され天正13年(1585)再度の落城が伝えられる喜岡城で、空塹跡など旧地形が明治期地籍図に明瞭である。

地元で「城山」と呼ぶ前田城跡は前田山から南西にのびた低丘陵端の平山城である。文明年間(1469～87)から天正12年(1584)土佐軍による落城まで前田氏居城、昭和51年7月に高松市史跡に指定されている。比高約100m、平野部の独立小丘陵にある由良山城もこれらと同時期の落城が伝えられる。高木城跡は「しき」の屋号が残る川香河・山田郡境に近い方40mの屋敷地である。

本郷伏石一帯を所領とした香西氏部将佐藤孫七郎の居城はその「鬼門」に因むキモンドの地名で知られて来たが近年の街路計画関連発掘調査の結果、前述の「佐藤城跡」が確定された。香西氏支城といわれる室山城跡は、石清水山塊南東端で標高200mの山頂部に立地し、木丸を囲んで土塁や郭がとりまく堅固な構えである。松縄町の熊野神社境内地は周囲とは2mほどの段差で高くなり松縄城跡と推定される。木太南小学校校地は「城屋敷」の地名を持ち、伝承や軒曲してこれを囲む「宮川」の流路も含め神内城跡に該当すると考えられている。その東300mには向城跡と伝える地形の高まりが残されている。

本遺跡は『延喜式』南海道譜岐国11郡中の山田郡に属し南海道ルートから北への直線距離5km、木・山田郡境から西へ3km余、山田・香川郡境から東へ2km余に位置する。

旧山田郡域は『弘福寺領譜岐国山田郡田図』にもみえる条里制地割がひろく遺存するが、本遺跡付近では明瞭でない。氾濫が繰り返された三角州帶であり、条里制地割施工当時の地貌を確認できる資料は見当たらない。

現在の地形図上で明確な里・坪界線を延長しその作図結果により仮定すれば、ほぼ5条15里29～30・19坪(千鳥式)に相当すると考えられる。



第2図 周辺遺跡分布図 (1 : 50,000)

1 川南・西遺跡	18 久米池南遺跡	35 前田東・中村遺跡	52 日暮・松林遺跡	69 甜屋町遺跡
2 川南・東遺跡	19 久米山古墳群	36 東山崎・水田遺跡	53 多肥・松林遺跡	70 高松城跡
3 東山地古墳群	20 諏訪神社遺跡	37 六条・上所遺跡	54 松林遺跡	71 松絆城跡
4 湯の谷古墳群	21 諏訪神社古墳	38 由良城跡	55 多肥庵寺	72 天満・宮西遺跡
5 喜岡城跡	22 川添淨水場遺跡	39 由良山城跡	56 回原遺跡	73 松楓・下所遺跡
6 小山古墳	23 高松茶臼山古墳群	40 南海道道路遺構	57 泊仮遺跡	74 神内城跡
7 小山・南谷遺跡	24 高松市茶臼山古墳	41 高野丸山古墳	58 井手東 I・II 遺跡	75 白山神社古墳
8 新田・本村遺跡	25 深本神社古墳	42 高野庵寺	59 居石遺跡	76 向城跡
9 山下古墳	26 田楽古墳	43 錐野城跡	60 居石城跡	77 大池遺跡
10 山下废寺	27 岡崎神社遺跡	44 平石上古墳群	61 蛙股遺跡	78 弘福寺御田西北地区比定地
11 岡山古墳群	28 前田城跡	45 伝木城跡	62 上天神遺跡	79 沼・長池Ⅱ遺跡
12 漆谷古墳群	29 金石山古墳群	46 拝師庵寺	63 太田下・須川遺跡	80 沼・長池Ⅰ遺跡
13 大空(州端山)遺跡	30 平尾古墳群	47 高木城跡	64 キモノド遺跡(佐藤城跡)	81 沼・松ノ木遺跡
14 南谷遺跡	31 潮溝(塙道)塚古墳	48 天満宮古墳	65 宮山城跡	82 林・坊城遺跡
15 久本古墳	32 平尾小古墳群	49 相百城跡	66 稲荷山古墳群	83 宮西・一角遺跡
16 北山古墳	33 前田城跡	50 南山遺跡	67 上ノ村城跡	84 空港跡地遺跡群
17 久米池遺跡	34 前田(宝寿寺)庵寺	51 弘福寺御田西北地区比定地	68 中ノ村城跡	85 六条城跡

付. 引用文献等

*引用・参照、参考とした文献のうち主なものは下記の通りである。

- 『香川県史8資料編 古代・中世史料』香川県1986
『香川県史3通史編 近世I』香川県1988
『生駒藩分限帳・生駒藩知行帳』合田学・上坂氏顕彰会1996
『東山崎・水田遺跡』香川県埋蔵文化財研究会1992
『空港跡地遺跡I』香川県埋蔵文化財研究会1996
『小山・南谷遺跡I』香川県埋蔵文化財研究会1997
『高松市太田地区周辺遺跡詳細分布調査概報』高松市歴史民俗協会1987
『讃岐国弘福寺領の調査 弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書』高松市教育委員会1992
『松林遺跡』高松市教育委員会1996
『木田郡誌』山田弥三吉編・聚海書林1982
『土地条件図』国土地理院1986
『今治市登畠遺跡出土資料展中世集落跡からの出土遺物』愛媛県埋蔵文化財調査センター1998
『瀬戸内の中国陶磁』広島県立歴史博物館1991
『一乗谷』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館1996
『揺れる大地 日本列島の地震史』寒川旭・同朋舎1997
『トイレの考古学』大田区立郷土博物館編・東京美術1997
『人体解剖学』藤田恒太郎・南江堂1995
『古人骨は語る 骨考古学ことはじめ』片山一道・同朋舎1993
『肥前陶磁』大橋康二・ニューサイエンス社1989
『備前焼』間壁忠彦・ニューサイエンス社1990
『日本の美術陶磁中世編』矢部良明・至文堂1986
『日本の美術陶磁近世編』河原正彦・至文堂1986
『やきものの鑑賞基礎知識』矢部良明・至文堂1993
『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編・真陽社1995
『瀬戸・美濃系大窯とその周辺～大窯生産の成立と展開～』瀬戸市埋蔵文化財センター1996
『清良記一親民鑑月集一』入交好脩・御茶の水書房1955
『絵巻物の建築を読む』小泉和子他編・東京大学出版会1996
『農業全書』宮崎安貞・「締圖要務」大歳永常・「農業自得」田村仁左衛門吉茂～
・『近世科学思想 上』岩波書店1972
『中世の葬送と呪術』藤沢典彦・「中世の葬場」恵美昌之
・『季刊考古学第39号 中世を考古学する』雄山閣1992
『地下に埋もれた民俗資料』谷川章雄・「発掘された近世陶磁』大橋康二
・『月刊 文化財』第一法規出版1991
『貿易陶磁器』龟井明徳・「文房具」水野和雄・「供養塔と納骨」藤沢典彦
・『季刊考古学第26号 戦国考古学のイメージ』雄山閣1989
『刀装具の美と諄』鈴木友也・『月刊 文化財』第一法規出版1989

第3章 調査の成果

第1節 土層序と遺跡の概要

高松平野北東部の一角を占める本遺跡は、北流する春日川・新川（及び吉田川）が形成した沖積面の氾濫原面にあり、まもなく海に注ぐ両河川によりその西と東を挟まれている。地形帶としては、南方（上流）2km弱に春日川・新川による自然堤防帶I、北1km弱にはこれら河川の三角洲帶II b、そして1km弱の間隔で東西に位置する両河川流路に囲まれ、三角洲帶II aに属する海拔2m余の低地にある。調査区は道路用地で、埋没旧河道を含む三角洲帶の水田を幅約20m、延べ約200mにわたり横断する。噴砂区東端から現道路等未調査部分を経てW I・II区東端に至る間が、埋没旧河道に挟まれ南北にのびる中洲状微高地である。遺構検出面での土地利用区分は噴砂区、E I・II区が耕作域、W I拡張区、W I・II区が居住域とみられる。

土層図は噴砂区では北壁を第4図に、W I区及びE区では南壁面断面土層（水平／垂直方向の縮尺比1:10）を第3図a、第3図bに示した。

宅地造成及び道路工事に伴う客土部分を除く地表（水田上面）標高は噴砂区で2.17～2.23m、W I拡張区で2.18～2.35m、W I区で2.18～2.32m、E I区では2.22～2.34mであり、埋没旧河道内にある噴砂区が僅かに低位にある。

①噴砂検出区

現耕作土直下に厚さ10cm弱の灰黄色シルト混り極粗砂層がみられる。前年試掘時所見も考慮すると春日川及び新川堤防が決壊した大正元年（1912）9月21日の水害による堆積とみられる。II、II'層は、近世後半の堆積と考えられるが新川堤防3カ所が決壊という慶應2年（1866）8月7日「寅年の大水」が伝えられる。III以下の層はその時期以前に存在した河道を埋積し、近世後期まで一時期安定していた面であろう。レンズ状の細疊層を挟む洪水砂層で、東に傾斜する層が重なっており旧河道断面にあたる。

ここで、IV層を裂き南北方向に蛇行しV層に覆われた噴砂を検出。遺物は少ないが近世中頃までのものであろう。VI層はほぼ20cm層厚で西へ延び、噴砂は埋積された旧河道内部の相対的に安定していた汀線状の部分に沿って発生したものとみられる。

②W I拡張区

W I拡張区は、旧中洲西縁辺部で旧河道に臨む立地である。東端の南北溝SD07を介してW I・II区に統くが据立柱建物柱穴群遺構面はW I区のV d層直下に当るV e層で検出される。両区に顕著な時期差は認められないが、20cm近くのレベル差があり、拡張区の方がより低温な条件下にあったとも考えられる。W I・II区に比し遺構の重複がより少なく、建物群は比較的短期間に廃絶して耕作域に転換されたものと思われる。

③W I・II区

W I・II区は、主として居住域である。中州状の微高地であるが東側は埋没旧河道にあたるE区に連続する。SD24付近を境界として、東半部と西半部では地山面のV d層において約10cmの段差がみられる。

東半部は現存の農道・水路による境界でE区と接するが、この境界線は一部残存する周辺の方格地割

からみてやや不自然な偏りがみられ、旧河道ぞいの渓水等による亂れが固定化された可能性もある。東西の段差は、流路の移動やそれに伴う人々も加わった結果であろう。因みにこの部分は繰り返し開削された南北方向の溝が集中する区域でもある。

このW区の包含層はおむね2時期に分かれ、このうちIV a～c層は木Xの後半期の遺構面でもあり、埋没した前半期の溝を浚渫、改削して踏襲した例等もみられる。柱穴等の遺構は、中世末～近世初期を中心とする遺物を伴ってV d層に切り込んでいる。ここに立地した集落は柱穴列の方位等から、同一面ではあるが若干の時期差をもって存続し、IV a～c層面に溝等の痕跡を残して廃絶し、近世後期にはIII層に覆われて耕作域に変貌したとみられる。

④E I・II区

西は、中州状の微高地に接する旧河道にあたり、3時期に大別できるほぼ均一な堆積が繰り返され、現耕作土が形成されている。主な包含層であるIV c層には中世末頃の遺物がみえる。地山面のV d層は1～2の柱穴を除き農耕関連で、終始耕作域であったことを示唆している。本区は、噴砂区にみる旧河道から、上流部で分岐して北東へ進む別の旧河道にあたり、土層は東へ向かってやや傾斜して堆積しており、以西に比べて約10cm低いレベルとなっている。

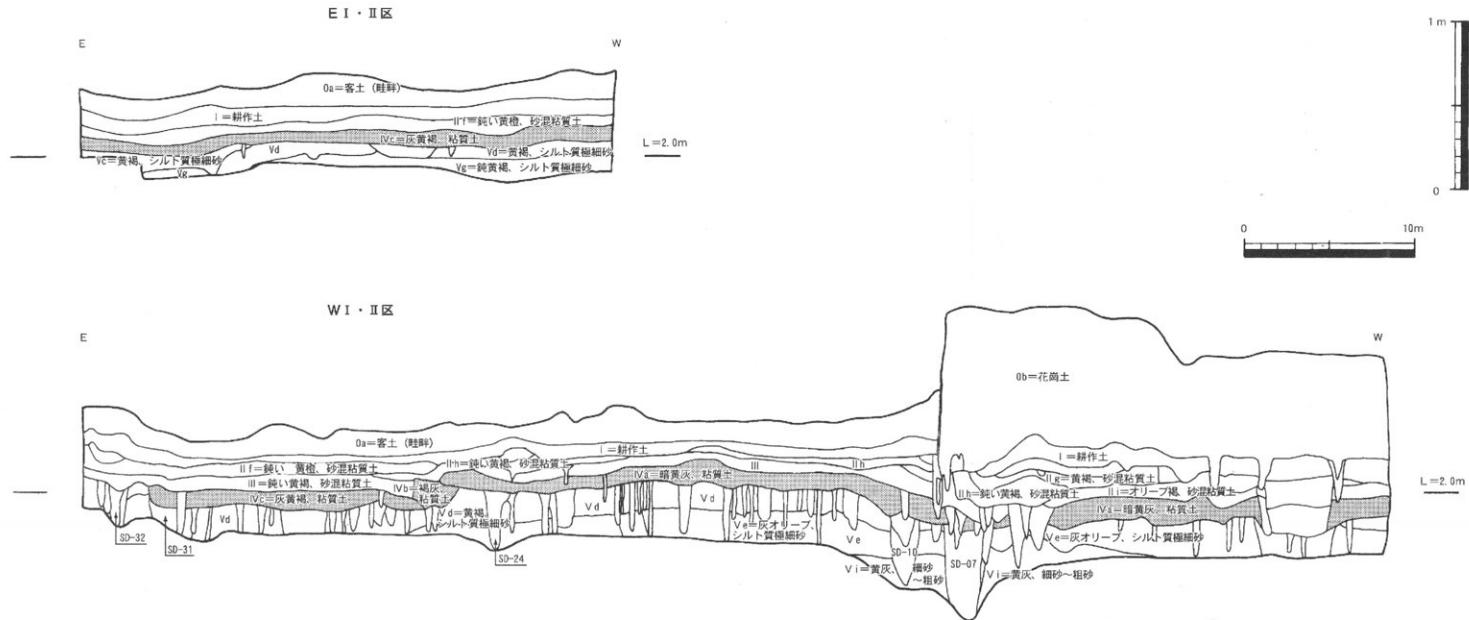
なお、出土遺物及び遺構からみて、川南・西遺跡は集落としては概ね15世紀中葉から17世紀中葉に亘って存続したと考えられる。そしてIV a層がかなり急激かつ大量の堆積をみた時期に集落としての機能が廃された状態となりその後耕作地として推移したと考えられる。

一方、この地域は17世紀前半代の西島八兵衛による干拓事業が知られる。また16世紀中頃、「木太ノ郷ノ新開ヨリ春日村マデ…水溜テ…其潮先山田郡小山ト云フ所迄サシ込タルトカヤ」(『南海通記』)と、低湿・無住の様相を伝えるが、これは、伝承による後代の著者の記述であり、かなり渾った時期の状況が反映したものとみるべきではなかろうか。

その後、下表の様な経過があり、現在も「散村」的景観を残しつつ変貌を続けている。

第1表 春日村他人口推移等 (『木田郡誌』による)

天保九年の戸数				天保九年の人口 (山田郡新田村庄屋村川久五郎氏手記/天保九年御巡見一帳萬覚書)				
	石居	掘立	計	男	女	計	合	計
富岡村	2	10	12	802	富岡村	15	17	32
春日村	39	127	166	春日村	367	314	681	今町村名
古高松村	310	69	379	古高松村	759	678	1437	(古高松村)
新田村	222	23	245	新田村	459	433	892	
山田郡	3483	2570	6053	山田郡	12918	11776	24694	
明治初年の戸数				明治初年の人口 (田村神社宮司松岡調査編纂「新撰諸岐風土記」)				
古高松村		488	1047	古高松村		1383		4150
新田村		312		新田村		1636		
春日村		247		春日村		1131		
明治20年以後の戸数				明治20年以後の人口				
古高松村	明治40	大正6	昭和2	古高松村	明治30	明治40	大正6	昭和2
	820	834	880	男	2529	2514	2974	2617
				女	2564	2456	2839	2578
				計	5093	4970	5813	5195
								5018



第3図 E区・W区南壁土層断面図

第2節 噴砂検出区の噴砂跡と遺物

1. 噴砂（液状化）跡

試掘調査では、現耕作土下に近世～近代と考えられる耕作土層2層がありその下は層厚1m以上の近世初頭までの洪水砂層とみられた。試掘坑東寄りで南北方向に延びる噴砂のつまつた亀裂=砂脈を検出した。下層の液状化による噴砂の発生に伴うものであったが、その他に特段の遺構は認められなかった。

本調査においては、砂脈の範囲・規模・形態等の確認を目的として、東西61m、南北8mの発掘区を設定した。調査区全面の現耕作土と近世後期までとみられる層を重機掘削し、試掘で検出の液状化跡の北側に（農道を介して）続く部分は、さらに人力により掘り下げた。

酸化鉄吸着の痕痕が目立つ層厚5cm前後のIV層直下で第6図の砂脈を検出した。3条が検出され、そのうち最長が延長1m80cm、最大幅4cmであり、立上がり断面の復元高は65cm以上となっている。これらは分布範囲・幅・長さとも試掘時の拡張レンチで確認した砂脈から想定したより小規模であり、試掘区の砂脈からみた延長方向は北西に向かってゆるやかに湾曲している。なお試掘の際に噴砂跡の断面図実測を行った壁面は、試掘時検出した最北端部の断面に当っていたが、今回の本調査でさきの未掘部分を北側へ約1m広げ併せて検出した。試掘時の検出状況と併せて第6図に結果を示した。

噴砂現象はⅢ層の堆積により形成された旧河道の汀線に沿って生じたと考えられ、砂脈の幅及び連続長はこの推定旧河道が湾曲して弧状に張り出す先端付近で最大となることを示唆すると考えられる。但しⅦ、Ⅸ層堆積前の旧河道からみれば、より流路中央に近く位置する。なお液状化跡の分布範囲については、東西方向では下記に述べる土層の状況からも2次的な旧河道の対岸部（調査区外）まで存在しないと考えられる。南北方向は旧河道汀線に沿いつつ延びる可能性があるが、調査区外であり推定の域を出ない。

第6図a～b線の南西側は土層図第4図のIV層を平面検出した部分で北東側はVII層にあたる。V、VII（及びVII'）層は、旧河道を埋積しながら北東へ落込む洪水砂層であるが、VII及びIX層は同様な傾きをみせながら西側へ向かっては水平な堆積を示して、同じ旧河道を埋積しながらも時期と性格が異なるらしい。旧河道を埋めその河幅を減少させたⅢ層が一定の安定期間を経過したのち、旧河道の残された流路が洪水によるV、VII（及びVII'）層の埋積で全て埋没したものではなかろうか。その後のある瞬間に噴砂を発生させた地震が起きたのである。

この地域で噴砂を発生させるような規模の中・近世地震の記録は、①慶長元年（1596）、②慶長9年（1605）、③宝永4年（1707）、④正徳元年（1711）、⑤安政元年（1854）等がある。このうち②は南海地震であるが、地震動が弱く津波だけが大きな特殊なタイプ（通称ヌルヌル地震）で当地域の文献記録には見当らない。④については史料的根拠が明確でないともいわれている。

噴砂は、上端が近世後半以降近代初頭以前の堆積とみられるII、II'層より更に下部にあるIV層に覆われていることから⑤については除外されよう。従って可能性があるものとして①②③が挙げられるが、②については液状化をもたらすような強い地震動でなかった可能性が高い。①については『高松市史年表』に「秋、閏、7月12日夜、たえず地震つづき、山がくずれ、地が裂け、白水がわき出た。四、五十日おさまらなかった（讃州府誌）（讃岐国大日記）（香川県災害史）」とあり、広く知られる「伏見地震」



第4図 噴砂検出区土層断面図

(1596IX 5)に符合するものである。「白水がわき出た」は、液状化現象の知見であろう。③については、『翁禪夜話』に「(宝永四年)冬十月三日夜天暗不見月、四日未刻地大動屋壁崩壊大半壊る、谷変為陸地折水溢漂物」とあり、本遺跡に近い木太地区に関して「山田郡木太郷冷川橋東半町許大通折水溢広六尺余」の見聞が残されている。

『消暑漫筆』で「土地割れて白キ水流れ出で、後ニは鼠色なる何とも合点の行かざる誕生じ候由」と記述する。「大通折水溢広六尺余」や「土地割れて白キ水流れ出で」等の表現は液状化現象でしばしば指摘される「白水」や地割れの状況を指すと考えられ、「鼠色なる何とも合点の行かざる」「誕生」とは、第6図の砂質検出平面図にみるような状況を述べたと考えられる。

『増補高松藩記』に「…五剣山一峯崩壊、火花如電轟驚數里、幕石悉倒」とあり、これから五剣山と直線距離6km余で木太地区とは指呼の間の本調査区でも同様の現象が起きた可能性は高い。試掘区の噴砂頂部には若干の隆起が遺存する。当時の地表に広がった噴砂が強い水勢による流失や人為的削平を受けず、一部分が残されたものである。このIV層(噴砂断面図ではIII)は色調・粒度等からみてもやや緩慢に堆積したとみられる。地震発生からさほど時間の経過がない時期の形成ではなかろうか。比較的安定した期間があった後、かなり大規模なII～I層の堆積が行われたと考えられる。

記録等から、IV層の堆積と土壤化を可能とする条件に、寛永14年(1637)西島八兵衛により完成という「下往選(松島～新川間の堤防)築造/福岡・木太・春日新田開拓」が仮定できる。その場合、II～II'層の堆積開始は、寛永14年(1637)から数年か長くとも10数年以内の時期と考えられる。このように地震発生は堆積開始(1637)前の数～10数年以内の1620～30年代頃の可能性が考えられるが、記録等にはその時期に噴砂を形成するような地震の発生はみえない。他方、IV層の堆積と土壤化は既に西島八兵衛による干拓以前の陸化の完了で一定進行し、それが干拓を可能とする前提条件の一つでもあり得たとする場合、寛永14年(1637)をさかのぼり、IV層の土壤化を要した10数年ないし数10年程度以前の堆積の開始が考えられ、17C初頭までの地震発生を想定すべきことになろう。

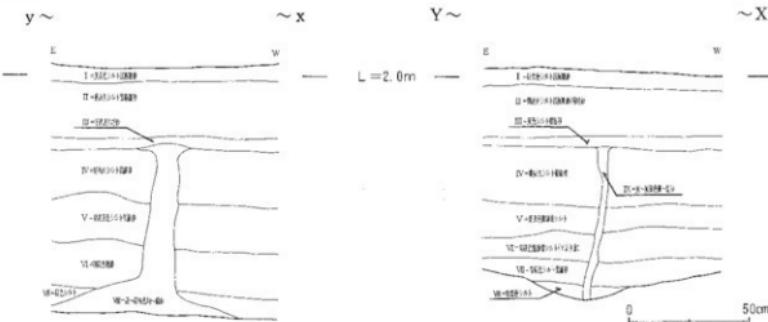
II～I'層が堆積したとみられる時期については、文献記録等からは以下の例が考えられる。a. 宝永7年(1710)「8月23日大風雨、堤防ことごとく決壊、田野が海と化した。溺死するもの百余、牛馬もまた溺死…木太・春日・海辺の民家は浸水したため路ばたに草小屋をたてて避難(高松市史年表)」「冬10月5日奥野林人大奉行が木太・春日堤防改修工事(同年表)」があり、次いでb. 享保7年(1722)「8月23日大風雨、堤防決壊、田野浸水三日に及ぶ。溺れ死ぬもの百余、牛馬もまた多く死ぬ。木太・春日の堤防くずれ(同年表)」「秋8月…23日大風雨堤防尽潰田野如海者三日山崩谷没ス、民多流散溺死者百餘人牛馬猪鹿亦多溺死ス、木太春日海濱細民以堤防壞海水漲其居造草舎ヲ於路傍居焉(續翁夜話)」

第2表 県内外噴砂・噴礫事例

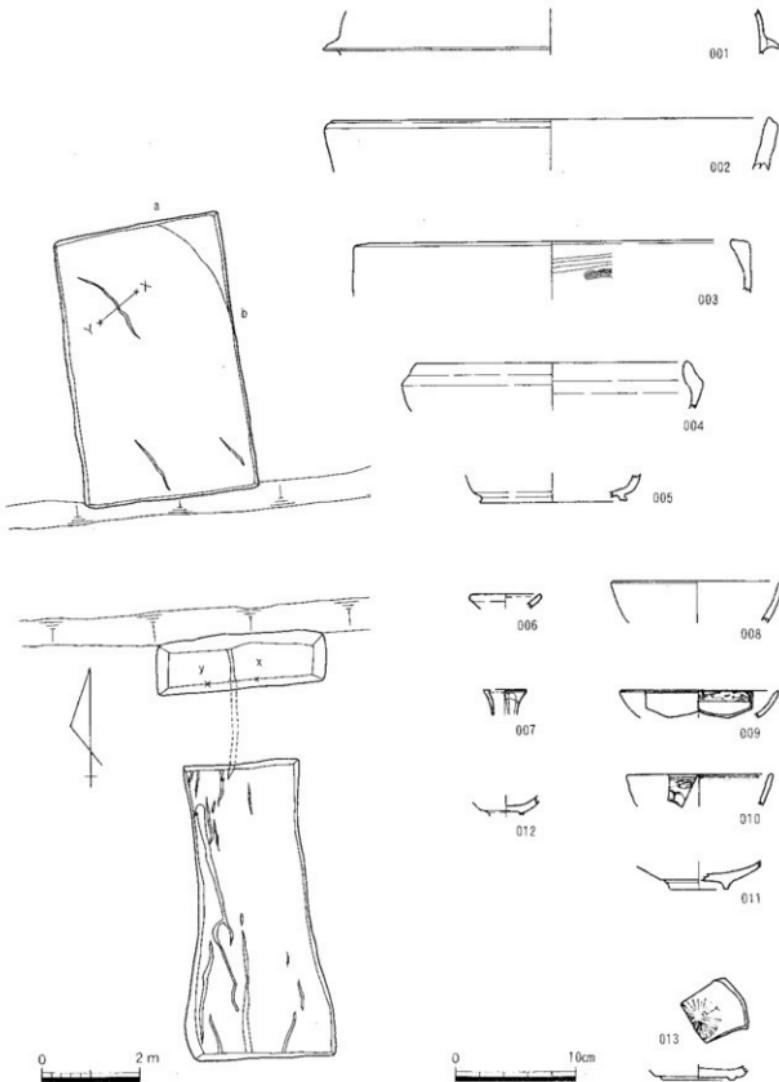
遺跡名	所在地	時期	記事 (*扇状地末端)
川南・西	高松市春日町	中世後半～近世中葉	1707? 沈没原面・旧海岸
川南・東	高松市春日町	近世	沈没原面・旧海岸
松林	高松市多肥上町	弥生中期中葉上器供献、礫	7地点全国例岡田初の2km*南海II/中央構造線/長尾斯前
空港跡地H4	高松市林町	1605/1707/1854南海	I-16区SR03深度=1.00m 中世柱穴切る*
六条上所	高松市六条町	近世以前	床土直下で検出*
田園比定地	高松市林町	弥生後期まで	平面径2-3m龜甲、『瓶II』*
弦打公民館	高松市鶴市町		筑城城跡
西ハゼ上居	高松市西ハゼ町	弥生時代(繩文晚?)	扇状地
西原	高松市多肥下町	古墳～中世後半	扇状地*
さくら莊	高松市林町	弥生時代?	礫、扇状地*
筑城城跡	高松市鶴市町	近世後期以前	
アゾノ	高知村市	150末	1498南海11～15C層裂き噴砂がそのまま被覆される
宮ノ前	徳島板野町	明治以降/15後半	現レシコン烟が切る1946/14後～16初溝内 南海
黒谷川都頭	徳島板野町	弥生V後半/古墳～奈良前半南海	円形住居床面に拡散、焼失家屋/Y末～古墳初層裂く
神宅	徳島上板町	安政南海	1854磁器片地層裂く
古城	徳島板野町	昭和or安政/15後半/1361南海	現耕土直下に達/15後半生活面拡散/14
黒谷川古城	徳島板野町	1605慶長1596伏見	室町柱穴埋土裂き17前～中水田層が覆う
黒谷川宮ノ前	徳島板野町	1361/古墳～奈良前半/Y南海	Y I 水田が切る/Y II 水田面上等4期
玉津田中	神戸市	1 5 9 6 伏見	礫
ポートアイランド	神戸市	1 9 9 5 兵庫県南部	最大礫φ34cm
田能高田	尼崎市	1 5 9 6 伏見	礫
御殿二宮	磐田市	1 8 5 4 安政東海	礫

試掘区

噴砂検出区



第5図 噴砂跡断面図



第6図 噴砂跡検出平面図

第7図 噴砂検出区遺物

「冬10月5日使奥野林大夫築木太春日堤防(同)」がみられる。a, b, とも元号は異なるが改修工事まで含め年月日が符合し、叙述の語句も共通であり奇異に感じるが、本遺跡が宝永～享保年間に規模の大きい地震と水害に遭遇したのは確定であろう。

遺構を欠く本遺跡の出土遺物は包含層への少量の流れ込み資料で、IV層以深の遺物が皆無に近いことから噴砂及びその原因となる地震発生時期の比定について必ずしも厳密な決め手とはならないが、II層に18C後半以降のものはみられず、むしろ17C代以前のものが主体である。

噴砂は、陶磁遺物の年代観との関係ではほぼ18C前半以前であって更にIV層が堆積してから一定の土壤化作用をうける期間をさかのぼる時点で起きた可能性が想定される。上記文献記録例との関連では、①、②又は③の可能性があり、当遺跡での地震動の強さを考えれば①、③の可能性が大となる。

なお、木太地区において現在の河川や埋没旧河道周辺で本遺跡と類似の立地条件にある場所では、埋没した液状化跡が存在する可能性が想定される。

2. 遺物

本発掘区は液状化跡以外に特段の遺構はない。遺物は試掘区を含めて流れ込みによるもので、主にII、II'層から出土し、それ以下の砂層中でも図化できないものを含め若干の出土がみられた。

①上層I

006は、青磁壊口縁小片である。釉は、灰オリーブで穏やかな光沢があり色調など一見SD09肥前磁器皿147に似るとみえるが釉の気泡量に差がある。口縁でも147が内抱えであるに対し一旦外反した口縁が端部で鋭角的に上方へ伸びて終る。龍泉窯系。14～15Cか。

007は、低火度焼成の急須柄（又は瓶口頸部？）片で黄茶色胎七。関西方面以東産。

②上層II

001は、瓦質茶釜片である。鍔外縁復元径は38cmである。003は、土師質釜口縁片である。復元口径30cm。内面ハケ調整。013は、灰釉、菊文印花ソギ瀬戸美濃陶皿である。釉は浅黄で摩耗のため光沢が減じている。高台断面は低い台形。高台内部無釉。文様・胎土・調整とともにWI拡張区SD07出土の115に酷似するが、焼成・釉調に微妙な差がある。16C末～17C初とみられる。

③拡張区噴砂跡検出面

008は、青磁碗口縁片である。釉はオリーブ灰でやや光沢が少ない。竜泉窯系であろう。16Cか。

④拡張区上層

004は、土師質壺口縁片である。復元口径22.2cm。002は、土師質釜口縁片である。009は、肥前染付小皿口縁片である。釉は灰白。内面周縁に墨線で区画した草花文帯、外縁に円周線文1条が巡り器壁は薄手。17C末～18C初か。010は、染付碗口縁片である。釉は灰白である。呉須はオリーブ黒を呈し内面周縁に円周線文1条が巡り、外縁は周線墨線文に上端を接した呉須の草花（？）文が描かれる。中国輸入品とみられる。16C～17Cか。

⑤拡張区噴砂跡下層

005は、須恵器壊底部。断面平行四辺形高台。僅かに摩耗。8～9Cか。

⑥試掘区噴砂跡上層（①、②相当）

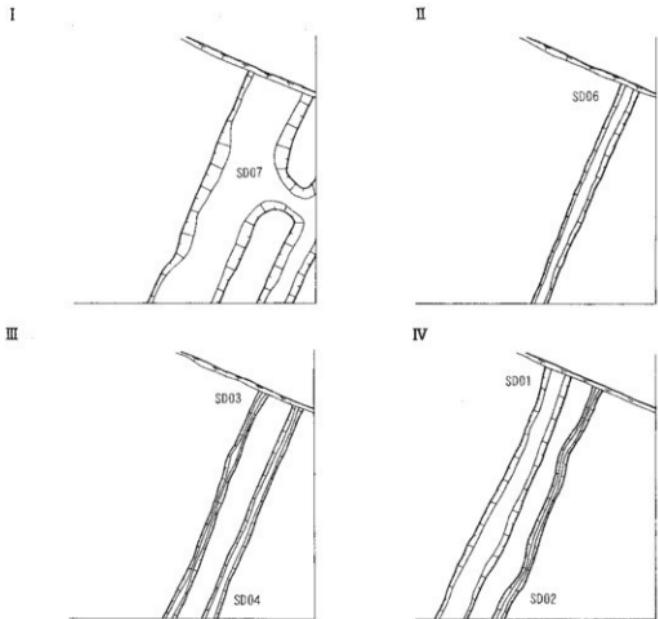
011は、肥前白磁皿底部片である。釉は灰白で高台無釉。見込みに蛇の目釉剥ぎを施す。体部下半に削りによる稜線2条が形成される。17C中葉か。

012は、肥前白磁紅皿（盃？）である。釉は灰白の全釉である。高台内面中央で僅かに兜巾状に盛り上がる。17C後半か。

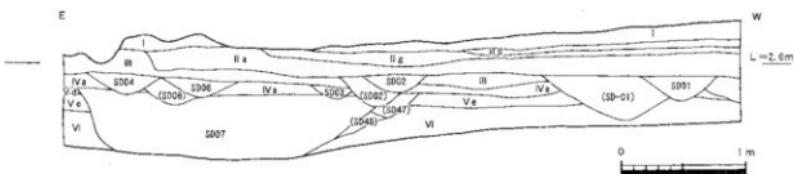
第3節 W I 拡張区の遺構と遺物

1. 溝

W I 拡張区での検出遺構は、一、二の例外を除き V_e 層にあり、W I・II区に比べて柱穴等の分布は疎らである。W I・II区との間に存在している SD01、02、07 等やW I・II区の溝、柱穴の大多数が掘り込まれるVd 層下部のV_e 層に当っている。W I 拡張区の遺構群はさほどの長期とはみられないものの時期差をもって先行、成立し、W I・II区の遺構群が成立する直前のVd 層堆積時又はそ



第8図 W I 拡張区溝遺構変遷図



第9図 W I 拡張区溝等土層断面図

れ以前に廃絶したことが知れる。何次かの改廢がみられるW I・II区の溝群及びそれらに区画された居住域と比較し存続期間はかなり短いと考えられる。なお、W I拡張区東端には、平面では未検出のSD-(47)とSD-(48)があり前者が後者を切って南北に走っている。SD-(48)はSD-(47)に切られており、さらにSD-(47)はSD07により切られている。

第5節でも述べるようにこれら水(道)路の南北方向線は条里坪界線(仮定)に沿うと考えられ、既に本調査区のVe層に住居群が成立する時期には、併せてSD-(48)が掘られ、その東縁の土地境界線、用・排水路として機能したことが想定される。さらに、これがSD07に継承され整備されて規模をひろげ、その後のW I・II区集落域の主要な施設として、その集落がIVa層の堆積により廃絶し農耕域としての新たな土地利用が始まる直前まで存続したものとみられる。

この後、SD07は、W I・II区の集落存続期間中にも引き続き機能したと考えられるが、第8図溝遣構変遷図(I~IV)にみると、W I・II区及びW I拡張区が耕作域に変わったと考えられる時期以後には、南北方向の水路としての機能は維持されるものの、縮小された規模の水路として推移しており、付与された機能の内容に変化があったことを示唆している。

2. 火葬墓

火葬墓壙=ST01は、長径105cm、短径60cm、深さ8cmを測り、平面形は長軸及び短軸の端部付近がやや突出する不整梢円形でほぼ南北に主軸をとる。断面形は浅い皿状を呈し埋土は多量の木炭細片、炭粉、木灰を含む黒灰色シルトである。短軸方向に沿い幅約15cm×長さ15~30cmの木炭片がほぼ等間隔に並ぶ状態で検出された。

これらを覆い、被熱による破裂・破碎で原形の判別困難な骨片がほぼ満遍なく散布していた。

検出当初は土壤の規模等から、小動物の埋葬土坑であり恐らく犬の可能性が最も高いのではないかとも想定した。しかし整理の段階で水洗したところ、ヒトの歯と判別できるものが多数確認され、微細な破片となっていた骨片も、乾燥を待ち接合したところヒトの頭蓋部の大半が復元でき、頸骨や頸骨、管状骨の一部分なども復元されて、骨片は火葬人骨であって、土壤は火葬墓遺構と考えられるものであることが判明した。

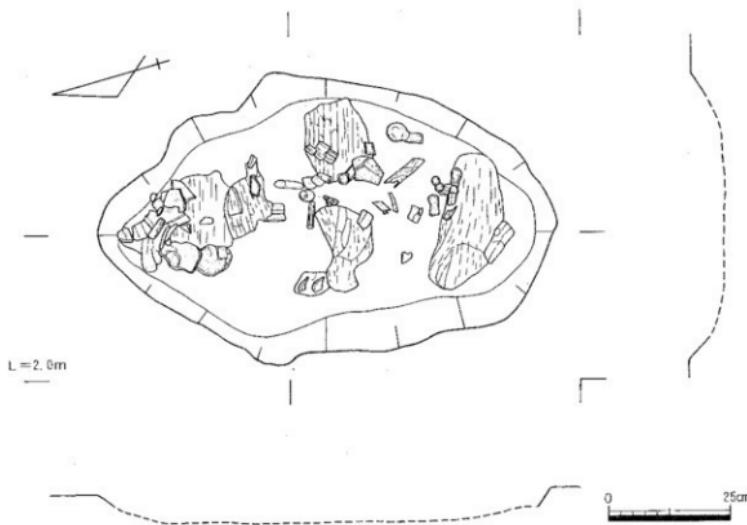
W I拡張区とW I・II区を画する南北方向の大溝=SD07は、条里地割坪界線に当るともみられるものであるが、ST01はその西岸から約10m西の地点に位置する。

素掘り土壤で、墓室ないし棺を構成するような木・石材などの使用はみられなかった。また副葬品等の遺物は一切検出されていない。墓壙の北端寄りに頭骨片・歯が集中しており、遺体は「北枕」であり、墓壙長径からみて屈曲位で安置されたものと考えられる。

先述のとおり本調査区は昭和30年代末以降に客土した住宅の跡地で、本遺構の検出面は客土前の旧耕作土床上にあたり、江戸期後半の形成とみられる包含層を除去した面である。盛土・配石等の上部施設の有無は不明である。

骨片は接合により頭頂骨、後頭骨、側頭骨、頸骨、上・下顎骨、歯等は全容乃至は部分的な形態が確認できる。他の部位は大部分が失われ一部断片が残るのみである。完全な焼骨の場合には硬化して比較的腐蝕がおそいとされるが、採取・復元できた骨の量は非常に少ない。

墓壙の深さが乏しい点も考えると、墓壙上部が耕作等により削除され、同時に火葬骨の一部も除去された可能性があろう。墓壙の底部を横断するように並んだ割木材状の木炭片が目立ちそれが骨片の下部



第10図 STO 1実測図

に多くあるところから、木材は遺体安置・着火前に配置されたとみられる。また糞状の炭化物細片も散見された。

頭骨片の残存状況等から、火葬後に集骨などを行って特定の墓域に改めて埋葬することなどはなかつたと考えられ、火葬の現場を直ちに覆土するなどして墓所としたものと考えられる。

火葬について下記のような民俗例が知られる。

- 「棺の下に松削木を並べその四方を藁で包んでから、かならず濡れ葦でその上を覆ってから火を付ける」
- 「大きなダマの木の根元に棺の入るほどの穴が掘ってあり、そこへ割木や炭を積んで焼く」
- 「前もって準備したオウギ（割木のこと）を積んでハコ（棺）を焼く」
- 「マクラという二本の大きな丸太の上に棺をのせ、割木四荷（八束）を側からそれに立てかける。さらにそのまわりを濡れ葦三枚で包むようにして火を付ける」
- 「栗の生木八荷（約一六〇貫）を棺のまわりに立て、その上を濡れ葦で巻く」等がある。

これらの例はいずれも野天の火葬で割木と濡れ葦の使用が共通して、火葬骨は集骨して自家や寺に納めるか周辺に散骨するというものであり、火葬現場をそのまま墓とするものでない。

- 「古い葬制とみてよいものに、屋敷に付属している控え地のすみに、先祖代々の石塔をもっている例がある…が、その分布は広い…関東地方で中世以来つづいているような旧家は、たいてい屋敷の中に墓をもっている。…いずれも近世初頭以降のものである。中世以前では…死者は多く屋敷内に土葬され、めじるしに常緑樹が植えられたらしい。…屋敷付属の墓地は…しばしば開発者とか遠祖の墓などに限られ、以後は墓地として継続的に使用していないものが少くない…高槻市の…宮田遺跡では、鎌倉時代の…土塚墓四が確認され…墓は屋敷の区画の隅にあったが、同様の例は…京都市南郊の上久世の中世集落址の発掘調査でもみられた…屋敷近くに埋葬地をもつとも…昔のほうがより一般的に、どこにでもみられる習俗^{**}とみられている。
- 「宮田遺跡をみると、12~14世紀の集落とされ…〈屋敷の艮（東北）に墓があるのは屋敷神の前身であろう〉…居住単位ごとに1~2基の屋敷墓しかなく、…屋敷墓に埋められた人以外は、他の近隣村落とともに、宮田遺跡北方約2^{*}mの山腹に位置する同時期の大共同墓地である岡本山古墓群に葬られたものと考えられている。東大阪市西ノ辻遺跡でも13~14世紀の住居址北西部から2基の木棺墓が並んで発掘された。ともに北向きで…膝を曲げた状態で横わっていた…墓の基底面は建物の立地する面と高低差が少なく、土饅頭式の墓だったと考えられる。…この他…でも同様に住居址近くから1~数基の木棺土葬または土葬の墳墓が発見されており、時代は10世紀から13世紀初頭にかけてのもので、11~12世紀に顯著で…いずれもその家の存続期間の全死者を葬ったとしては墓の数が少なく、…屋敷墓の被葬者は特別な人と考えられる。…これらの墓が建物の建設初期に作られていることから、屋敷を初めて建てた先祖および家族の墓ではないか」とされている。

静岡・一の谷大原遺跡で茶臼に付した土壇を土砂で埋め墓とした茶臼墓が検出されている。^{***}

*

S T 0 1は、本遺跡で確認した唯一の火葬・埋葬施設であり集落の一隅に単独で所在する。本遺跡の動物遺存体は溝埋土など数地点で出土をみており、馬（もしくは牛）とみられる歯や四肢骨が散見されたが、人骨とみられる遺物はS T 0 1の火葬骨以外には確認されなかった。

上記の所見や民俗例等から、S T 0 1は、火葬の方法については*諸例に共通しているが、單なる火葬場=ヤキバでなく、上述の例に多い土葬という形態はとらずに火葬現場をそのまま墓所とする#例類似の「屋敷に付属した…開発者とか遠祖など」の「屋敷墓」の一類型でないかと推定される。

その位置が「屋敷神の前身」として「屋敷の艮（東北）に」設けられた可能性を想定すれば、居住域は中洲状地形の上流側である本調査区南側にも広がるものとも考えられる。

前述の諸例を参照すると、骨片・木炭片以外の遺物を欠き、検出面の層位からは下限を江戸後半までとみるほかなく時期は特定できないものの、本遺跡の集落成立の比較的初期段階に設けられた、開発地主的な人物の「屋敷墓」とみることが出来るのではなかろうか。

* 「ムシロヅケノ溜」橋本鉄男『日本歴史民俗論集6家と村の儀礼』吉川弘文館

** 「屋敷付属の墓地」高取正男『同上』同

*** 「中世の屋敷墓」勝田至『同上』同

「中世の葬場」恵美昌之『季刊考古学39中世を考古学する』・(日考協'90)『日本考古学年報40』

3. 柱穴・建物跡

本遺跡は中世末～近世初期とみられる集落跡であるが、建物基礎としての石材等は全く検出せず、礎石建物は皆無であったといえる。後代、天保9年時には、春日村で石居（礎石建物）39戸、掘立127戸が存在した。これに対し古高松村では石居310、掘立69、新田村で石居222、掘立23であった（第1表）。古高松・新田地域に比し圧倒的に掘立が多いのは新しい沖積低地で後発新開地という劣悪な条件が後世まで影響を及ぼした結果ともみられる。

S D 0 7 以西のW I 拠張区で280以上の柱穴を検出しているが、多数錯綜し現地での調査期間の制約等もあり建物プランの正確な復元は困難である。精査をすれば未検出の柱穴が確認される可能性があり、柱根が遺存する柱穴であって建物プラン復元未了の例も少なくはなく、下記例は建物跡の一部に過ぎない「試案」とも言うべきものであろう。以下、本調査区では、S B 0 1、0 2、0 3の3件について記述した。

S B 0 1 (第11図-1)

調査区北寄りで検出した、平面長方形・東西方向で桁行2間（5.7m）、梁間1間（3.8m）、床面積21.7m²、主軸方向N-12.5° Eの掘立柱建物である。S B 0 2、0 3と重複する。東柱痕に当る様な遺構はみられず土間による平地式住居の可能性があろう。柱穴平面形はほぼ円形を呈し径18～45cmの範囲のものである。北西隅の柱穴は根石として並円礫がみられた。

S B 0 2 (第11図-2)

S B 0 1 と同じく調査区北寄りで検出した。同様にS B 0 1、0 3とは重複している。平面長方形で東西方向に伸びて、桁行2間（6.3m）、梁間1間（4.0m）、床面積27.2m²、主軸方向N-9.0° Eの掘立柱建物である。規模・形態多くの点でS B 0 1 と共通しており、東柱痕に当る様な遺構はここでも確認できない。従ってこの場合も土間による平地式住居の可能性があろう。本遺構の北西隅柱穴とS B 0 1 の北側中央の柱穴は切り合っており、S B 0 2 が後出とみられる。柱穴平面形はS B 0 1 よりも大ぶりでやや梢円形を呈する傾向があり長径でみて25～55cmの範囲に亘っている。

S B 0 1 と0 2 は、ほぼ同一位置・同規模で方位も少差であり同一の使用者による建て替えの可能性も考えられよう。

S B 0 3 (第11図-3)

S B 0 1、0 2 と重複しているが、両者とはやや南に偏して位置する。両者との先後関係を示す切り合いはなく、不明である。

S B 0 1、0 2 とは、平面形の規模がやや大きい点、位置が南寄りに移る点を除いた方位、柱穴の相対的位置関係等でみて同一の類型に属するものと考えられる。平面長方形・東西方向で桁行2間（8.2m）、梁間1間（4.1m）、床面積33.6m²、主軸方向N-10.5° Eの掘立柱建物である。S B 0 1、0 2 と同様に東柱痕に当る様な遺構はみられない。柱穴平面形はほぼ円形乃至梢円形を呈する。径25～35cmの範囲に收まりばらつきが少ない。

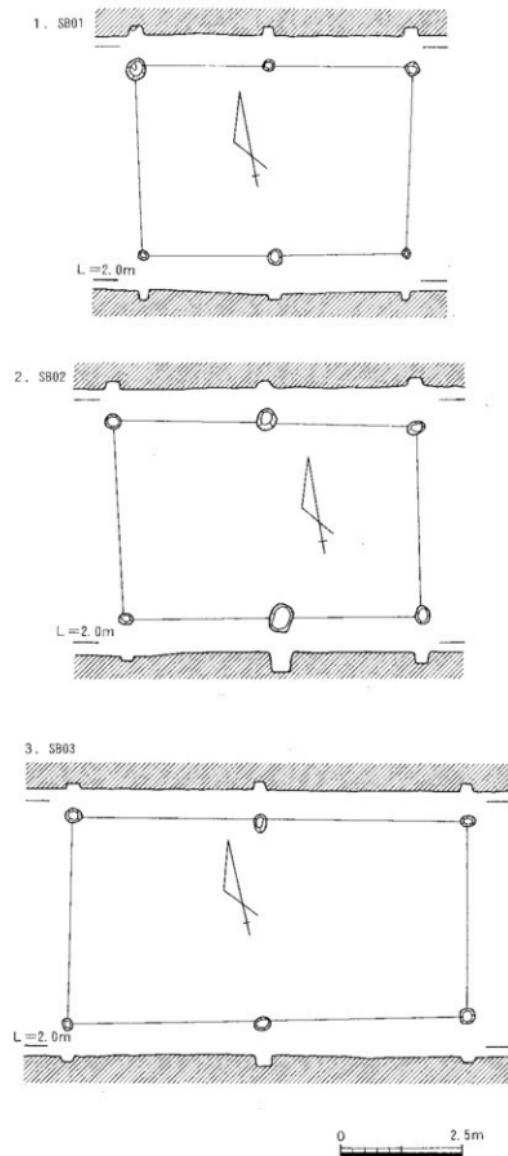
このSB03建屋内の南東隅に近い場所で火葬墓ST01が検出されている。既述のようにST01が「屋敷塗」・「屋敷神」等として存在したと考えると、マウンド・卒塔婆など地表に何らかの微表が残され世代を越えて伝えられると想定される。

一方、土層の堆積状況と遺構の切り込み=成立・存続時期について、本調査区はSD07を介して東側のWI・II区とは差があり、本調査区は集落として短期間であり且つより早く廃絶して、WI・II区に集落の存続がみられる時期に既に耕作城化していた事が知れる。

従って、SB03とST01は共に本調査区が耕作城化する以前の成立である事は明らかである。そこで、SB03とST01の先後関係であるが、微表が残りやすい墓所を除去した跡へ住居を建てたと考えるよりは、SB03除却乃至滅失後にST01成立とするのが自然であると考えられる。

WI・II区と比較して柱穴の密度が低い本調査区は、前者に比べ存続期間が短い。それでもSB01・02の関係でみれば建て替えの可能性も否無でないであろう。

「式年遷宮」は20年の周期で行われるが、本調査区において280個以上が検出されている柱穴数からみても掘立柱建物が3戸に留まる筈ではなく、一世代を20~30年として少くとも2~3世代、数十~百年程度の期間については、集落としての姿が維持されたと考えたい。

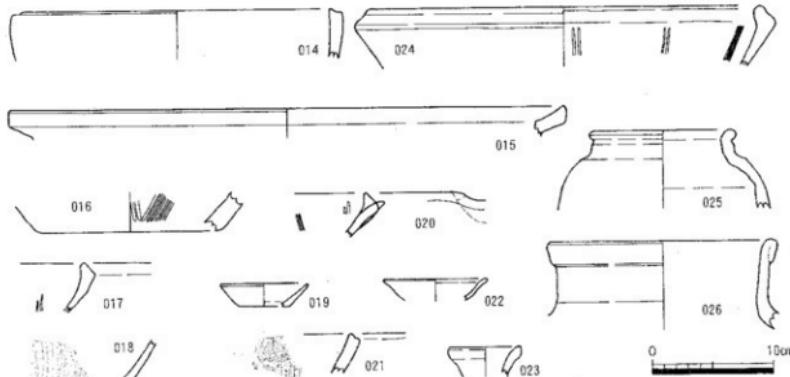


第11図 S B 0 1 ~ 0 3 平面・断面図

4. 遺物

S D O 1

019、022は、土師質小皿である。復元口径、前者は7cm。後者は8.2cm。015は、土師質鍋口縁片である。復元口径46.0cm。014は、土師質釜口縁である。復元口径25.4cm。024は、土師質擂鉢口縁である。復元口径32cm。焼成は堅緻。018は、土師質擂鉢体部で021と同個体。016は、土師質擂鉢底部である。櫛がき条溝は6条単位。020は、片口部含む土師質擂鉢口縁である。017、021は、土師質擂鉢口縁片である。025は、備前壺肩～口縁である。短い頸部から外反し先端を僅かに折り丸めて指ナデ。口径12.2cm。Ⅲ期、14C末か。023は、備前德利口縁である。口径5.8cm、内面にゴマ。Ⅴ期、16C中葉か。026は、備前壺口縁である。外反ぎみ頸部から折り返す玉縁は偏平。口縁端と肩は自然釉化で白濁。口径19cm。Ⅳ期、15Cか。



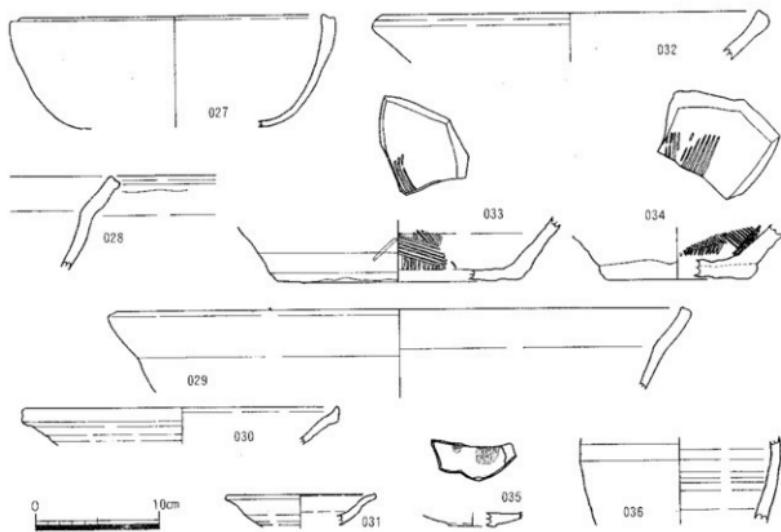
第12図 S D O 1 遺物

S D O 2

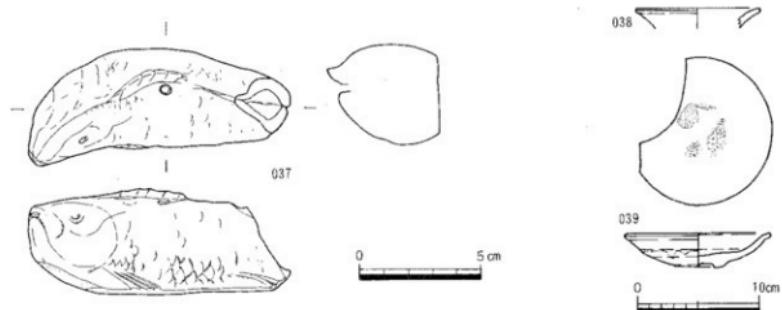
032は、土師質鍋口縁である。復元口径31cm。028、029は、土師質鍋口縁である。後者の復元口径46.7cmで外面に塗。027は、土師質釜である。口径25cm。底部薄く口縁端側は肥厚。

034は、備前擂鉢底部である。器表は灰褐、器表側断面各2mm程度が灰を呈し内部の胎土はにぶい櫛の焼成。粗い纖維の敷物上に復元径12cmの円盤状素地土を置き周縁に器壁の素地土を積み上げてナデ底面端部に指先をかけ取上げたと知れる。内面の櫛がきは11条／3.5cm、器壁基部で1.5cm間隔で放射し、これに斜交する櫛がきも施す。Ⅴ期、16C後半か。033は、備前擂鉢底部である。器表、胎土とともに灰褐を呈し焼成条件が034と同一でないことを示唆する。調整は034に似通う。底面器壁の接合は器壁下端が円盤外側にも出て接地。櫛がき条溝は11条／3.5cm。Ⅴ期、16C後半であろう。030は、東播系捏鉢口縁である。器表は灰、口縁端面は暗灰を呈する。復元口径は25.8cm、口縁は上端を引上げ僅かに内反し端面はほぼ垂直に拡張し下端は水平な面がび縫面と交わる。摩耗があり、第Ⅱ期第2段階(13C初頭)か。036は、備前壺胴部である。ロクロ作り横ナデで内面に凹凸が目立つ。復元最大径17cm。Ⅳ期、15Cか。

035は、砂目、灰釉唐津陶皿底部である。内反り高台。1610～30年代である。031は、灰釉砂目、溝縁唐津陶皿である。内面中ほどに段を有する。1610～30年代である。



第13図 SD02 遺物



第14図 SD03 遺物

S D O 3

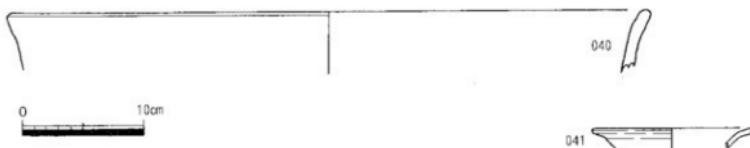
037は、肥前青磁「鯉」型水滴である。背鰭の線に沿い左右から型押し成形で縫合せる。初期伊万里の青磁にみる水色系の釉を施してやや貫入があり底面無袖。1630～40年代のもの。038は、端反り、灰釉瀬戸美濃皿口縁部である。16C末。039は、砂目、灰釉、溝縁唐津陶皿である。低い兜巾状に削り出した縮縁高台の周辺など外外面とも施釉にムラがあり露胎のままの部分を残す。S D O 2出土の一片と接合しほば完形に復元された。17C初のもの。

S D O 4

041は、端反りの唐津陶皿口縁片である。復元口径12.9cm。17C初のものである。

S D O 6

040は、土師質鍋口縁片である。復元口径52cmである。

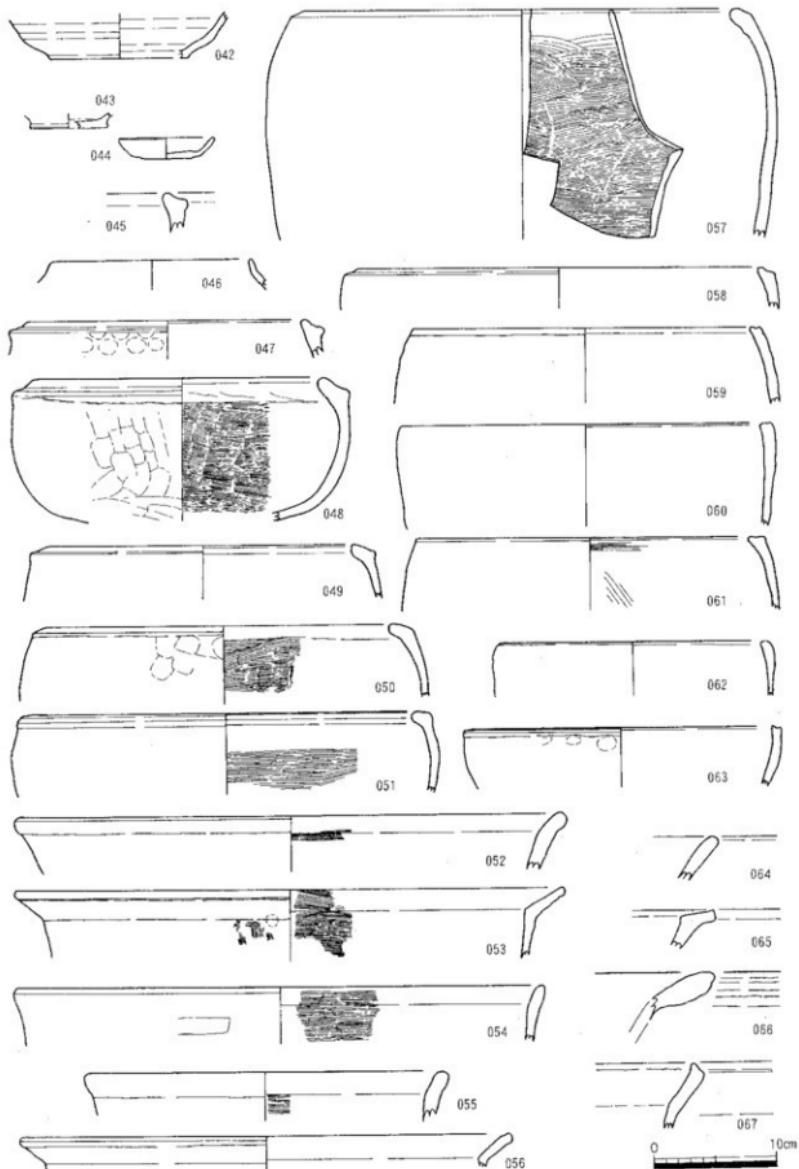


第15図 S D O 4 / 0 6 遺物

S D O 7

042は、須恵器坏底部である。胎土に粗砂を含み器表はザラつく。平高台を切り離し器壁は内寄ぎみに立上がり中位でやや外反する。043は、土師質椀底部である。円盤状の高台で復元底径 6.5cmである。この2点は「流れこみ」と考えられる。

044は、土師質小皿である。薄い円盤状に削り残す底部に板口痕。口径 8cm、器高1.75cm。045は、土師質釜口縁小片である。046は、土師質釜口縁小片である。復元口径は16.6cm。本遺跡羽釜類中では古相である。047は、土師質釜口縁片である。復元口径22.8cm。外面は煤が付着、指頭圧痕あり。048は、土師質釜である。口縁部ナデ、外面板ナデ、内面細かいハケ目調整である。外面煤付着。口径23.4cm。049は、土師質釜口縁片である。復元口径は24.9cm。050は、土師質釜口縁である。外面板ナデ、内面板ナデにハケ口。復元口径は29cm。051は、土師質釜である。内面はナデにハケ目。外面は煤付着。復元口径32cm。058は、土師質釜口縁片である。復元口径33.4cm。059は、土師質釜口縁である。復元口径28.9cm。060は、土師質釜口縁である。復元口径30.4cm。061は、土師質釜口縁である。内面ヘラ削りにハケ目。復元口径29.8cm。062は、土師質釜口縁である。外面は煤付着。復元口径21.6cm。063は、土師質釜口縁である。外面に指頭圧痕、煤付着。復元口径24.8cm。057は、土師質壺である。残存高18.7cm、口径35.6cmである。内外面ともナデ、浅黄橙を呈して内面は緻密なハケ目を加える。胎土は密で焼成良好、堅緻。器形、調整、色調、焼成等類似の例が他に数個体分認められる。052は、土師質鍋口縁である。外面に煤付着。復元口径44.6cm。053は、土師質鍋口縁である。内外面ともハケ口を施す。復元口径44.8cm。054は、土師質鍋口縁である。内面ハケ目を施す。外面煤付着。復元口径43.4cm。055は、土師質鍋口縁であ



第16図 SD07遺物-1

る。外面煤付着。復元口径29.4cm。056は、土師質鍋口縁片である。復元口径39.4cm。

064、065、066、067は、すべて土師質鍋口縁小片である。各個とも外面に煤が顯著。

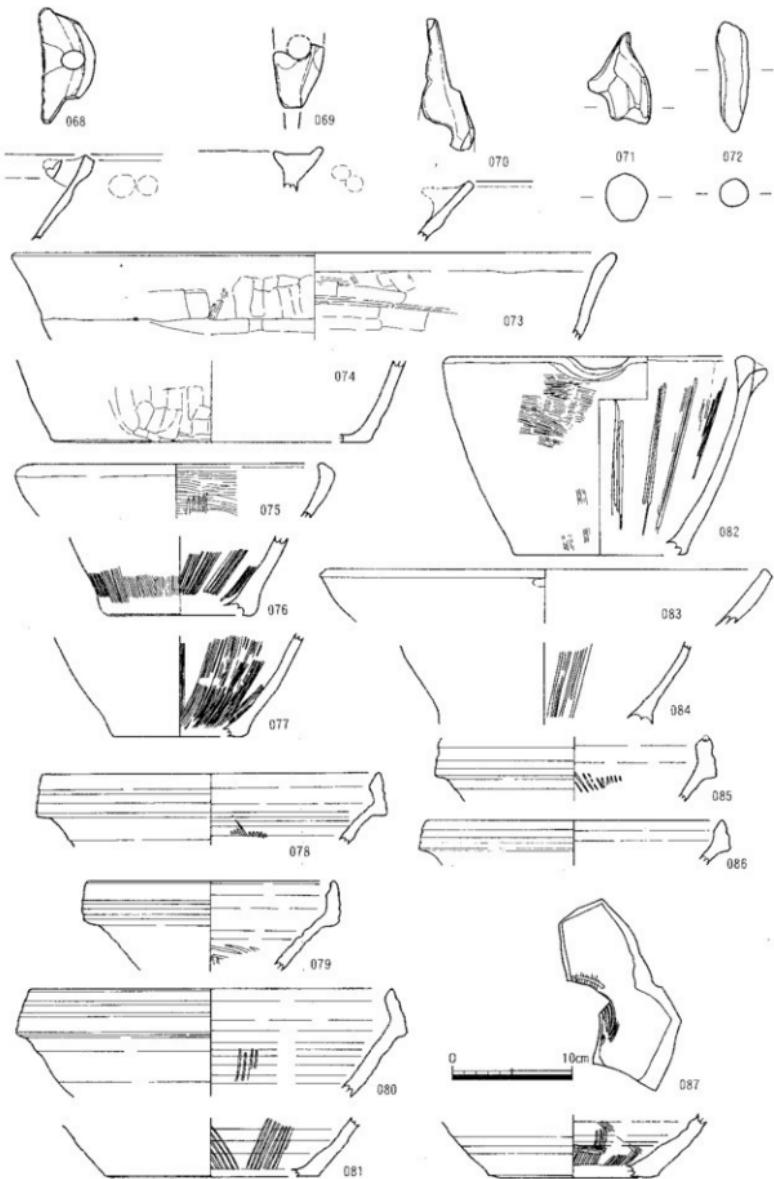
068、069、070は、いずれも内耳付土師質釜耳部である。内外面ともナデ。内面に接合痕、外面には指頭圧痕がみられる。071、072は、土師質釜（鍋）脚部片である。板ナデである。

073は、土師質鍋口縁である。外面は板ナデ、内面板ナデハケ目、口縁端部はヨコナデ。復元口径50.5cm。胎土に微砂粒含み焼成堅緻。074は、土師質甕底部である。外面板ナデ。内底面は黒く変色。復元底径26.0cm。075は、土師質擂鉢口縁である。にぶい黄褐色で外面ナデ、内面ハケ。焼成良好で堅緻。櫛がき条溝は6条単位。口径24cm。076は、土師質擂鉢底部である。内外面ともハケ目のうえナデ。櫛がき条溝は5条単位。底径11.8cm。胎土粗で細礫を含み調整粗放、焼成は良、堅緻。077は、土師質擂鉢底部である。底径10.8cm。082は、土師質擂鉢である。ほぼ完形の片口付で口径26cm。底径14.2cm。器高16.2cm。不揃いな5条単位櫛がき条溝は不等間隔で15カ所に施す。内面下半は使用による器面剥落が口立つ。内外面ハケ目、ナデ。口縁端部ヨコナデ。083は、土師質擂鉢口縁である。復元口径36.4cm。084は、土師質擂鉢の底部である。復元底径17.6cm。胎土は6mm以下の石英、長石含む。櫛がき条溝は9条単位。

078は、備前擂鉢口縁である。赤褐色を呈し口縁外面に凹線が巡り器面にロクロ整形の凹凸がみえる。V期、16C中葉か。079は、備前擂鉢口縁である。灰赤色を呈し、口縁は上方に立上り口縁内側上半をくぼませ内傾、外面下半に凹線3条を巡らす。器面にロクロ整形の凹凸あり。放射状櫛がき条溝を施し、これに斜交する条溝も重なる。V期、16C後葉。080は、備前擂鉢口縁である。にぶい赤褐色を呈し口縁平坦面はやや内傾するが垂直に近く幅広い伸びをみせ浅い凹線3条が巡る。内面の放射状櫛がき条溝は拡張して上部へ伸びる口縁基部から約4cm下までしか達せずその位置で隣接条溝との間隔は約6cmが残される。IV期後半、15C後半であろう。081は、備前擂鉢底部である。橙を呈し、深めで溝幅・深さ各約2mmの放射状櫛がき条溝8条を3.5cmの範囲に施す。条溝帯の間隔は底部起点では5mm。IV期、15C後半か。085は、備前擂鉢口縁である。にぶい褐色で口縁端面のみ黒褐を呈する。口縁下端の浅い溝状痕跡から焼成時重ね焼きによる発色差とみられる。口縁上端部を欠くが上方に立上った口縁外面に凹線2条を巡らし口縁上面をくぼませて内傾。ロクロ整形であろう。V期、16C中頃か。086は、備前擂鉢口縁片である。褐灰色を呈しやや低火度と思われる。凹線2条が巡る口縁端外面幅は2.5cmで内面上半をややくぼませ、先端は丸く作る。IV期後半、15C後半か。087は、備前擂鉢底部である。内面赤褐色、外側赤橙を呈し、破断面でみると胎土色調は内側半分灰白と外側半分赤橙で割然と分かれる。少なくとも器体下半部で異質の胎土を接ぎ合わせて成形したと考えられる。3.5cmの範囲に9条の放射状櫛がき条溝を施し、底部の条溝上りは櫛端が接しもしくは一部重なる状態で櫛使川は偏り実際の施条は3~4条である。内底面には溝状に櫛がき条溝があり器壁内面にも斜交する条溝を施す。ロクロ作りとみられる。V期後半、16C後半であろう。

088は、備前皿底部である。灰赤色を呈し底部からの器壁の立上がりの角度は緩やかで約6mmの均一な器厚である。見込みに窓印らしい線刻2条、底部は回転糸切。V期、16Cであろう。089は、備前小皿底部である。灰褐色を呈し底部回転糸切。底径5.4cm。V期、16Cであろう。

090は、備前火入れ（？）底部である。褐灰色で二次的被熱の色調を呈し、残存部分でみると形状、法量の範囲でV期の「火入れ」例に酷似。調整は底部と器壁の接合部内面を径約1cmの丸い木の棒先端で平面形で六角を呈するように押さえ断面半円形の痕跡を残す。その約2cm上部から幅約1.5cmの刷毛乃至櫛状器具で縱方向に撫で上げる。器形から一応V期と考える。093は、備前甕底部である。外面は灰褐色で



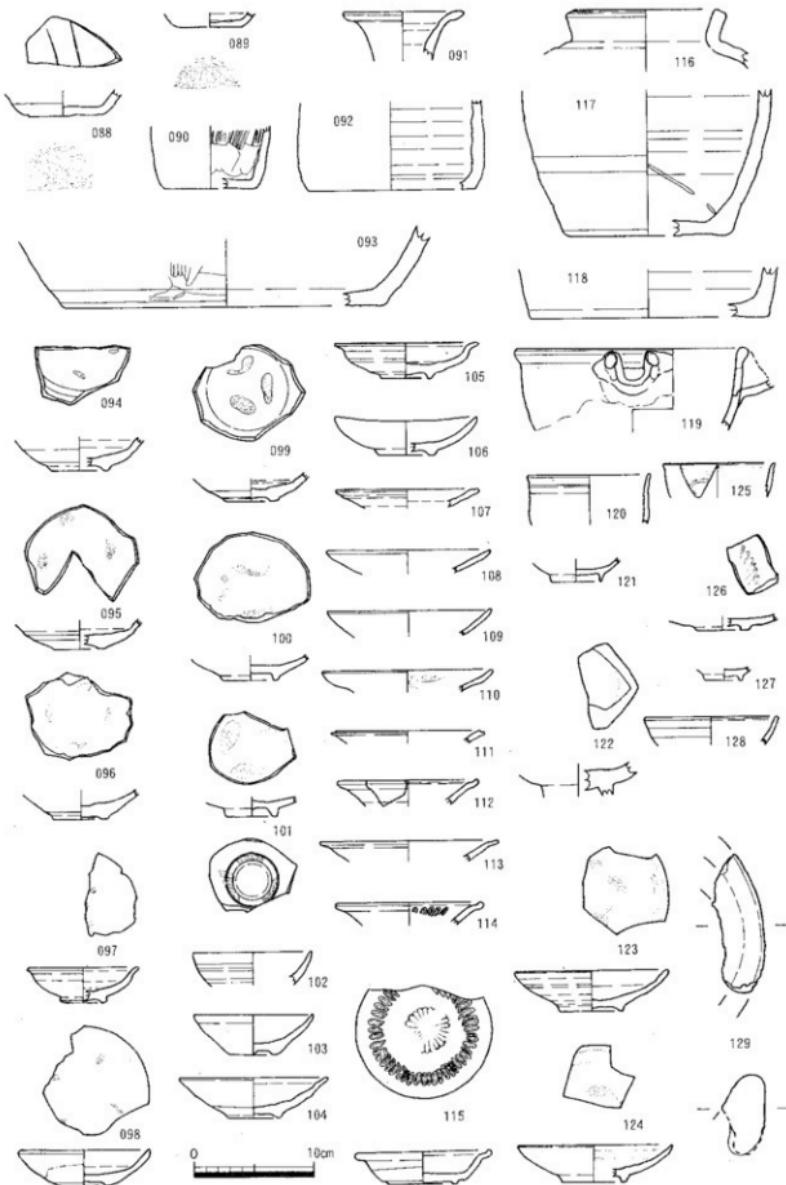
第17図 S D O 7 遺物-2

やや低火度とみられる。内面はゴマ状・自然釉が著しく胎土に径数mmの砂粒。外面は底部から約3cmがヨコ、その上部に継のヘラ。IV期、15Cか。

091は、備前瓶口縁片である。灰褐色を呈し復元口縁径は10cm。口縁は強く外反し端部上面の数mm幅部分は水平に近い。焼成良好。III期後半以降か。

092は、備前壺乃至水指・丸水類とみえる底部である。器壁は薄手で底部約5mm厚。ロクロ作りとみられ底部はヘラ削り。底径13.8cm。IV期以降か。116は、備前壺口縁である。486と同一個体で接合し口径は12.5cm。灰赤～赤褐色を呈し口縁端・肩の一部にはゴマ。赤灰である。破断面に3-5mm厚で芯状の還元がある。肩部にロクロ整形により凹凸が巡る。V期、16C後葉であろう。117は、備前壺底部である。粘土紐巻上げとみられ内面に接合痕。底径は12.8cm。IV期、15Cであろう。118は、備前壺底部片である。内底面にゴマ。IV期のものか。

094は、胎土目、灰釉唐津陶皿底部である。見込みから内反して立上がる器壁が口縁部方向へ外反し稜をなす。にぶい赤褐色の胎土で釉は灰黄褐色を呈し貫入をみる。外面下半部露胎、深めの内反り高台。1590～1620年代である。095は、胎土目、灰釉唐津陶皿底部である。094類似の成型は口縁への外反が稜を作るには至らない。釉は暗オリーブ、胎土目外側で貫入が著しい。外面下半は露胎であるが高火度により光沢を持つ赤褐色に発色。低い内反り高台で三日月状豊付。1590～1620年代である。096は、胎土目、灰釉唐津陶皿底部である。094、095に比し釉脆弱、摩耗により光沢を失う。外面下半は露胎で三日月高台。他の皿と重ね繰り返し使用されたためとみられる滑らかな触感の摩耗がある。この種の皿内面に合致した曲面を呈する。類似の皿で同様の状況を示すものが少なくない。1590～1620年代である。097は、胎土目、灰釉唐津陶皿である。ほぼ完形。本遺跡で希少例の小型で口径8.9cm。釉はオリーブ黃を呈し微細な貫入。凹んだ見込み中央に胎土目。相対的に深めの器壁が延び外反し外周幅約8mmの口縁部が巡る。端部はその延長方向と直角に切断し、歪と言えなくもない器形で高台は兜巾状に削出す。096同様に削付は摩耗し曲面をなす。1590～1620年代である。098は、胎土目、石灰釉唐津陶皿ではほぼ完形。103近似で器壁が内抱えぎみに立上る。灰色でやや厚みある釉を施す。底面は薪窓底風につくり釘彫りふうに螺旋状に浅く削り込む。口径10.7cm。1590～1620年代である。099は、灰釉、砂目唐津陶皿である。光沢の強いオリーブ黄の釉に、見込みを除き貫入がみられる。見込みから急勾配で立上がり外反して口縁へ伸び稜を形成する。外面下半は露胎で兜巾高台。1610～1630年代である。100は、灰釉、砂目唐津陶皿である。やや粗い赤褐色の胎土で武雄系。外面下半は露胎。1610～1630年代である。101は、灰釉、砂目唐津陶皿である。高台内部まで灰白の全釉で内外面ともに貫入。深く削り込む輪高台内部は兜巾状に盛る。17C初である。102は、灰釉唐津陶皿口縁である。口縁は内抱え気味に立上がり端部は摩耗がみられ釉は内面黄褐色、外面無光沢の淡黄に掛けわけ。胎土はにぶい赤褐色、武雄系である。16C末頃であろう。103は、石灰釉、胎土口唐津陶皿である。口径10cmと小振りで口縁にかけ内抱えで立上がる。薪窓底状の無高台で底面を兜巾状に削り出し疊付が三日月高台風に残る。外面の釉は口縁から1.5cm以内に限られ以下は露胎である。104は、灰釉、胎土口唐津陶皿である。器壁が口縁端部にかけ約1cm幅で直線的に外反、稜線を形成している。低い内反り高台。外面は口縁端から2.5cmの範囲、内面も径2cm内外の2カ所の無釉部分が残る。1590～1620年代のもの。105は、灰釉、砂目唐津陶皿である。兜巾状の高台内部を除き全体に灰釉オリーブの施釉。見込みに砂目痕跡は皆無に近く高台疊付に砂が付着する。口縁端は水平に近い外反。1610～1630年代である。106は、灰釉唐津陶皿である。釉は灰釉オリーブを呈し外面下半部は無釉。胎土中に径3mm以下の砂粒が混入。全体に滑らかな内抱えに成型し輪高台を削出している。17C初のもの



第18図 SD07遺物-3

である。107は、灰釉、溝縁唐津陶皿口縁である。調整、釉質・色調等は 111に酷似。17C初である。

108は、灰釉、鉄絵肥前陶皿口縁である。鉄絵は小部分で文様不明である。成型は 109、110に酷似。釉の白濁ではなく光沢をもつ灰オリーブ。17C初である。109は、灰釉、鉄絵唐津陶皿口縁である。肩の薄い白濁した釉で 110に酷似。鉄絵は小部分のみ。外面施釉は最大幅 3.5cm程度。17C初のもの。110は、灰釉、鉄絵唐津陶皿口縁である。肩の薄い白濁釉で鉄絵は釉の上から筆をおろし、長さ 1~3cm の円弧状にはねあげた抽象的なものである。外面は口縁周辺 1cm未満に施釉、底部に向かって垂れ落ちた部分もある。17C初のもの。111は、灰釉、溝縁唐津陶皿口縁片である。17C初のもの。112は、肥前陶皿口縁である。黒褐色の鉄釉を施す。口縁端部は、浅いが溝縁状を呈する。外面下半は露胎とみられる。17C前半のものである。113は、灰釉唐津陶皿口縁である。口縁部は端反り状に外反。胎土の影響で器面には細かな凹凸がみえ浅黄を呈する。17C前半である。

114は、灰釉、折縁、瀬戸美濃ソギ皿口縁である。低火度のためか釉は摩耗・剥落をみる。16C末のもの。115は、灰釉、折縁、菊文印花、ソギ瀬戸美濃陶皿である。にぶい黄を呈し、16C末のものである。

119は、唐津片口である。長石釉と思われる口縁部は釉剥ぎを施す。片口付け根内面の穿孔部を挟んで、横位置で最大幅 1.5cm の鋸鉗形の無釉部分がある。外面は片口下部から底部にかけ無釉で鉄漿を塗布する。無文と思われるが器形等は内田直屋窯「絵唐津飛鳥文片口」と同巧である。17C前半であろう。

120は、灰釉、唐津陶碗口縁部である。微細な貫入と灰オリーブでムラのない色調・施釉は 105に類似。僅かなふくらみを持ち立上がる器壁が口縁端でやや外反する。17C前半である。

121は、染付（青花）磁器碗底部片である。高台外面上端に呉須で綫旋文 2 条が一周する。高台内部を含め全釉であり外面に貫入がみられる。中国輸入品。16Cのものである。122は、青磁碗底部である。見込み中央の厚さ 1.7cm を測る重厚な造りである。見込みには高台外縁部に対応する位置に沿うように、復元径約 6cm の輪旋円圈文 1 条が巡る。高台内縁は疊付にかけて漏斗状にひろがり外縁とともに施釉する。内底面は無釉、龍泉窯、15~16C のものである。

125は、肥前染付そば猪口口縁である。内外面とも口縁下部に圈線文 2 条があり外面は梅文が加わる。染付は黒釉に発色する。17C 初か。126は、肥前染付磁器底部である。見込みにはやや黒みを帯びた淡い呉須で柳（？）文様が描かれる。全釉で貫入があり疊付軸際には紗が付着。17C前半である。127は、白磁小鉢底部である。釉は厚い部分で微かに青味を呈し疊付を除き全釉である。見込み中心と高台内中央にわずかに兜巾状高まりがある。胎土は白色で透明感が少ない。肥前と思われるが中国製の可能性も皆無でない。17C前半である。128は、肥前磁器碗口縁である。外面は僅かに内抱えの口縁下部から 6mm、9mm を隔てた 3 条の沈線が巡る。釉は灰白。123は、砂目、「半陶半磁」肥前皿である。陶器から磁器への移行期のものである。内面の口縁下部沿いに書いた呉須染付で約 3mm 幅の円圈線 2 条が巡る。兜巾状高まりを中央部にわずかに持つ高台内部を含め全体に施釉。1610~1620年代である。124は、砂目半陶半磁肥前染付皿である。釉は細かい貫入を持つ浅黄で口縁寄りに呉須による 2 条の円圈線文がめぐる。全釉であり外面は無文で 123と同巧である。

129は、石臼（土臼）片である。材質は凝灰角砾岩である。

S D 0 8 (S D 0 7 ~ 10間)

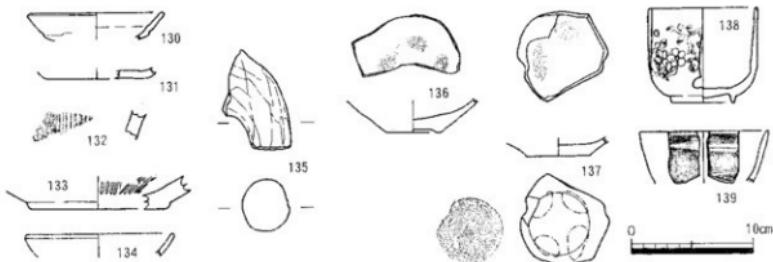
S D 0 7 に類似の遺物が散見されるが、細片で図示できるものはなかった。

W I 拡張区包含層

130は、土師質小皿片である。復元口径10.8cm。胎土微砂あり、焼成良。131は、土師質坏底部片である。復元底径8cm。132は、土師質捕鉢体部片である。133は、土師質捕鉢底部片である。復元底径11cm。135は、土師質釜（鍋）脚部片である。残存高8.1cmである。

134は、備前小皿口縁片である。赤橙を呈し、口縁に油煙らしい付着物。燈明皿。17Cか。

138は、染付肥前磁器碗である。深め、丸型湯呑で釉際に砂付着、疊付以外全釉。内面無文、外面梅文。1620～1640年代である。136は、長石釉、砂目唐津陶皿底部である。釉はザラつき白濁で外面下半は露胎。高台は低い兜山状であるが外側の削り出しが殆どなく基筒底に近い。1610～1630年代である。137は、唐津陶皿（鉢？）底部である。やや粒子が粗い胎土でにぶい橙を呈し、内面一部分に散漫な釉がみられるが焼成中の自然釉かも知れない。外面残存部分は無釉である。底面は糸切り。武雄系とみられる。砂自体は付着しないが外面4、内面3の砂目痕跡。1610～1630年代である。139は、鉄釉唐津陶碗口縁である。光沢に富む灰黄褐釉に貫入。外面口縁端直下と1cm下部に内上による幅約2mmのヨコはけ。内面も口縁直下、中、下に白線3条がある。武雄系で本遺跡の陶磁中例外的に時期が下る。1690～1710年代のものである。



第19図 W I 拡張区包含層遺物

第4節 W I・II区の遺構と遺物

1. 溝

溝は、W I 拡張区及びW I・II区を通じてSD 0 1～4 6（第3表）を確認した。これらはIII（最上）層に掘られたSD 0 1・0 2・3 4、IV層に掘られたSD 0 3・0 4・0 6・0 9・2 9である。さらにV層では35条が確認されて基本的に三時期（面）に分かれる。このうちSD 0 1～0 8は、W I 拡張区で検出したものである。土層断面等と照合したところ再掘削による同一流路内の重複や、短小な削平をうけて溝状を呈する遺構で草耕痕と判別困難なもの等もあり、番号を付した以外にも若干の溝が存在した可能性がある。

①III層（／IVa層）

III層のSD 0 2はW I 拡張区とW I・II区の境界にあたる位置で南北に走り（北流）、90cm西に隔てて

並走するSD 0 1とは対をなすと考えられる。後者は同一地表面であるがIV a層に切り込み上層断面でみる限り同時並存とみられる。同一面で両者に挟まれる幅90cm、南北10m余のⅢ層部分は、よく緊密な検出面の状況も含め道路として機能したと考えて矛盾はない。その位置は本遺跡の南方一帯に遺存する旧山田郡条里坪界線を延長した線上にほぼ一致する。

この面で同時（近世末期頃まで）並存したと考えられる遺構は、約50m東で南北方向に走る溝SD 3 4で、該期にはE区も含めて調査区全域が農耕域であったと考えられる。SD 0 1・0 2及びⅢ層の道路状部分は、周辺農耕域を条里坪界線に沿って区画する主な土地境界および交通、用・排水路としての役割を担ったと想定される。SD 0 1、0 2（ともに改削あり）は、SD 3 4とともに同一時期に周辺農耕域に灌漑・排水を行なっていたと考えられる。

②IV層

IV層では、SD 0 3・0 4・0 6・0 9及び2 9がみられる。これらは先行期の集落域生活面であるV層における、より大規模のSD 0 7・1 0・3 0等を、洪水砂IV a～IV c層が埋没させた跡を踏襲し再掘されている。このIV層面に柱痕等は認められず専ら耕作域として新たな土地利用が行われたことを示唆する。

第3表 層別溝一覧

(SD 0 5, 2 2, 2 3欠番)

	方向	幅	長さ		方向	幅	長さ	
III層					SD - 2 6	NS	55	1485+
SD - 0 1	NS	130	1090+		SD - 2 8	WE	65	1700+
SD - 0 2	NS	40	995+		SD - 3 0	NS	175	1885+
SD - 3 4	NS	60	1880+		SD - 3 1	NS	70+	1865+
IV層					SD - 3 2	NS	140	1885+
SD - 0 3	NS	45	975+		SD - 3 3	NS	35	1875+
SD - 0 4	NS	50	905+		SD - 3 5	WE	25	1135+
SD - 0 6	NS	75	915+		SD - 3 8	L	60	445+
SD - 0 9	NS	70	2060+		SD - 4 0	NS	30+	1440+
SD - 2 9	NS	55	1800+		SD - 4 2	NS	45	815+ 分岐
V層					SD - 4 3	WE	15	190+
SD - 0 7	NS	300	1040+		SD - (47)	NS	44+	+ 断面
SD - 0 8	WE	250	150		SD - (48)	NS	70+	+ 断面
SD - 1 0	NS	175	2180+		V層			
SD - 1 1	WE	50	2790	(切合なし)	SD - 1 5	WE	35	845
SD - 1 2	L	100	2180+		SD - 2 1	WE	60	600
SD - 1 3	WE	70	3220+		SD - 2 7	NS	50	1070+
SD - 1 4	WE	60	2315		SD - 3 6	WE	30	290+
SD - 1 6	WE	50	1790+		SD - 3 7	WE	25	220
SD - 1 7	WE	50	1260		SD - 3 9	NS	25	810
SD - 1 8	WE	55+	1300		SD - 4 1	NS	20	345
SD - 1 9	WE	35	910+		SD - 4 4	WE	25	220
SD - 2 0	WE	40+	890+		SD - 4 5	NS	25	810 單位
SD - 2 4	L	110	2575+		SD - 4 6	NS	20	=cm
SD - 2 5	NS	60	1560+					

ここでは、SD 03・06及びSD 04・09が、道路状部分の両側に一对の水路を伴って南北に走る。III層の場合と同様の性格と機能とが想定され、断面にみる限りSD 03・06と04・09は、これに挟まれた道路状の部分と共に同時並存の可能性を示す。SD 06に改削があり改削前の06が04に切られている点からもSD 03・06及びその道路状部分が先行したとみられる。但しIV層の埋積はWI・II区のSD 31東縁以東にはみられず、WI・II区主要部と様相を異にしている。さらに、SD 24の東西両側でIV層による埋積状況には異同があり、3次に亘るIV層の埋積のうち西半は最上部IV a層のみ堆積、東半では最下部IV c層上面まで掘削（流失？）、レベル差約20cmを生じている。前代V層が地表面であって人工又は洪水等により段差を生じたのであろう。なおSD 29は道路状部分を伴わず、III層のSD 34でも同様である。西侧約50m（＝半町）の坪界？部分に比べ境界的役割がより稀薄であり、土地界としてはWI・II区/WI拡張区境界付近がより基本的性格を備えていたことを示唆する。

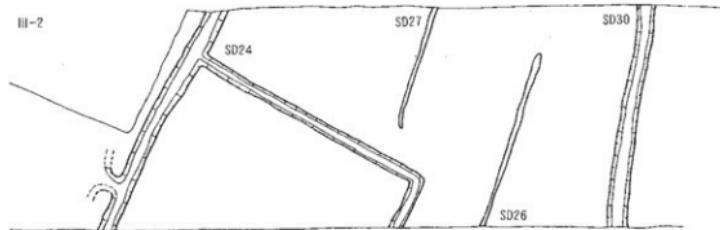
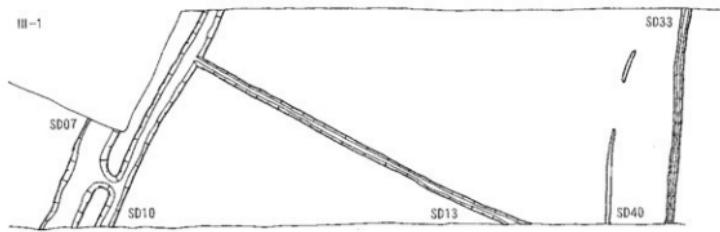
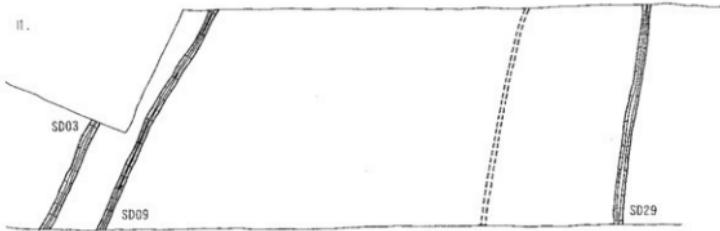
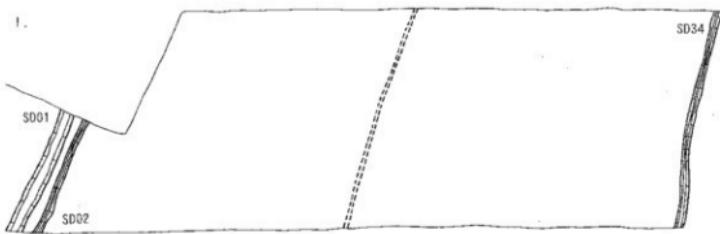
③V層

本遺跡遺構の大部分はV層存続期間中に立地し、この面が比較的長期に安定な状態を保ったことを示している。溝・土坑・柱穴等遺構面に複雑な切り合いがみられ、建替え、改削が繰り返される。SD 10以東の溝等と以西の遺構面には直接の切り合いが乏しく、先後関係が明確でないが溝の方位等から後者がやや先行と思われる。ここではSD 07・10がまず成立したと考えられる。土層断面で直ちには判別できないが、臨海部沖積地という立地で、方位・規模等に、排水と方格地割を意識した区画目的の計画性が窺われる。出土遺物からみて、SD 07の上限は15世紀頃であろう。他の溝との切り合いで、東西方向ではほぼ直交するSD 11・28とさほど時期差なく設けたとみられ、WII区にあたる北半部分が居住域として立地するに対応したかと考えられる。方位から、SD 35もほぼこの時期か。

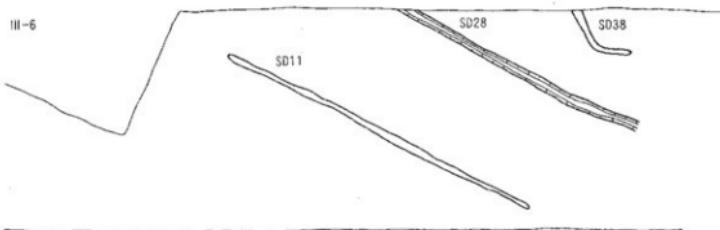
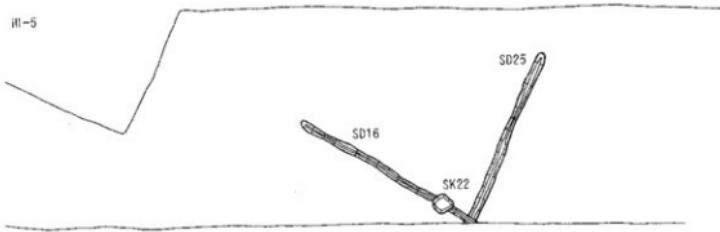
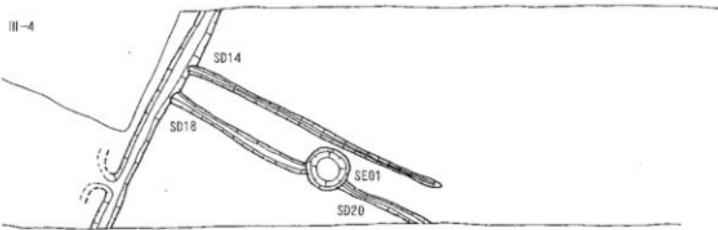
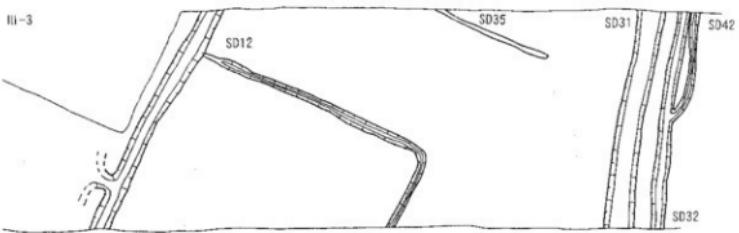
次いで南北方向SD 25が引かれる。その中間に浅井戸（出水？）の可能性があるSK 22を持つ東西方向のSD 16が出現し、規模の大きい井戸SE 01を中間におり東西にSD 18・20を配する区域が成立する。井戸は、集落の充実・拡大を示すとも考えられる。この溝が改削されSD 17・19に代替され、さらに北側に約3m幅を隔てこれに並行する東西方向のSD 14が出現する。集落域を南北に区画するのであろうか。

先のSD 11を先軌として設けたかのようにここにSD 12が掘削される。しかも同溝は約20m東進のち明確なL字状の検出面を示して直角方向に南進し、SD 10とともに環濠状の溝を形成して、SE 01を含む一帯を方形に開削し、居住者がより優勢な階層に成長して来たともみえる。この時期、SD 17~20は機能していないと考えられ、SE 01については西側縁辺での礫群検出状況や改削痕跡がある等の点から、井戸の機能は保たれていたと見るべきであろう。やや時期を推移し、SD 12が類似規格で南へ2m余移動してSD 24となる。溝幅は僅かにSD 12を上回る。その北と東にSD 26・27が等間隔で南北方向に並列し、一定範囲を割すように配される（両者の中间に近いSX 01は下部に軟弱層の存在が推定され埋没井戸ともみられる）。次いで、WI・II区を南北に2分しSD 13が直通する。V層の各遺構がIV層によって埋没される時期に最も接近して成立したと考えられる。本集落最終段階では、区域を南北二つに単純明快に分けて営むという景観が想定される。

調査区東寄りに前述溝群と切り合わない溝群が集中する。南北方向のものに限られる点と、方位がやや西偏する点で西寄りの一群とは性格を異なる。SD 31、32が最も先行する。SD 31は、SD 07に匹敵する規模で仮定条里坪界から東約50mにあって、坪を東西にはば二分する位置。SD 07・



第20図 W I・II区溝変遷図-1



第20図 WI・II区溝変遷図-2

10等との先後関係は検証困難であるが二つの溝の間に道路状部分を持つ点など性格の類似も窺われる。これらと方位が異なり成立は遅れる可能性も考えられる。SD32は、開削後のある時期、すぐ東側沿いに小規模のSD42を中途から分岐付設し北へ並走させる。続いてSD31埋没後に、ほぼ同位置で改削されたSD30が成立する。SD32及び42に代り、類似規模のSD33が成立。次いでV層埋没に最も近い時期のSD40であるが、ほぼ同一幅のSD33と並存した可能性があろう。

別に、北東隅に上述のものと形態、性格、時期が異なるとみられるSD38がある。方位に関わらず地形に応じたとみられる曲線的な流路で、本遺跡の先駆的な遺構とも考えられる。

なおV層上面のレベルは、SD31東縁で段差があり、東側が10cm余高くそのままのレベルで現農道・水路の未調査部分を介しE区に連続する。段差10cm余を持つこの低レベル面は西へ広がりSD12が屈曲して南へ延びる位置の東縁近くまで達する。即ち、V層が地表面の時期、この東西幅20m弱の範囲は段差約10cmを人為的に削平、又は流失した凹地状態で利用、その後IVc層による埋積を受けたことが知られる。

④E I・II区溝群との関係

WI・II区の溝群が現行農道・水路部分（未調査）を介し東に接したE I・II区の溝群との関わりに、以下の諸点が考えられる。

全存続期間を通じ耕作域であったとみられるE区溝群の様相はW区と相違する。掘削深度がやや浅い面で検出した南北の遺構は、東西方向溝及び犁痕がみられ、北半はI区よりやや深い検出面に東西又は南北方向の溝とこれに斜交する溝がみられる。溝の基本的な方位はWI・II区のそれと大差がないようである。これに比較し、W区の現行農道寄りSD30以東の溝は、以西の溝がおしなべてSD07等を基準とする方格地割に規制されたかにみられるに対して、これらと約15°西偏した方位をとる。本調査区は、埋没旧河道が北東から北西方向に屈曲する地点に位置し、出水時の水（土砂）流が北西方向をとると考えられ、これによる埋積のため、主として居住域であるW区と農耕域であったE区の境界部分の溝及び農道は西偏、現在も踏襲される方位に固定したとも考えられる。そして、SD31及びこの東に接して並走する道路状部分は、1~2m幅の規模を持ってともに仮定条里坪内を区画する主要界線及び農道、用・排水路として機能したのであろう。因みに東約400mに位置する川南・東遺跡では、SD-2052等が、ほぼN15°Eの方位を示し、元来この一帯での当初の開発行為が行われた際は旧山田郡条里を踏襲してSD07にみられるような方位をとったのではないかとも推測される。先述のように、SD31乃至41以東とこれより西にあって南北に走る溝との間に直接の切り合いがなく先後関係を確認できないが、上記の事情やSD07等に直交して東西方向に延びる溝がSD31等に切られる点からみれば、以東の溝群が後出するのであろう。あるいは、当初はE SD13が仮定条里坪内を東西に2分する界線の役割も兼ねて配置され、漸次SD31~34等に遷移し現状に至ったとも考えられる。

⑤遺物

溝遺構にみられた主な遺物は、以下のとおりである。

SD09

140は、瓦質椀底部片である。退化したともいえる断面不整半円形の高台をもつ。本例のみ他の遺物と

時期を異にし、流れ込みとみられる。復元底径 6.2cmである。内外面ともナデ調整、灰白を呈し、胎土は密、焼成良好である。

141は、土師質小皿片、復元口径 6.2cmである。内外面ともにナデ。胎土は密である。

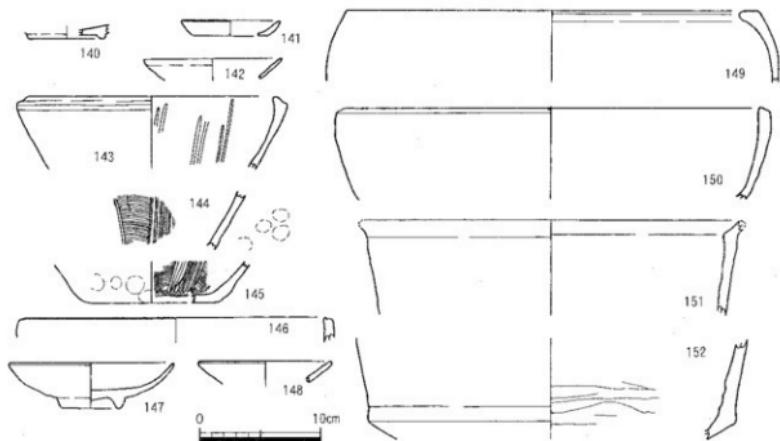
142は、土師質坏片である。復元口径11.4cm。内外面ともナデ、灰白を呈し胎土は密である。146は、土師質釜口縁片である。復元口径25.6cmである。内外面ともナデ、にぶい黄橙を呈し胎土は密である。

150は、土師質釜口縁片である。復元口径34.4cm。内外面ともナデ。内面は明褐色、外面は灰黃褐色を呈する。胎土は径4mm以下の中石英、長石を含む（なお、以下順次記述する土師質鍋・釜・捕鉢類では、ほぼ例外なく径2~5mm程度の石英、長石を胎土に含み、中には更に角閃石が加わる例も多い）。但し、259例のように堅致で焼成良好、明るい灰白~淡黄系色調を持つ捕鉢の一群であって、器壁が内湾ぎみに立上がり口縁端をさらに内側に彎曲させるものは、相対的に精選された胎土を使用しており、調整・焼成も優れ砂粒は目立ちにくい）。

149は、土師質の甕であろう。類例の出土は少數である。堅致で焼成良好である。復元口径は33.6cmである。器高は類例から推して40~50cm程度と見込まれる。

151は、土師質鍋口縁屈曲部片である。復元口径31.2cm以上。内外面ともナデ調整である。

152は、土師質甕とみられる底部片である。復元底径30.5cm。低火度焼成、内外面ともナデ調整であるが、器壁内面の底部寄りの数cm幅は粘土紙（？）積上げ痕が残る。



第22図 SD09遺物

143は、土師質捕鉢口縁である。口縁端は稜をなしており内抱えぎみに収める。櫛がき条溝は8条とみられる。内外面ともにナデ調整。復元口径は20cmであり、SD07出土片と接合する。145は、土師質捕鉢底部である。復元底径11.4cmで、内面に顯著なヨコ方向のハケ目を施し、外面は指頭圧痕が多い。櫛がき条溝は6条。焼成は堅緻、良好である。

144は、土師質捕鉢胴部片である。145と同一個体とみられる。

147は、無文肥前磁器皿である。ほぼ完形である。釉はくすんだ色調で、灰オリーブ乃至は明オリーブ灰で、青磁を指向したとも見える。見込みには幅広い蛇の目釉剥ぎがある。高台は断面台形に深く削りこみ、底面を兜巾状に削り残して外側に僅かな垂れがあるが無釉である。1630~1640年代のものである。

148は、肥前とみられる磁器皿口縁小片である。淡黄色の施釉にはムラがあり、口縁端付近は素地表面のザラつきを被覆しきれていない。白磁の可能性もある。17C前半のものである。

SD10

153は、須恵質坏口縁小片である。灰~灰白色を呈するが摩耗し本来の器表面でない。外面上半に炭素吸着の影響がみえる。器壁は内寄ぎみに立上がり中ほどからは外反しながら終る。平安期か。

177は、土師質捕鉢口縁である。口縁端部は丸く収める。櫛がき条溝5条が残り口縁内面はヨコナデ調整。胎土はやや密である。175は、土師質釜口縁片である。内外面ともナデ調整で内面に煤がみられる。

167は、土師質釜口縁片である。復元口径24cm、内外面ともナデ調整。

168、169、170はいずれも土師質釜口縁小片である。

178は、土師質釜口縁片である。復元口径30.8cmである。

171、172、173、176は、いずれも土師質鍋口縁小片である。このうち、176は口縁端を丸く収め外反するが、この類は概して器壁が厚めで大口径に造られる。

164は、土師質釜口縁片である。内外面ナデ調整で口縁の復元内径25.5cmである。

165は、土師質釜口縁片である。復元口径内径28.2cm、内外面ともナデ調整。

163は、土師質壺口縁片である。丸いが鈍い稜ともみえる口縁端部にかけて強く内寄する。復元口径32.6cm。外面はナデ、内面はナデにハケ目が明瞭である。焼成良好堅緻で胎土に1mm以下の長石、角閃石を含むが精良である。

174は、土師質鍋又は釜脚部である。残存長13.7cmで板ナデ調整を施す。

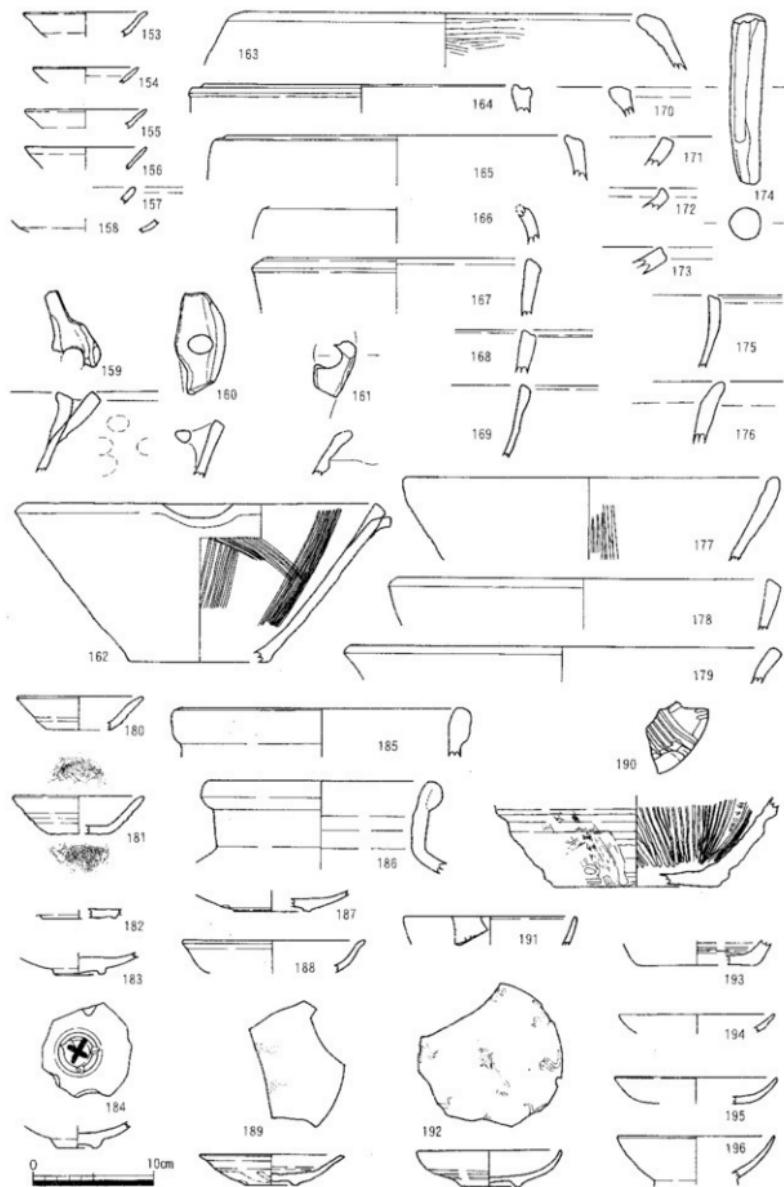
179は、土師質鍋口縁である。内外面ともナデ調整。復元口径35cmである。

166は、土師質釜口縁片である。復元口径内径20cmで内外面ナデ調整。159、160、161は、土師質内耳付釜の耳部片である。いずれも内外面ともナデ調整。159、160外面には煤付着がみられ、159では指頭圧痕もある。外面褐灰、内面灰白で径4mm以下の石英、長石を含む。

156は、土師質皿口縁である。胎土密で内外面ともナデ調整、色調灰白。復元口径10.1cm。154は、土師質小皿口縁である。胎土密で内外面ともにナデ調整。復元口径8.6cmで口縁部付着炭化物で灯明皿と知れる。155は、土師質皿口縁である。胎土は密で、内外面ナデ調整。復元口径9.9cmである。157は、土師質皿口縁片である。内外面ともナデ調整。

158は、土師質小皿底部片である。内外面ともにナデ調整で復元底径9.5cm。

162は、土師質擂鉢である。底面中央部が摩耗、欠損し底部稜から口縁端まで片口部を含め残っており、回転、復元では原形が窺える。復元口径29.0cm、底径11.2cm、器高は13.5cmを割る。放射状の櫛がき



第23図 SD 10 遺物

条溝は7条を単位に、器壁中ほどで4~5cmの余地を残しながら施し、さらに放射条溝に斜交する条溝が重なる。使用痕を含め摩耗が著しく調査細部は不明である。胎土は3mm以下の石英、長石、角閃石を含む。

181は、備前小皿である。褐灰～にぶい赤褐色を呈し、胎上に径5mm前後の細～中縫を含む。見込み部に2条の窓印がありロクロ造りで底部は回転糸切りである。IV期、15C後半か。

186は、備前壺口縁片である。復元口縁外径20cm。灰色を呈し肩部に灰白の自然釉があり、頸部がやや外傾する玉縁で、ロクロ造りであろう。IV期、15Cか。

185は、備前壺口縁小片で復元口縁外径25cm。褐灰色を呈する。偏平に押えた玉縁で頸部はやや内傾。焼成幾分低火度とみえる。IV期、15Cか。193は、備前徳利形瓶（？）底部小片である。底径10cm。明褐色を呈する。V期、16C後半であろう。

180は、備前小皿である。内面は灰白、外面はにぶい赤褐色を呈する。181とほぼ同形同大であるが器壁上半から口縁へ外反がやや大である。IV期、15C後半であろう。190は、備前描鉢底部片である。にぶい黄褐色を呈する。外面中位に深みある条溝がめぐる。調整は横ナデがあるが砂粒が押え込まれずざらつきやや粗雑にみえる。内面の放射状溝が条溝は幅3cmに6条、その起点で2~3条を重ねて骨太く刻み込まれ条溝を施さない部分は一部のみに止まっている。V期終末、17Cか。

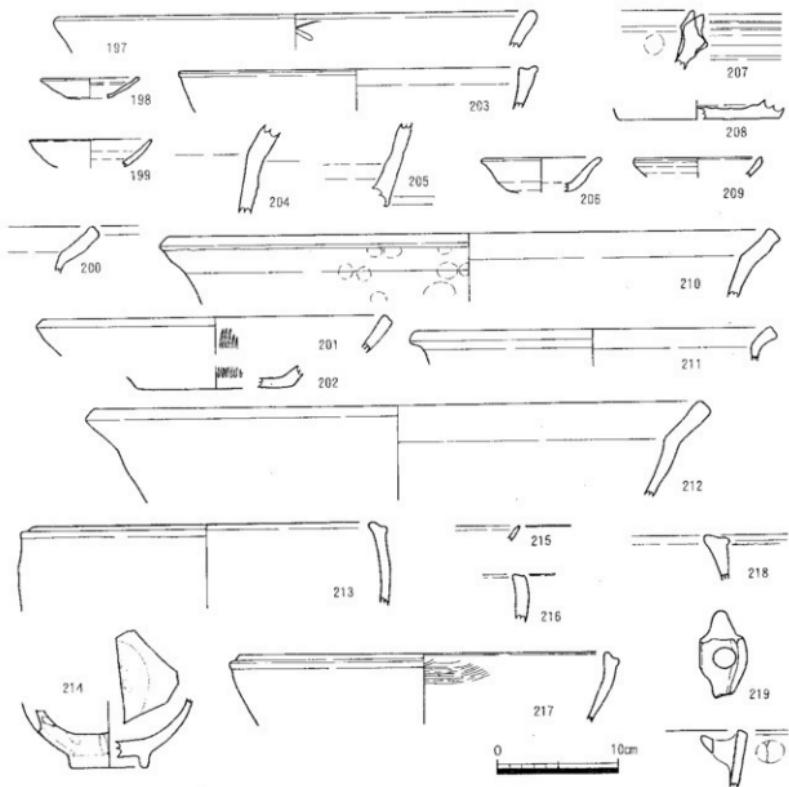
182は、灰釉、折縁（？）ソギの瀬戸美濃陶皿底部片である。見込みは釉剥ぎが行われ鉄漿ともみえるにぶい褐色の発色がある。高台は断面台形に細く削り出し、全面に薄い白濁した釉が施される。16C末のものである。188は、肥前と考えられる磁器皿口縁片である。オリーブ灰の釉がまんべんなく施されるが、微細な気泡状白点が口縁から内面にかけて分布している。17C初のものである。184は、灰釉、胎土目唐津陶皿底部である。オリーブ灰の釉は外面下半部にはめぐらず高台と周辺部は露胎である。やや粗放に削り出した三つ割高台となっており、高台内面には墨書で幅約4mmの十字形が記されている。187は、灰釉、砂目の唐津陶皿底部片である。反オリーブの釉には貫入がある。低い内反り高台で外面下半部は露胎である。1610~1630年代のものである。

183は、中国輸入の白磁皿底部片である。釉は貫入が顕著で高台内面の兜巾状高まりから、半径で4cm前後の範囲については露胎である。14~16Cのものである。

194、195、196は、いずれも見込みに蛇の目剥きを施す肥前磁器皿口縁片である。底部を欠く。胎上、焼成、色調、調整ともに共通し、接合には至らないが出土位置からみても同一個体の可能性がある。無文で明緑灰を呈して、精良にみえる。1630~1640年代のものである。191は、磁器碗口縁片である。肥前とみられ、内面無文（？）で外面に染付け。釉には貫入があり灰白を呈する。17C前半である。192は、肥前、染付磁器皿である。全釉の明緑灰釉で見込みに中国青花を模した「寿」字文があり、口縁への立上がり点付近では円周線が一周する。圓線から口縁部に向け八方へ蕨手文1本と2本を交互に配して放射状に描く。描法は粗放である。高台は断面台形で豊付や見込み面には微量の窓細片などが接着する。1630~1650年代のものである。

189は、灰釉砂口唐津陶皿である。釉は灰オリーブである。高台はごく浅く削り出し基筒底に近い。一部、釉の垂れが高台に達するが外面下半部は露胎である。1610~1630年代である。

なお、614（第64図）は、双六の駒石（碁子）であろう。厚さ6~8mmの土師質土器の破片を打ち欠き径約3cmの小円盤形に整え再利用したもの。粗製で研磨などの形跡はないが破断面は「手ざれ」によるものか、やや摩耗ぎみである。



第24図 SD 12～24 遺物

SD 12

197は、土師質培培口縁片である。復元口径39.8cmを測り、内外面ともにナデ調整、褐灰を呈し、炭化物の付着がみられる。径4mm以下の石英、長石、角閃石を含む。

SD 14

198は、土師質小皿である。器壁は復元径4cmの底部から緩い傾斜で伸び内面の中位に稜を形成する。上半部は口縁にかけてくぼませている。203は、土師質土釜口縁小片で、復元口径30cmを測り、段状に退化した鋸部痕跡が外上方に僅かに張り出す。

206は、備前小皿である。灰褐色を呈したロクロ造りで底部回転糸切り。IV期、15C後半か。

207は、備前鑄鉢口縁片である。片口部の破片で、内面灰赤、外面褐灰を呈する。口縁上面をくぼませて斜め上方に引上げている。外面に凹線2条がめぐる。V期、16C前半であろう。

208は、備前捏鉢（？）底部片である。内底面にロクロ痕とみられる同心円状凹線が巡る。この面の外周一帯を中心に使用痕らしい摩滅がある。捏鉢乃至捏鉢の機能を持つとみえるが櫛がき条溝ではなく通常の捏鉢ではない。破損壺の下半部が再利用された残片である可能性も考えられよう。調整等でV期と考える。

209は、灰釉、砂目唐津陶皿口縁小片である。釉は灰黄を呈する。1610～1630年代である。

SD 1 6

199は、土師質小皿である。内外面ともナデ調整を施し、外面はにぶい黄橙、内面は灰白を呈する。復元口径10cmである。204は、土師質鍋口縁屈曲部片である。内外面ともナデ調整。205は、備前壺底部片である。褐灰を呈し、内外面とも径数mmのアバタ状破裂痕がみえ2次の被熱の可能性もある。V期か。

SD 1 7

200は、土師質土鍋口縁片である。210は、土師質鍋口縁片である。復元口径51cmを測り、内面ナデ、外面はナデ及びユビナデ調整、浅黄橙を呈する。

SD 1 8

201は、土師質捏鉢口縁片である。口縁端はやや内抱えぎみに終わり端部を平坦に收める。櫛がき条溝5条が残り内外面ともナデ調整。202は、土師質捏鉢底部片である。復元底径13cmを測る。6条の櫛がき条溝を持ち、内外面ともナデ調整。211は、土師質焰口縁片である。外面黒褐、内面黄灰。

SD 2 0

212は、土師質鍋口縁片である。復元口径は49.2cm。内外面ともにナデ調整、橙を呈する。

213は、土師質釜口縁片。復元口径28cmを測り、内外面ともナデ。内面は灰白、外面は浅黄橙を呈する。

214は、青磁碗で龍泉窯であろう。口縁部を欠き灰オリーブ～オリーブ灰を呈する釉に粗い貫入をみる。見込みは輪旋円闇文の中に花卉文を陰刻。外面には片刃彫りの跡があり、蓮弁文と思われるが残存部分では確定できない。高台は施釉されるが底面は鉄漿の塗布のみである。

SD 2 1

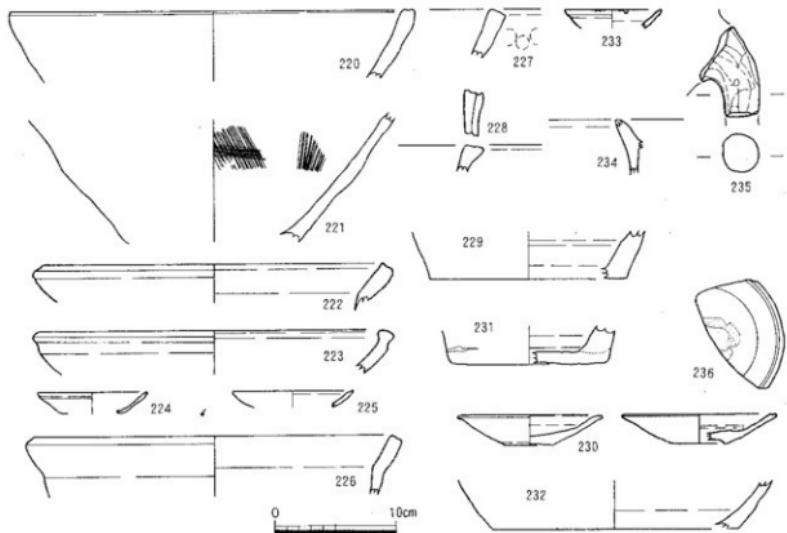
215は、土師質皿小片である。内外面ともナデ調整。内面灰白、外面にぶい黄橙を呈する。胎土は密、焼成は良。216は、土師質釜口縁片である。内外面ナデ調整で灰白を呈する。

SD 2 4

217は、土師質釜口縁片で、復元口径30.4cmを測り、内外面ともにぶい黄橙を呈する。内面ナデ、ハケ口、外面ナデ調整である。218は、土師質釜口縁片で内面橙、外面灰白を呈する。内外面ともナデ調整である。219は、土師質内耳付釜の耳部片である。外面に指頭圧痕がある。外面褐灰、内面灰白を呈する。

SD 2 5

220は、土師質捏鉢口縁である。口縁端はやや内抱えぎみ。櫛がき条溝痕跡が認められ復元口径は32.8cm。胎土は粗で石英、長石を多量に含む。227は、土師質鍋口縁小片である。



第25図 SD 25~28遺物

SD 26

221は、土師質鉢体部片である。残存高 9.4cm。外面に煤状付着物があり内面ハケ目調整。内面の様がき条溝は斜め放射状に粗に施し、体部中位には部分的に横行する条溝もみられる。

222は、土師質鍋口縁小片である。内面にぶい橙、外面は明褐灰を呈する。内外面ともナデ調整である。228は、土師質内耳付釜の耳部基部小片である。233は、土師質小皿片である。復元口径は8cmで内外面ともナデ調整。にぶい橙を呈し、胎土は密で焼成良好である。口縁端部には煤の付着をみる。灯明皿であろう。234は、土師質釜口縁小片である。鋤部分は痕跡程度に退化しているが、口縁端部までの間隔を失うまでに至らない。内外面ともにナデ、焼成良好。

235は、土師質釜（又は鍋）脚部片である。基部側で残存高 7.2cm、折損面の径 3 / 3.1cmである。外面は指頭圧痕、板ナデ及びナデ調整。

229は、備前壺底部片である。灰褐色を呈する。調整等からみてV期頃と考えられる。

230は、長石釉、砂目唐津溝縁陶皿ではほぼ完形品である。砂目は見込みを半周する様に続く水平に外反する口縁の溝は深く明瞭に彫り込まれる。底面は糸切り離しのままの平面で、口縁下7mm以内の軸に釉がみられる以外は露胎である。1610~1630年代のものである。

223は、唐津陶鉢口縁片である。口縁端部は釉剥、鐵漿を塗布する。灰釉で黄褐色を呈するが火度不足か光沢に乏しい。17C前半であろう。

236は、灰釉、砂目唐津溝縁陶皿である。ほぼ原形に復元。残存部にみる限り砂目は見込み中央部を殆ど切れ口なく巡る。溝縁の成形は 230に酷似。釉は光沢あるオリーブ黄で細かい貢入がある。外面下部露胎で底部は甚窓底。疊付に切り高台様の切込みがみえる。1610~1630年代のものである。

S D 2 8

224は、土師質小皿である。外面の口縁端直下に、端部調整に伴って生じた沈線がめぐる。復元口径 9 cmで内外面ともナデ調整である。225は、土師質小皿片である。復元口径 10.2 cm。内外面ともナデ調整で灰白を呈する。226は、土師質土鍋口縁片である。内外面ともナデ調整で、外面にぶい橙、内面褐灰を呈する。

232は、土師質擂鉢底部片である。摩耗し調整不明。櫛がき条溝痕跡が認められ、復元底径は 20.3 cm。

231は、備前壺底部片である。褐灰を呈し胎土に長石を含み内底面にゴマがある。IV期か。

S D 3 0

237は、土師質鍋口縁片である。復元口径 43.4 cm、残存高 11.3 cm。内外面ともにナデ調整、内面はにぶい黄橙、外面は褐灰を呈し煤の付着頗著である。238は、土師質鍋口縁片である。煤の付着が頗著で復元口径は 45.9 cm。内外面ともナデ調整、灰白を呈する。239は、土師質鍋口縁片である。復元口径 48.2 cm。内外面ともナデ調整。240は、土師質釜口縁片である。復元口径 27 cmで、内外面ともナデ調整、橙を呈する。

241は、土師質釜口縁片である。復元口径 31.8 cmで内外面ともナデ調整、内面明褐灰、外面褐灰を呈する。242は、土師質釜口縁片である。復元口径 19.1 cmで内外面ともナデ調整、灰白を呈する。243は、土師質鍋口縁小片である。内外面ともナデ調整である。

244は、土師質釜口縁片である。復元口径 28.4 cmで内外面ともにナデ調整、灰白を呈する。

245は、土師質釜口縁～体部である。復元内縁口径 27.6 cm、残存高 9.2 cm。内外面ナデ調整。内面は灰白、外面は褐灰を呈し全面に煤付着をみる。外底面には格子目叩きを施す。

246は、土師質釜口縁である。復元口径 28 cm。内外面ともにナデ調整、内面は灰白、外面はにぶい黄橙を呈しており、指頭圧痕がある。247は、土師質釜口縁～体部である。復元口径は 30.2 cm、残存高 8.2 cm を測り、内外面ナデ調整。内面は浅黄橙、外面は褐灰を呈し全面に煤の付着をみる。外底面に格子目叩きを施す。

248は、土師質擂鉢口縁片である。復元口径は 28 cm。外面ナデ調整、内面ナデ及びハケ目に 8 条以上の櫛がき条溝を施している。

249は、土師質鍋口縁小片である。内外面ともナデ調整で外面には指頭圧痕を見る。

250は、土師質鍋口縁片である。内外面ともナデ調整。外面は浅黄橙、内面は灰白を呈する。

251は、土師質鍋口縁片である。煤付着、内外面ともナデ調整。内面灰白、外面褐灰を呈する。

252は、土師質鍋口縁片である。内外面ともナデ調整で、内面褐灰、外面にぶい橙を呈する。

253は、土師質釜口縁片である。内外面ともナデ調整、にぶい黄橙である。

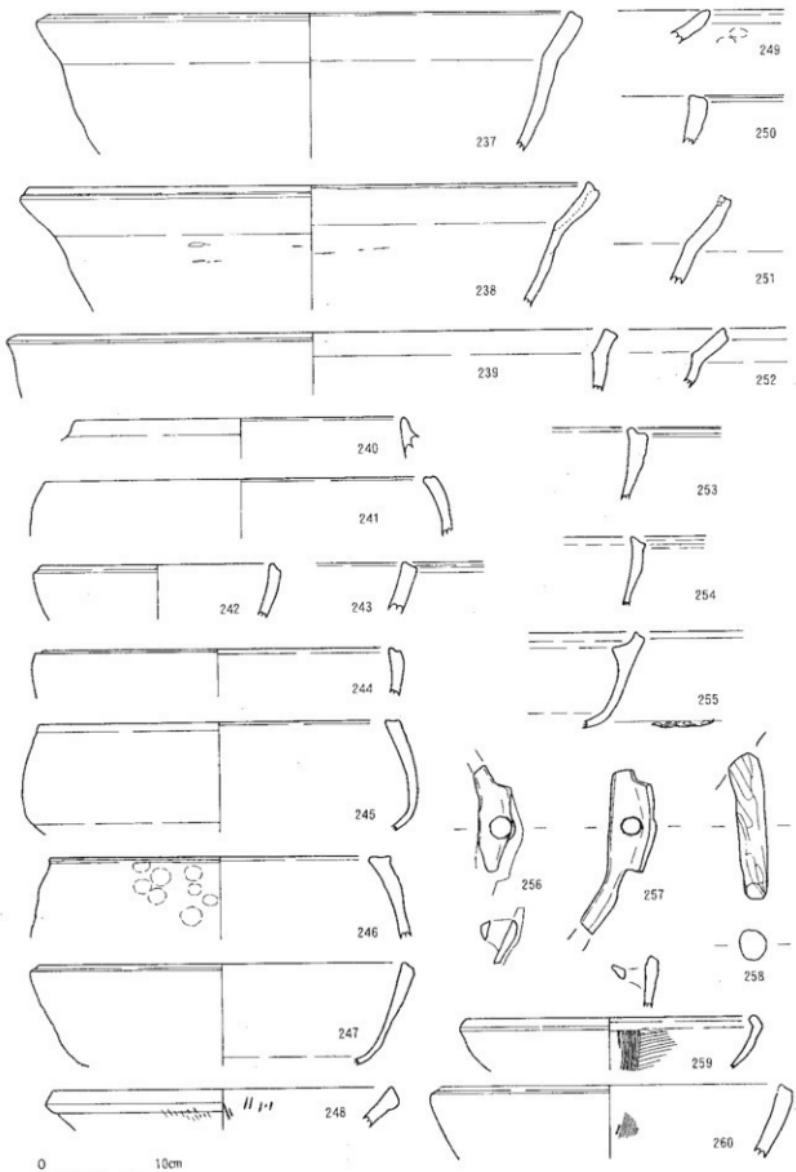
254は、土師質釜口縁片である。内外面ともナデ調整、内面灰白、外面にぶい黄橙を呈する。

255、256、257は、土師質内耳付釜の耳部片である。各個は、内外面ともナデ調整であり、255、257では外面に煤が付着、255の外底面は頗著な格子目叩きを施している。

258は、土師質釜（又は鍋）脚部片である。残存長 11.4 cm、中間部径 2.4 cm である。

259は、土師質擂鉢口縁片である。復元口径 23.9 cmで、外面ナデ調整、内面頗著なハケ目に 8 条単位の櫛がき条溝を施す。胎土に砂粒を含むが焼成良好、堅緻。

260は、土師質擂鉢口縁片である。復元口径 28.6 cm、櫛がき条溝 6 条を認める。外面ナデ、内面ナデ及びハケ目調整である。にぶい橙を呈する。



第26図 SD 30 遺物-1

261は、灰釉、溝縁、砂目積み段階の唐津陶皿口縁小片である。釉はにぶい褐色で、口縁の溝は幅広く深めである。1610～1630年代である。

262は、灰釉、瀬戸美濃陶皿である。いわゆる黄瀬戸である。全釉で貢入があり、浅黄を呈するが見込みと高台外側面の厚く溜った部分では暗オリーブ色に移る。復元径10.5cmと小振りで、高台は断面がほぼ三角形で低い作りである。16C末のものである。

263は、灰釉の唐津陶皿底部である。釉は無光沢、霜降り状の灰白である。見込み部分は殆ど無釉。外面下半部から高台にかけても無釉で、高台断面は低い台形を呈するが疊付は同器種を重ねて使用したための摩耗で曲面をなす。内面に僅かに兜状突起がある。胎土が橙色であり武雄系と知られる。17C前半である。265は、外面鉄釉、内面透明釉を掛け分けた唐津陶碗である。口縁部を欠く。外面の鉄釉部は暗褐を呈して、内面の透明釉は灰白でともに無文である。高台部無釉で内面は平坦、断面長方形のやや深めの造り。1630～1640年代のものである。

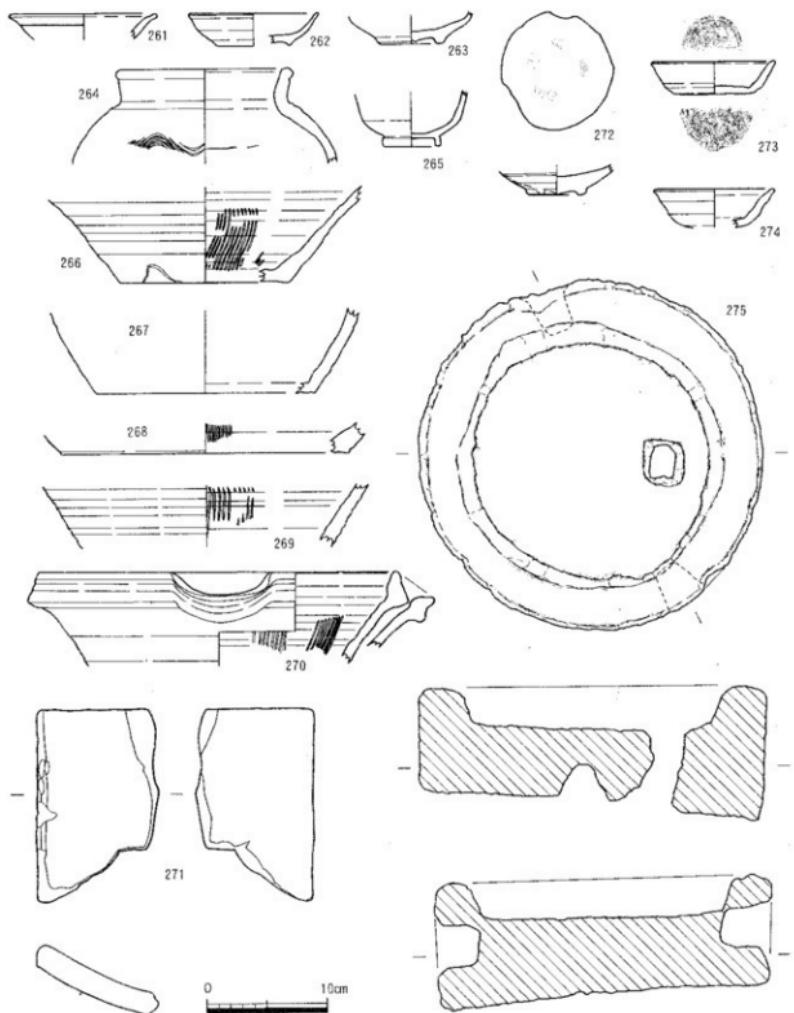
264は、備前壺口縁片である。灰を呈し、復元口縁外径約15cmで玉縁であり頸部は僅か外傾。ロクロ造りで肩部に波状櫛目文があり口縁上端部と肩部はゴマが覆う。IV期、15Cであろう。

266は、備前播鉢底部片である。灰を呈する。内面は釉化不十分な径3mmほどの灰が粗いゴマとなって全面にかかる。器壁内面の下端を起点として、11条の櫛がき条溝帯が3.5cm範囲ごとに約1cmの間隔をおいて放射状に施されている。III～IV期、14C末～15C前半か。267は、備前壺底部片である。灰色を呈し復元底径約18cmである。還元色強い焼成である。III～IV期、14C末～15C前半か。268は、備前播鉢底部片である。櫛がき放射条溝は内底面の起点で各端が一部重なる状態で2.5cmの範囲に10条を施す。灰を呈する。IV期、15Cであろう。

269は、備前播鉢腰部分片である。赤を呈する。内面に黒色炭化物が付着。3.5cmの範囲に放射状櫛がき条溝10条を施す。条溝帯の間隔は器壁中位の位置で1～3cmで、器壁にはロクロ痕とみられる凹凸が顕著である。V期、16C前半か。270は、備前播鉢である。にぶい赤褐を呈し、ロクロ造りで器壁内外ともに幅1cm弱の横方向凹線が連続した状態をみせている。口縁の上下端部に重ね焼きの痕跡がみられ幅広い口縁端面は内傾し2条の凹線がめぐる。口縁上面は外傾したまま僅かに凹む。放射状櫛がき条溝は3cm幅に8条の櫛状工具で無施条の部分とほぼ等間隔に刻む。IV期、15C後半である。

271は、平瓦である。残存長15.6cm、同幅9.9cmである。イブシで焼成は良、胎土は径2～5mmの石英を多量に含む。凹面板ナデ、凸面板ナデにハケ目調整である。本遺跡での瓦の出土は、他にS E 0 1出土の丸瓦片1点と包含層の小片1点のみである。272は、灰釉、砂目の唐津陶皿底部である。釉は、にぶい褐色で小部分が霜降り状に白濁する。外面下半部は無釉であるが一部は高台際まで釉に浸されている。顕著な兜状高台である。疊付は類似器種に通例の積み重ね使用による摩耗で曲面を呈する。1610～1630年代である。273は、備前小皿である。灰赤を呈する。見込み面には窯印とみられる線刻2条があつて、ロクロ造り、底部回転糸切りである。口縁端付近にはゴマがみられる。IV期、15C後半か。274は、備前小皿である。灰褐を呈し、底部から内弯ぎみに立上り、中位で一度屈曲し更に内弯ぎみに立上り口縁端部で外反。ロクロ造り、底部回転糸切りである。IV期、15C後半か。

275は、石臼（上臼）である。摩耗は著しいが完形品である。径27.9～28.4cmでほぼ正円に近い。残存高9～11cmであり、使用時の偏った方向の加重の繰り返しにより変形が累積された事が示される。材質は凝灰角礫岩である。摩擦面は著しく摩損しており、溝目立て及び分画が使用によって摩滅したものか、本来刻まれずに使用され角縁面が活用されて来たものか、加工の存否は不明である。供給孔の横断面は長方形に造られ、引手基部の取付孔は2カ所の対称的な位置に設けているが、これは類例（『空港跡地遺跡I』）も多く通例であると見られる。



第27図 SD 30 遺物-2

SD 3 2

276は、土師質鍋口縁片である。内外面ともにナデ調整、復元口径は54.5cmである。

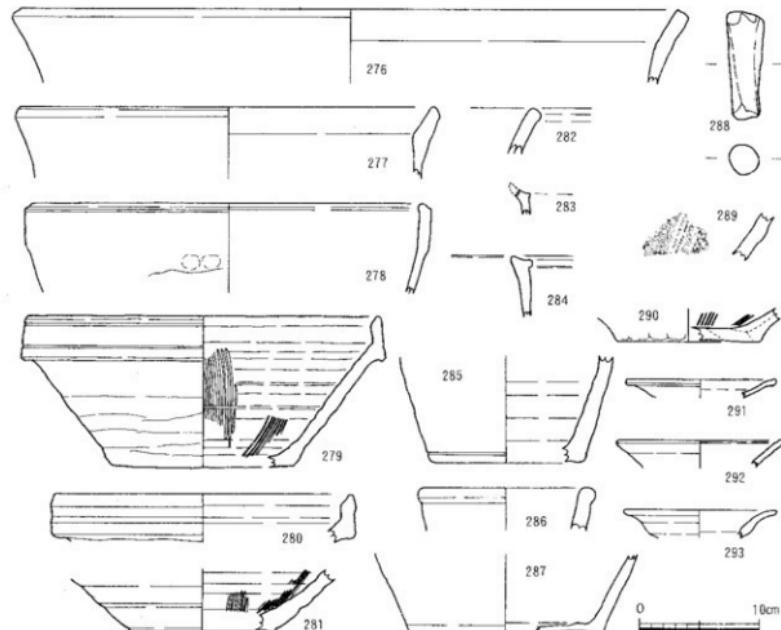
277は、土師質鍋口縁片である。復元口径34.2cm。内外面ともにナデ調整を施す。

278は、土師質釜口縁片である。内面ナデ調整、外面はナデ調整に指頭圧痕。粘土接合痕がみえ、復元口径31.8cm。282は、土師質鍋口縁片である。内外面ともナデ調整である。

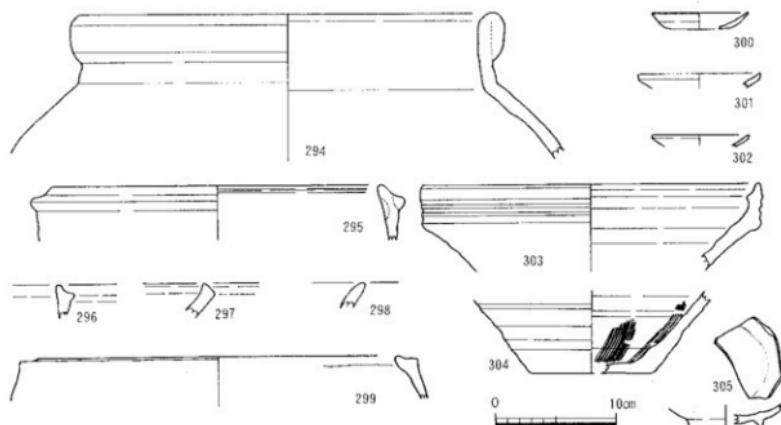
283は、土師質釜口縁小片である。内外面ともナデ調整。284は、土師質釜口縁片である。内外面ともナデ調整。288は、土師質釜（又は鍋）脚部片である。残存長は8.7cm、径2.2～2.5cm。289は、土師質捕鉢体部小片である。290は、土師質捕鉢底部片である。復元底径は11.8cm。破断面に粘土接合痕がみえる。5条単位の櫛がき条溝は底面には施していない。

279は、備前捕鉢である。他の遺構出土で接合する破片が複数点あって、反転復元等によりほぼ原形に近い器形となった。復元底径15.2cm、口径29.0、器高12.3cmである。内外面ともに板ナデ調整、胎土に2mm以下の石英、長石、角閃石を少量含む。色調は灰を呈し、焼成良好で堅緻に焼締め、口縁端部に2条の凹線がめぐる。V期前半、16Cであろう。

280は、備前捕鉢口縁片である。灰赤を呈し、口縁は上面を凹ませ内傾させ端面に凹線3条を持ち上下端に重ね焼き跡がみえる。V期、16C前半であろう。281は、備前捕鉢底部片である。灰赤を呈し、色調・調整等280と同個体の可能性がある。放射状櫛がき条溝は3.5cm/11条。底部起点で両端部のみ接して施し無施条の余白部分がかなり高い比率を占める。ロクロ造りとみられ内面は滑らかな触感の摩滅がありよく使い込まれる。V期、16C前半であろう。



第28図 SD 3.2 遺物



第29図 SD 33~42 遺物

285は、備前捏鉢（？）底部片である。灰褐色を呈する。壺底部ともみえるが内壁下部数cmの範囲は208類似の滑らかな触感の摩滅があり、捏鉢等としての使用が考えられる。調整・焼成など208と同一個体の可能性もある。V期、16Cであろう。

286は、備前壺口縁小片である。灰褐色を呈する。頸部は僅かに外傾して、胎土に径2-3mmの砂粒を多く含む。IV期、15Cである。

287は、備前壺底部片である。外面はにぶい褐色で、内面は褐灰色を呈する。底径16cm前後で粘土組巻き上げ造りとみられる。IV期、15Cであろう。

291は、灰釉、溝縁唐津陶皿口縁片である。釉は褐灰色、無光沢であり一部霜降り状の白濁がみられる。外面の施釉は口縁から1cm内外の範囲である。17C初である。

292は、灰釉、溝縁唐津陶皿口縁片である。釉は灰黄色で光沢があり外面も高台際近くまで施釉する。口縁の溝は幅広いが極めて浅く、溝縁皿に普遍的にみられる口縁部端反りがなく、やや特異である。17C初である。

293は、灰釉の唐津陶皿口縁片である。釉はオリーブ黄色で、内外面に釉調の差がなく外面も高台際とみえる部位まで施釉されるので全釉であろう。器形は口縁端の曲線や底部から立ち上がり端反りして口縁へ伸びる器壁断面の形態で輸入青磁輪花皿346模倣の可能性が窺える。17C初である。

S D 3 3

294は、備前大壺口縁片である。外面は灰褐色、内面は黄灰～灰黃を呈する。短い頸部は内傾ぎみで、口縁端を頸～口端の約2/3まで折返した幅広い玉縁である。肩部には径数mmのゴマが散布する。胎土は密である。復元口径は34cm。IV期、15Cである。

295は、土師質金口縁片である。接合痕での観察によれば、形骸化した「羽」=鈎の部分は粘土組の貼付けによって形成したことが知られる。内外面ともにナデ調整を施す。復元口径は27.2cmである。体部外面には煤が付着する。

SD 4 0

300は、土師質小皿である。器高 1.3cm、復元口径 8cm である。内外面ともナデ調整、色調は内面灰白、外面にぶい黄橙。胎土は微砂を含み焼成良である。301は、土師質小皿である。復元口径 10cm である。内外面ナデ調整で、色調はいずれも浅黄橙、胎土は密で焼成良である。302は、土師質小皿である。復元口径 8cm。内外面ナデ調整で、色調はいずれも灰白である。

303は、備前播鉢口縁片である。復元口径は 28cm。胎土は密で焼成良である。色調は内面がぶい赤橙、外面赤灰を呈する。3条の凹線を持ち幅広・直立の口縁端面は赤灰色であり重ね焼きによる発色差が明瞭である。ロクロ造りであり口縁上面を少し窪ませ内傾させる。V期の特徴を示す。304は、備前播鉢底部片である。復元底径 10cm。内外面ともに黄灰色を呈する。11条/2.5cm の放射状構がき条溝を、底部起点で約 1cm 間隔の余白を置きながら施す。胎土は密であるが 6mm 以下の長石含有が目立つ。焼成良である。V期、16C であろう。

305は、染付（青花）磁器碗底部である。復元底（高台）径は 5.8cm である。全体として釉は明オリーブ灰色を呈する。但し高台内面に対応する見込みの部分は有段である。浅い池状に削り込んだ成形であり、この範囲内は灰オリーブ色である。全釉であるが、内傾及び外傾する 2 面で削り取られた疊付は釉がなく、器体は稜線のみで支えられる。染付は見込み周縁に 1 条、高台外側付け根に 1 条の円周線文がある。描線は粗放である。高台は圈足、内面ともに鉄漿の塗布がみられる。高台内側面には、削りによる段が形成される。これは見込みにみられる段とともに肥前にはみられず、中国輸入品の特徴である。16C 末～17C 前葉のものである。

SD 4 2

296は、土師質釜口縁小片である。内外面ナデ調整、色調灰褐である。「羽」=鶴の退化・痕跡化の程度は、ほぼ 299 に匹敵する。297は、土師質鍋口縁小片である。内外面ともにナデ調整である。298は、土師質鍋口縁小片である。内外面ともにナデ調整で、灰黄褐を呈する。299は、土師質釜口縁片である。復元口径 32cm で、内外面ともにナデ調整、焼成は良であり、胎土はやや粗である。

2. 土坑

土坑は、SK 0 1～3 7 を検出している（第4表）。このうち SK 1 9 については、その後 ST 0 1 と改めたので、36基が認められる（なお SK 2 2 については壁面に石材を用いている点や、木質遺物が複数点出土し SE 0 1 に類似して溝に連接するように設けられている点などから井戸=浅井戸乃至貯水坑（洗い場）又は便槽の可能性も考えられる）。

これらは平面形でおおよそ隅丸長方（方）形、長円（椭円）形、円形、不整（円）形に分類でき、方位では東西・南北方向とこれに斜交するものがみられる（第5表）。方位が溝等と平行ないし直交するものについては、多くが建物に伴うものではないかと考えられるが、その一部については、別記のように或いは近世の水田灌漑に関わる施設としての可能性も考慮しておきたい。また土壙墓も皆無でないかも知れないが骨片等の出土は認められなかった。

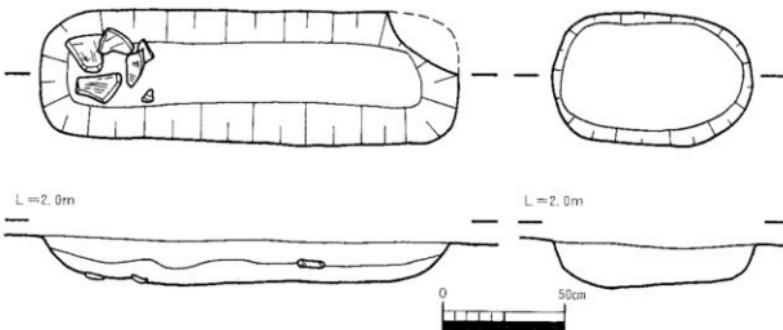
隅丸長方形、長円形のものが支配的であることが指摘でき、主軸を南北にとるもののが大多数を占め、長辺で 150cm を前後する規模のものが多い。

第4表 土坑一覧

	長さ	幅	深さ	形状	方向	SK 1	9	105	60	8	ST-01	NS
SK 0 1	180	96	18	長円	NS	SK 2 0	142	87	22	隅丸長方	斜	
SK 0 2	112	103	14	不整円		SK 2 1	83	54	19	隅丸長方	WE	
SK 0 3	92	90	19	不整円	NS	SK 2 2	144	129	36	種隅丸方	NS	
SK 0 4	138	96	9	隅丸長方	NS	SK 2 3	93	47	10	長円	NS	
SK 0 5	100~	82	9	隅丸長方	NS	SK 2 4	98	36	18	長円	NS	
SK 0 6	140~	100	16	隅丸長方	NS	SK 2 5	108	47	18	長円		
SK 0 7	176	90	19	隅丸長方	WE	SK 2 6	80	55	18	隅丸長方	NS	
SK 0 8	149	85	15	隅丸長方	NS	SK 2 7	105	90	19	不整円		
SK 0 9	272	100	20	隅丸長方	WE	SK 2 8	292~	138~	23	長円	斜	
SK 1 0	90	46~	21	不整円		SK 2 9	112~	85~	23	隅丸長方	NS	
SK 1 1	153	110	17	不整長円	NS	SK 3 0	72	64	14	不整円		
SK 1 2	106	54	9	長円	斜	SK 3 1	95	65	13	隅丸長方	斜	
SK 1 3	174~	70~	19	隅丸長方	斜	SK 3 2	100	83	10	隅丸方形	斜	
SK 1 4	172	47	19	隅丸長方	WE	SK 3 3	96	64	29	長円	斜	
SK 1 5	120	116	7	隅丸方形	WE	SK 3 4	104	55	12	隅丸長方	WE	
SK 1 6	87	51~	18	円		SK 3 5	84	41	4	長円	NS	
SK 1 7	150	92	19	隅丸長方	NS	SK 3 6	92	43	4	長円	NS	
SK 1 8	120	103	33	不整円		SK 3 7	78	71	10	隅丸長方	NS	

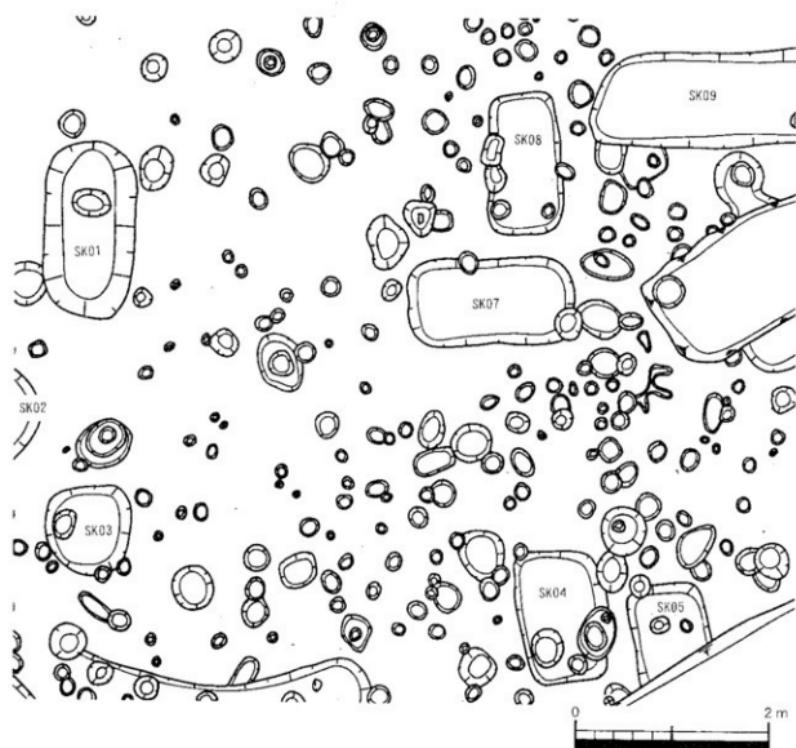
第5表 方位別土坑一覧

SK 0 4	138	96	9	隅丸長方	NS	SK 1 5	120	116	7	隅丸方形	WE	
SK 0 5	100~	82	9	隅丸長方	NS	SK 1 3	174~	70~	19	隅丸長方	斜	
SK 0 6	140~	100	16	隅丸長方	NS	SK 2 0	142	87	22	隅丸長方	斜	
SK 0 8	149	85	15	隅丸長方	NS	SK 3 1	95	65	13	隅丸長方	斜	
SK 1 7	150	92	19	隅丸長方	NS	SK 1 2	106	54	9	長円	斜	
SK 2 6	80	55	18	隅丸長方	NS	SK 2 5	108	47	18	長円	斜	
SK 2 9	112~	85~	23	隅丸長方	NS	SK 2 8	292~	138~	23	長円	斜	
SK 0 1	180	96	18	長円	NS	SK 3 3	96	64	29	長円	斜	
SK 1 1	153	110	17	不整長円	NS	SK 3 2	100	83	10	隅丸方形	斜	
SK 2 3	93	47	10	長円	NS	SK 0 2	112	103	14	不整円		
SK 2 4	98	36	18	長円	NS	SK 1 0	90	46~	21	不整円		
SK 3 5	84	41	4	長円	NS	SK 1 6	87	51~	18	円		
SK 3 6	92	43	4	長円	NS	SK 1 8	120	103	33	不整円		
SK 3 7	78	71	10	隅丸長方	NS	SK 2 7	105	90	19	不整円		
SK 0 3	92	90	19	不整円	NS	SK 3 0	72	64	14	不整円		
SK 0 7	176	90	19	隅丸長方	WE	SK 3 4	104	55	12	隅丸長方	WE	
SK 0 9	272	100	20	隅丸長方	WE	SK 1 9	105	60	8	ST-01	NS	
SK 1 4	172	47	19	隅丸長方	WE	SK 2 2	144	129	36	井戸	無	
SK 2 1	83	54	19	隅丸長方	WE							

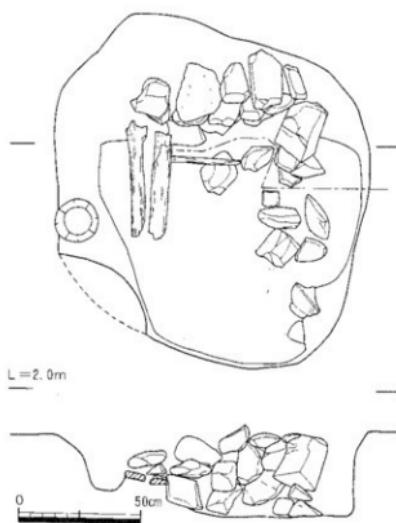


第30図 SK 14 実測図

第31図 SK 21 実測図



第32図 SK 01~09 実測図



第33図 SK 2 2 実測図

SK 2 2は、先述したように井戸の可能性が考えられるが、出土した木片に汚れた付着物がある点等をみると、後述のような「土坑形」トイレ遺構の場合も考えられる。

また遺構番号を付した以外にも、周囲と埋土をやや異なる凹地状の性格不明な遺構も検出したが、そのうちで付近に鉄小片やその酸化物らしいものを含む埋土をみた例もあった。鍛冶関連かとも考えられるが、形態等不明瞭で他に特段の遺物もみられず性格は不明である。

これら土坑と規模・形態等が類似する遺構について

①他県例で、「土坑形」トイレ遺構と確認された例

②高松市域で、現用水田（もしくは畑）の水口附近等で検出された例であって、近世後半頃とみられる遺構で、後述のように農業関連（貯水坑）施設としての可能性が考えられるもの…があるので、以下の諸例を挙げ、本遺跡の土坑との関係で対比しておきたい。

①「土坑形」トイレ遺構例

第6表にあげた「トイレ」の遺構例を概観すると、一般に古代～中世前半で土坑形汲取式が支配的で、中世後半～近世前半には樹形汲取式、近世後半以降に桶・甕形汲取式が用いられるといった傾向が窺われる。本遺跡では樹形、桶・甕を伴う遺構は確認できないが、これら上坑群のなかには土坑形汲取式「トイレ」も皆無でないと思われる。長径150～200cm程度の圓丸長方形で南北又は東西に方位をとり家屋遺構に接したものにその可能性があろう。

これら土坑は、方位についておそらくは家屋の場合と軌を一にして溝や溝の方向性を踏まえて設置する場合が通常と考えられ、あるいは家屋に沿って、又はそれに接するか乃至は家屋内部にも設けられたものと想定される。

機能として受水槽、貯蔵穴、排水溜井、便槽、ゴミ廐棄坑等が考えられるが、機能の面から推測される深さからみれば、全体に掘り込みの度合いが乏しいといえよう。いずれも機能と明確に結びつくような特段の遺物等は出土しておらず判定に至らない。

ともに東西軸乃至南北軸をとって規模・形態にも共通性を窺わせるものが少数あり、性格は上記類似と思われる。これらのうちこれらと斜交する方位をとるものが一定数みられるが、共伴する遺物・遺構等の判別資料は乏しい。

不整円形の部類はゴミ廐棄坑の蓋然性が高いと思われるが確実な出土遺物はない。SK 1 4のみは、土師質捕鉢を出土しており厨房関連施設の可能性も考えられる。SK 2 1は、埋没した後のSK-1 4を切って掘削されている。軸の方位は同じであり、同一の性格のものかも知れない。

第6表 「土坑形」トイレ遺構例

遺跡名	時期	形式	規模	記事
藤原京右京七条一坊 西北坪	7末	土坑形汲取式	160×50×40	屋外吉方(南東)
"一条三坊	7-8交	土坑形汲取式	径75×30	
"九条四坊	7-8交	土坑形汲取式	210×140×50	南北
福岡・筑紫館 つくしのなかつ	8中	土坑形貯留式	130×140匁方	籌木(木簡再利用) ハエ蛹
"	"		400×135×125	隅方養コレセヨル/コアロスター
"	"			男女動物別
"	"		110×400	隅長方 有鉤条虫/豚 埋土=真黒
長岡京左京二条三坊 三町	8末	土坑形汲取式	160×26-35×30	不整長方 杭穴2 構内南北隅
平泉・柳之御所	12中~末	土坑形汲取式	上径80×160	マダラ カイ日本海製頭条虫 サケマス
伽羅之御所	"	"	下径60×100	
無量光院	"		深さ90×330	円筒形
大館・矢立磨寺	12中	土坑形汲取式	径100×80	円筒形
鎌倉・政所	13前	土坑形汲取式	154×94×74 164×50~70×50 186×68×50	東西 上器出土なし 南北 東西踏み板二枚合せ φ30六角孔
鎌倉・米町	12後~13後	土坑形汲取式	145×142×82 170×74 165×152×58 430×140	断面擂鉢觸丸長方 踏み板 杭 断面擂鉢円 断面逆台不整円 踏み板 杭 隅丸長方
一乘谷朝倉氏遺跡	15末~16末	樹形汲取式	100-200×50-100 ×50-100	四壁河原石 3-4段金隠
" 町屋例			180×100×100	主軸北西 6段石積み 長辺両側杭3-4
彦根・妙楽寺	15末~16後	樹形汲取式	180×150×50 210×180×60 300×390×40 150×110×30	石組建物背後1.5m 石組建物東 2.0m 建物北 1.0m 左右踏石

堺・環壕都市	14~18	木組樹形汲取式	各壁杭止 上層重複埋甕 熱分解蛋白／石灰質 道路挿み向い合う位置 (フロイス記述に同じ) 木組樹形一甕形→瓦質甕 →土師質甕 16C 3/4半期まで 大小処理未分離
広島豊平町	16後半	桶形汲取式	300×120×70 土坑内 竹／汚先端折り
吉川元春屋敷跡		桶	再利用筒木 85×75底×58 箸状木製品 ／95×75底×67
佐賀・名護屋城	16末	砂雪隱形汲取式	50×100×60~ 楕円／踏板石
木村重隆陣屋跡			利休考案 茶室用
彦根・彦根城表御殿	17~	甕形汲取式	2~4連、 桶形、 大形羽釜も。 土坑内／単体
彦根・彦根城埋木舎	18~	甕形汲取式	羽付甕大・羽まで埋込み 小・地上傾斜設置
石川鹿島町	17~18	桶形汲取式	167×127×54 楕円形
石動山大宮坊			動物媒介寄生虫なし ゴマ・ヒエ・アワ種子 120×60 円形 杉鉗屑
港区・汐留遺跡			
竜野藤脇坂家上屋敷	17~M	桶形汲取式	径40×50 (60L) 700件
仙台藩伊達家上屋敷	〃	甕形汲取式	50件
千代田区・江戸城			
竹橋門内大番所	1657~駄	甕or桶 石組	76×80×60 内部に甕or桶
文京区加賀藩前田家	幕末廢棄	樹形汲取式	122×116×93 壁際に15~大形杭跡
上屋敷八筋長屋			46×64×78 4.6.9.本 84-× 105×?
文京区大聖寺藩	幕末廢棄	桶形汲取式	50~70 円形上坑 (築残存)
前田家上屋敷			女性用簪／温石等 埋土鉛含有量 男性用の3倍

②水田関連土坑（貯水坑）

比較的近年までの発掘調査では、近代～近世など新しい崩壊についても、ともすれば対象とされずに看過するくらいがなくもなかった。これらのうち高松平野の水田地帯では、現耕作土直下層又はそれに接した層を含む概して淡黄灰色を呈したシルト混じり砂層で、時折、近世なかでもその後に埋め戻す水田かと思われる上層から切込む土坑がみかけられる。

第7表にみるよう平面形は長方・隅丸長方形ないし小判形が多く時に円形のものを含み、断面は「カマボコ」形が通例であって遺物は皆無に近いものがほとんどである。規模は、ほぼ長径100～200cm、短径50～100cm前後におさまる程度である。

埋土は周辺よりもやや灰色がかった程度で粒度もとりたてて差がなく、堆積も単層であるか強いて分ければ2層とされる程度で、洪水等で一時に堆積されたと思われるものが多い。

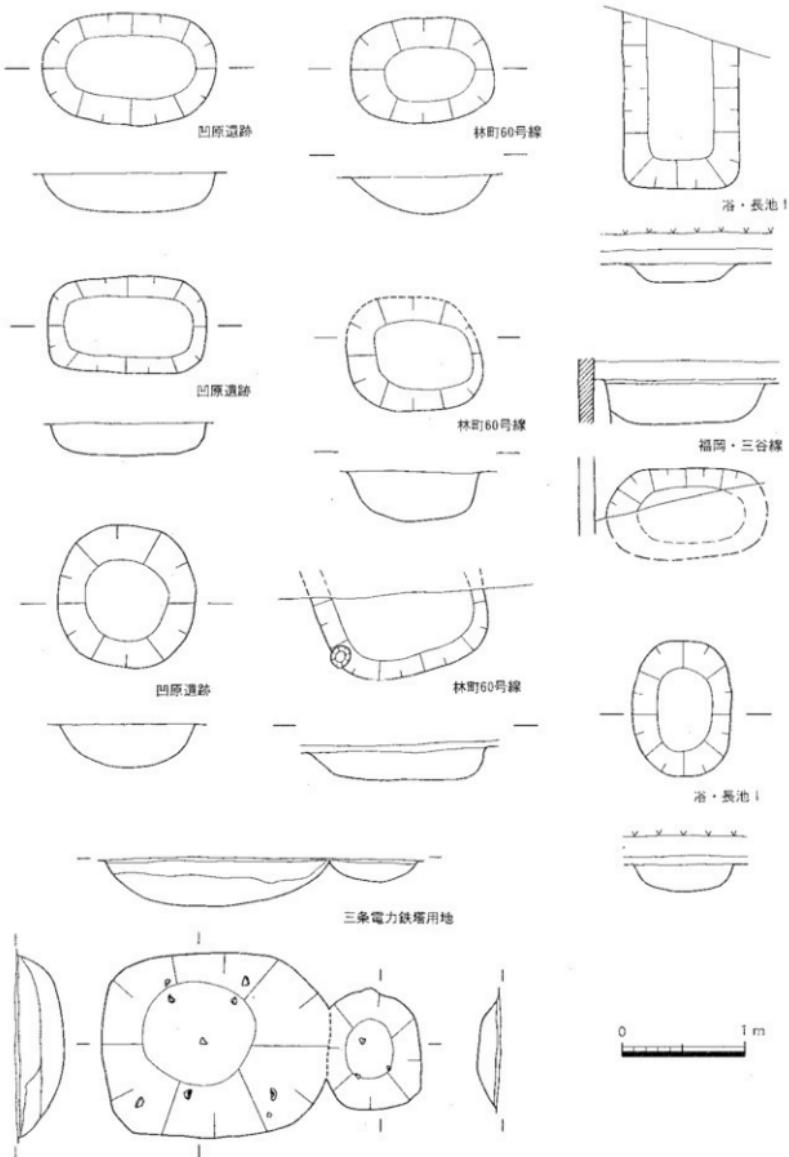
これが検出される位置に関しては、現行の地界もしくは現耕土直下で検出される近世後半頃とみられる地盤界に比較的近い場合が多く、或いは当該時期の構造面で検出された用排水路構造との関係でも、いわゆる水口に近い場所にある例が少くない（導水用の溝等は未検出）ようである。

遺物は、稀に染付器、土師質皿等の細片が散見される程度で廃棄物のための施設にはあたらず、機能を推測させる他の資料の出土もない。埋土の色調等にも肥沃・糞尿等の貯留を示すものもない。本遺跡の土坑群のなかにも、これらと共に要素を具備するものが含まれている。この種の構造の機能と目的であるが、あるいは「瀧岐ひでり」で知られる干魃時に水田全域に冠水できるほどの水の確保が困難な状況に備え、「ヤカン水」などに充てるため必要最低限の量の水を一時的に貯留する、通常冠水面に達しない程度の貯水坑という役割が想定できるのではなかろうか。

なお、調査時、近隣の農業経験者らしい年配者に、周辺水田地帯で明治以降のこの種土坑の存否について聴取りを行った二、三の例の範囲では、実見・見聞したなどの回答はなかった。又、この種施設について農業技術書等の記述も未見である。

第7表 水田関連土坑例

①さこ長池試掘	1.隅丸長方	150×90×13cm	コバルト印判手	b層が被覆
	2.小判	110×85×	地表-20cm／弥生面を切る	
②木田三軒屋試掘	1.隅丸長方			
③岡原遺跡	1.隅丸長方	120×70×	弥生面を切る	
	2.円	110 × ?	弥生面を切る	
	3.小判	140×90×	弥生面を切る	
④三条電力鉄塔用地	1.小判	190×150 × 40	切合後、染付片等点在	
	2.小判	95×80×20	切合先、染付片等点在	
⑤日暮松林	1.隅丸長方	100+×50+ × ?	弥生面を切る	
⑥市道林町60号線用地	1.小判	112×85×30		
	2.小判？	100+×140 × 20		
⑦諫別川多肥第17地点	1.隅丸長方	100+×50 × ?	弥生面を切る	
⑧坊城福岡三谷線用地	1.小判	130×75×30	地表-18cm	



第34図 水田関連土坑図

③遺物

a. 土器・陶磁器

S K O 1

306は、土師質鉢口縁である。復元口径26cm。内外面ともナデ、顯著なハケ目調整がある。

S K O 3

307は、備前壺底部片である。内面灰赤、外面褐灰。微細なゴマがみられる。IV期初か？

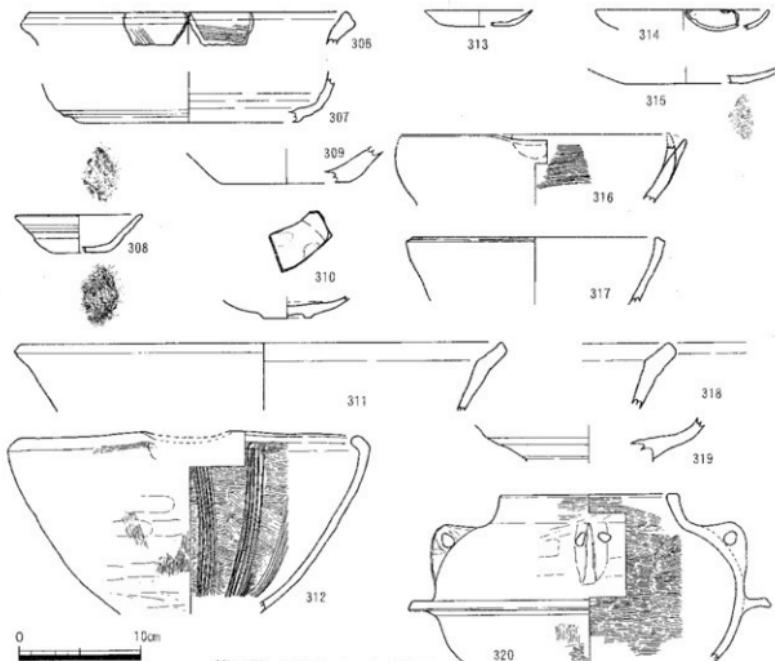
S K O 6

308は、備前小皿である。褐灰を呈する。外面はロクロ造りによる凹線が顯著である。底部は回転糸切り。重ね焼きにより口縁端部は5~10mmの範囲で一部に自然釉の光沢がみられる。見込み部には、窯印らしい2mm幅の条痕がある。V期、16Cであろう。

S K O 9

309は、上師質捕鉢底部片である。復元底径11cm。

310は、灰釉、砂目積み唐津陶皿底部片である。釉はにぶい黄橙に薄灰状の灰白が重なる。胎土は浅黄橙を呈する。低い兜巾状高台と外面下半は無釉。1610~1630年代のものである。



第35図 S K O 1~22 遺物

S K 1 4

312は、土師質擂鉢である。一括出土で完形復元。淡黄を呈し、焼成良く堅緻で外面指・板ナデにハケ目、内面ハケ目に6条単位の条溝。口縁内外ヨコナデ。口径27.8cm、残存高14.2cm。

S K 1 7

314は、肥前染付皿口縁片である。やや薄手の器壁は内抱えに立上がる。釉は灰白で蕨手文が灰オーラブで染付けられる。17C前半か。

S K 2 0

315は、土師質坏底部片である。胎土は密。復元底径は10cmである。

S K 2 1

316は、土師質片口鉢片である。胎土は密。内面ハケ、外面ナデ。復元口径18.8cmである。

S K 2 2

311は、土師質鍋口縁である。復元口径は40.1cm。313は、土師質小皿である。内外面ナデ調整。胎土に1mm以下の角閃石。口径9cm、器高は1.3cm。器形、調整等は606に類似する。

317は、土師質釜口縁である。復元口径20cm。外面に煤が付着。318は、土師質鍋口縁片。

319は、灰釉唐津鉢底部片である。釉色灰、にぶい光沢がある。外面下端底部寄り2~3cm幅は無釉である。破断面のうち2面に黒色の付着物が残るのは「漆縫」痕跡である。修繕後に再度使用されたことを示す。17C前半のものである。

320は、瓦質茶釜である。復元口径径は14.4cm、鉢部の復元外径は30cmである。体部上半は板ナデ、下半は粗いハケ目。内面はハケ目である。外面下半に煤が付着する。17Cのものか。

b. 木製品

S K 2 2 の木質遺物のうち下記の6点について図化した。

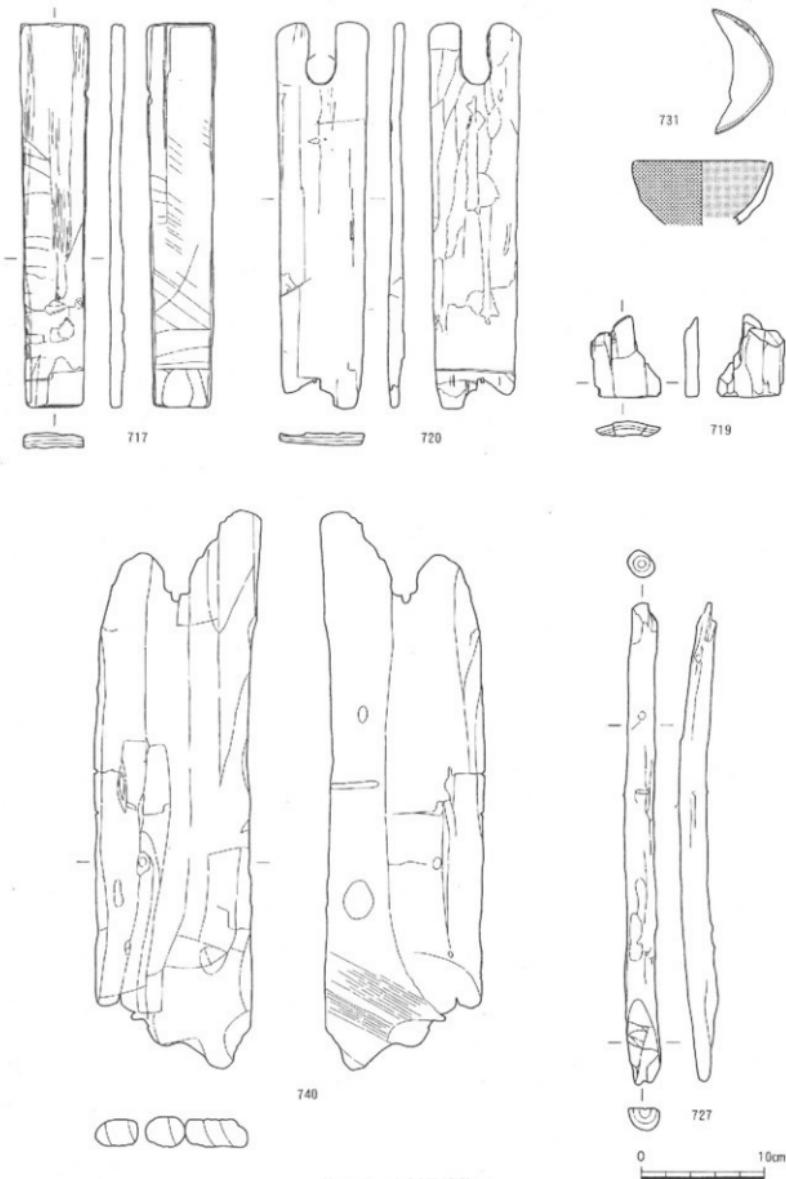
717は、桶材である。一端にはタガおよび底板との結合部と考えられる痕跡が残る。断面は僅かに湾曲をみせ、桶口（底）径の復元が大略可能である。板目取りである。モミ属。

719は、桶材で717とほぼ同種のものの断片である。マツ属複維管束亜属。

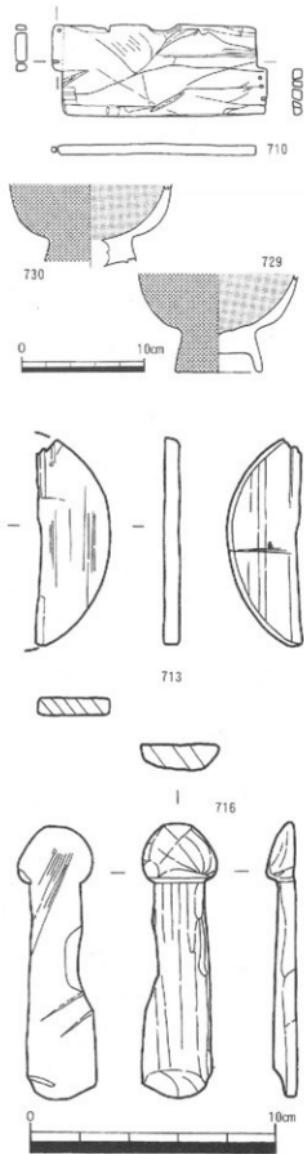
720は、桶材である。717とほぼ同大同形。取っ手取付け用孔がある点で相違する。孔には、輪切りにした丸竹を挿入したものであろう。孔から端部にかけて欠落部分がみられる。717とほぼ同寸で同一個体の可能性も考えられるが、直接の接合面はなく材質も異なる。取っ手孔を持つ部材が本体より長く作られ、手桶として使用されたか、又は取っ手部分が本体内に収まる釣瓶などにみる造りであるかは不明。スキ。

727は、丸木の枝材である。一端に刃物による切削痕。切削側を土中に刺し何らかの支柱等に使用されたのか。ハンノキ属ハンノキ節。740の下部で出土（第33図）。

731は、漆塗り椀である。材質はブナである。高台部分を含む約3分の2が失われ、木目に沿った残余3分の1が出土。口縁部が片口ふうに突出している。通常のロクロ挽きで製作できない形状であるが、片口状口縁を持つ「椀」の可能性も一応考えておく。通常の正円の楕口縁が上圧によって変形、固定したともみられる。729、730に比べ著しく薄手である。



第36図 木製品遺物-1



第37図 木製品遺物-2

740は、挽き割り板部材。マツ属複維管束亞属。木目に沿い2片に割れ隣接して出土。柾目取り。挽き割り面の一部に鋸目痕跡。材の用途は不明であるが、検出時に鋸目がみられる面を上に717等とともにほぼ水平で東西方向に置かれた状態で出土。従って、740等は北・西側のように石材による壁面の補強を施さない南側壁面の補強のため727を支持材として使用したものと考えられる。もとよりこれらは、桶等の部材としては廃棄されながら近辺から切取った727と共に再利用されたのであろう。

以下、その他の遺構木製品のうち主なものを挙げる。

710は、箱部材である。材質はモミ属である。板材の両端は、左右の対称的な位置で板の厚みに相当する幅の上又は下2分の1ずつの切欠きを作っている。残る端部の板面に垂直な方向で竹釘穴が開けられている。各長辺側には、板面に平行な方向で各2カ所に竹釘が残る。

729は、漆塗り楕である。材質はクリである。木取りは横木地。内面赤、外面黒に塗り分ける。高台の高さは3.5cmあるが、内底面の割りこみの深さが1.5cmであるために体部に比べて約2cmという底部の厚みが重厚感と安定感をみせている。

730は、漆塗り楕である。材質は729同様にクリで、木取りが横木地である点でも共通する。高台はいわゆる疊付部が欠失しているが分厚なつくりでは同巧である。薄手の731とは異なった樹種が選択されている。

図面上では表現出来ていないが復元口径は729よりも小振りとなると考えられる。

713は、曲げ物底板片である。材質はヒノキである。底板の形状については(正)円形と楕円形乃至小判形とに大別できると考えられるが、本例は円形のものであるとすれば、その約3分の1個体分にあたる。

肉眼観察での範囲内であるが、表面の状態から漆塗り製品であったのではないかとみられる。

716は、男根形木製品である。材質はマツ属である。柾目取りに近い板状の材料を用い、かなり写実的な男根形の上面観で、リーフ式に成形している。裏(下)面は割り加工の平らな面であり、表(上)面は、削り加工を行った後に、何らかの研磨具を使ったらしい滑らかな仕上がりとなっている。

井戸SE01からの出土であるが、本品自体が祭祀的性格を持つ遺物であるのはほぼ確実として、井戸乃至は水の利用に関わる祭祀行為の有無については確認できていない。本市域の類似遺物出土例では、井手東I遺跡のSD10・11陽物形祭祀具がある。弥生Ⅲ期とされていて系譜的繋がりはたどれない。中~近世例は未見である。

3. 柱穴・建物跡

本遺跡はその立地が春日神社の現在地に近く、同神社のお旅所の直近であり周辺では比較的恵まれた条件にあったものと思われる。

東と西を流れる旧河道が形成した南北に伸びる中洲状の自然堤防上に住居域を形成し、その東西の縁辺とそれに続く旧河道を水田＝農耕域として、両者を併せて完結する一単位の集落を構成して来たものではないかと考えられる。

W I・II区では、遺構は調査区の南西にあたる部分に特に集中している。この部分の居住者が溝を巡らせるについては相応の政治、経済的な条件が必要であり、該段階で一定以上の階層に成長していたことが想定される。狹長な調査区の幅に制約されて現状では南側の状況が不明であるが、遺構が南側にも広がることは明らかで、方形に巡る想定される溝は、小規模ではあるが周囲から屋敷を隔離する塙としての機能をも意図して設けたと考えられる。

S D 1 8付近から鉄製鎧が出土しているのも、居住者が軽装備であれ武器を保有する程度の階層であることを示唆すると考えられる。

調査地点は、山田郡条里の現況坪界線を延長し推定した坪付で5条15里29坪となり S D 0 8付近がその南西隅に相当する。1948年撮影の空中写真で確認できる当時の農家の位置を、さきの推定復元5条15里の方格地割内に落としてみると、坪の南西隅（ないし四隅の一点）に所在するものがみられ、近世以来の散村形態の継承を示唆する農家の立地状況を示している。

S D 0 7を西辺とする一町方格の範囲を想定すると、その南西隅にあたる S D 1 2、2 4の方形溝に囲まれた部分は5条15里29坪を領域とする農業経営主体の居住域にあたると考えられ、坪内の南西隅に立地するという農家位置の先例ともみられる。

第8表 中世農業經營例（「壹町ニ附惣夫積事」『清良記』）

耕 地 地 制	水 田					烟 地					養 育 修 理	燃 料	家 屋	用 水 路 浚 渫	茶 具	農 具	牛 馬	肥 料 用 草 刈	小 計	細 計
	二毛 作田	二毛 作田	二毛 作田	山	小	麦	烟	烟	烟	小										
面積	3.0	3.0	3.0	1.0	10.0	3.0	1.0	1.0	0.5	2.5										反
労力	25	33	27	38		22	25	50	30											人
逐勞力	75	99	81	38	293	66	25	50	15	90	20	120	20	20	10	12	120	40	362	811

近世後期『下林村順道絵図』でもこの種の坪ごとに一ないし二戸の配置が顕著にみられる。これらの住居配置からみて、ほぼ一町方格=一町歩を前後する農業経営単位としての農民層の存在が仮定できるのではなかろうか。

そのような階層の内容がどの程度のレベルであるか詳細を示す資料はないが、たとえば中世末の代表的な農書として知られた『清良記』にみる「一両（領）具足」級の範囲に含まれるとすることが可能でなかろうか。

『清良記』「一両具足附田畠夫積事」（『清良記』卷七之下）には「田地壹町と云は、近代壹両具足と云侍壹人分の領地也。此田畠人夫役の事…」とある。田地壹町程度を有する、一両（領）具足の侍は「戦国時代…田地と馬を所有し自分で耕して生計を立て、平常は武士としての勤務や社交はなかった。耕作に出る際は、具足・わらじ・食糧を槍に結んで立て、事あればすぐに軍役に服し」で上佐・伊予等で典型的にみられたとされるが、讃岐においても類似例の存在は考えられるところである。『清良記』にみる「田地壹町」についての「夫積」は、燃料・牛馬飼育役等をも含め累計した年間総計 811人役（牛馬各1匹及び約 200人分の女性労働は計上せず）にのぼる積算が行われている（第8表）。当主が軍務で欠ける日数等を考慮に入れると 811人役は当主を含め成人男性 3名を要する労働量であろう。室内労働力のみで不可能とも言えまいが、1～2人の使用者を要する程度の規模の経営が想定できようか。

その上で「夫田畠三百六拾坪を一反と言事は、人一人一年の食物に割当たる物なり。三百六十日なれば、一坪の作を以て日の食とす。これによって一反の命と言」い（『清良記』卷七之上「…清良被問農業事」）「田地壹町」の扶養数を10人とみている。さらに続け「田夫のありこつがらを見ても…皆壹までなをして農に心を人、其上武道を心かけ、郷人なれ共歴々の武士のならぬはたらき共を度々仕、感状あまた持たる者多候」とし、当時、武士と農民が未分化の状態にあったことも示される。

又、文献資料から、室町時代農家の階層別住居規模としては、地侍層は床面積で 80～120 m²、名主層は 32～80 m²、被官百姓層は 14～60 m²との見方がある（伊藤鄭爾『中世住居史』）。

中、近世の村落乃至屋敷地で、条里制地割の坪を単位としながら変化するさまざまな態様が知られるが、1 反を 1 単位とした地筆が中世末期には 60～180 歩の小単位に細分化された例が高槻・宮田遺跡などでみられる。溝・柵等で区分される、数棟の建物及び井戸を 1 単位とした区画 3 グループがありそれら建物群の敷地面積が 1 反強となるという（「中世の村落」金田）。本遺跡に近い東山崎・水田遺跡の例では、C 地区、D 地区で 16～17 世紀代の集落、建物群が検出されているが、1 辻 20～40m 程度で溝又は柵列で区画され、これに井戸を伴う建物が 1 群をなしているのが認められる。

ここでは C 地区で「比較的規模の大きな 5 間 × 2 間以上の床をもつ掘立柱建物と付属建物がみられ」、D 地区は「多少新しい時期のもので…同規模の建物が数棟みられること、屋敷地と屋敷地の区切りが不明瞭である点」で、両地区の「屋敷の所有のあり方や、持ち主の社会的・経済的な性格の違い」が指摘されている。又、ほぼ同時期の県下西讃地域集落遺跡数例と比較して、これらが「規模の小さい掘立柱建物によって構成され…C 地区で検出された建物群は…大きいことから富裕な農民の屋敷であると考えられる」とされる（『東山崎・水田遺跡』）。本遺跡は、これらの諸例と対比して時期や規模・態様は同一ではないが全くかけ離れたとはいはず。その一類型といえるのではなかろうか。本遺跡の S D 1 2、2 4 の方形溝に囲まれた S B 0 5 等の居住者は一町方格を前後する規模の農業経営を主としながら時に在郷武士としての役割を果すことも有り得たのではなかろうか。

①掘立柱建物

S B 0 4 (第38図-1)

調査区南西端で東西方向に桁行3間(4.4m)、梁間2間(2.3m)、床面積10.1m²、主軸方向N-15.2°Eの掘立柱建物である。東柱に当る明確な遺構はみられない。柱穴径は15~45cmの範囲である。方位、位置からみてS K 0 1乃至0 8との相關関係に注意すべきと思われる。

S B 0 5 (第38図-2)

S B 0 4 東隣に方位をほぼ同じくして立地。東西方向に伸びる桁行4間(7.2m)、梁間2間(3.3m)、床面積23.8m²、主軸方向N-16.5°Eの掘立柱建物。柱穴径は18~50cm。東柱痕とみられる柱痕がありその東半土間、西半高床部分と想定できよう。同時併存を確認できる資料はないが、直近にS E 0 1が所在し、漫漶して長期に再使用の痕跡がみられるので併存もあり得よう。L乃至コ字形に掘られた溝S D 1 2乃至2 4に囲まれた区域で、本遺跡でも主要部分に当るのであろう。北西隅柱穴には柱根(第41図-1)が遺存した。

S B 0 6 (第38図-3)

次出S B 0 7と方位をほぼ同じくして近接するので、付属棟の可能性もあろう。建物規模に対して柱穴径が30cm前後でよく捕い、比較的大であり倉庫ともみられる。桁行2間(2.9m)、梁間1間(1.6m)、床面積4.6m²、主軸方向N-11.5°Eである。

S B 0 7 (第38図-4)

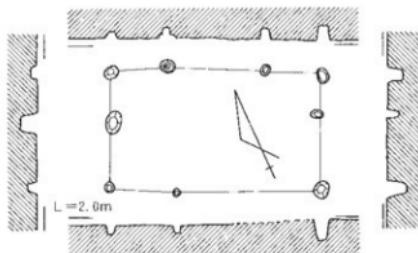
調査区北西側に位置する。東西方向に延びて桁行3間(5.9m)、梁間1間(2.9m)、床面積17.1m²、主軸方向N-10.0°E、柱穴径15~30cm。東柱痕2基がみられる。東半土間、西半は高床となる所謂「整型四間取」乃至近畿民家の「前座敷三間取」等に類する可能性がある。

S B 0 8 (第39図-1)

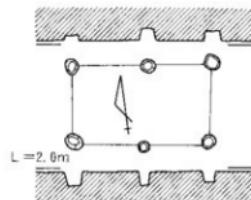
調査区中央やや北寄りに位置する。東西方向に延びて桁行4間(6.1m)、梁間2間(2.9m)、床面積17.7m²、主軸方向N-17.5°E、柱穴径17~35cmを示す。東柱痕1基がみられるので、東半土間、西半高床であろう。S B 0 7に近似したつくりであるが梁間がやや短い。また方位がS B 0 7より東偏する点は時期差による可能性が考えられる。更にS B 0 9と重複しているが切合い関係は明らかでない。

S B 0 9 (第39図-2)

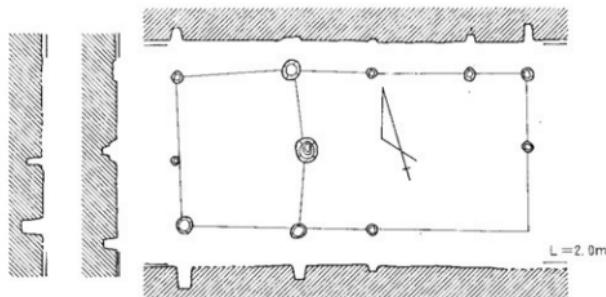
調査区中央やや北寄りでS B 0 8に重複している。方位がS B 0 8とほぼ同じであり或いはS B 0 8-S B 0 9へと規模拡大・建替えが行われた可能性もある。建物敷西半に性格不明の不整形遺構(井戸跡?)がみられる。東柱痕が未確認であるのは元来無いのか不整形遺構の影響によるか明らかでない。東西方向に桁行4間(6.1m)、梁間2間(2.9m)、床面積17.7m²、主軸方向N-17.5°E、柱穴径22~45cmである。恐らく東半土間、西半が高床であろう。S B 0 7に近似したつくりであるが梁間がやや短い。また更に、S B 0 8と重複しているが切合い関係は明らかでない。



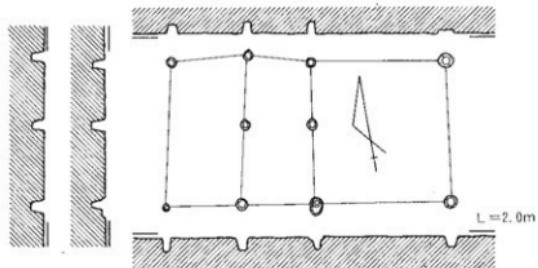
1. SB04



3. SB06



2. SB05



4. SB07

0 2.5m

第38図 S B 0 4 ~ 0 7 平面・断面図

S B 1 0 (第39図-3)

調査区南東隅に位置し方位が近似した南北方向の溝 S D 2 5 乃至 2 6 で上記建物群とは分離された立地と見えなくもない。桁行 4 間 (5.5m) で、梁間 3 間

(4.4m)、床面積では 24.2m² で、主軸方向 N - 6.5° E、柱穴径 15~25 cm である。

例示の範囲では梁間 3 間に復元されたのは本例のみである。

恐らく東半は上間、西半が高床であろう。

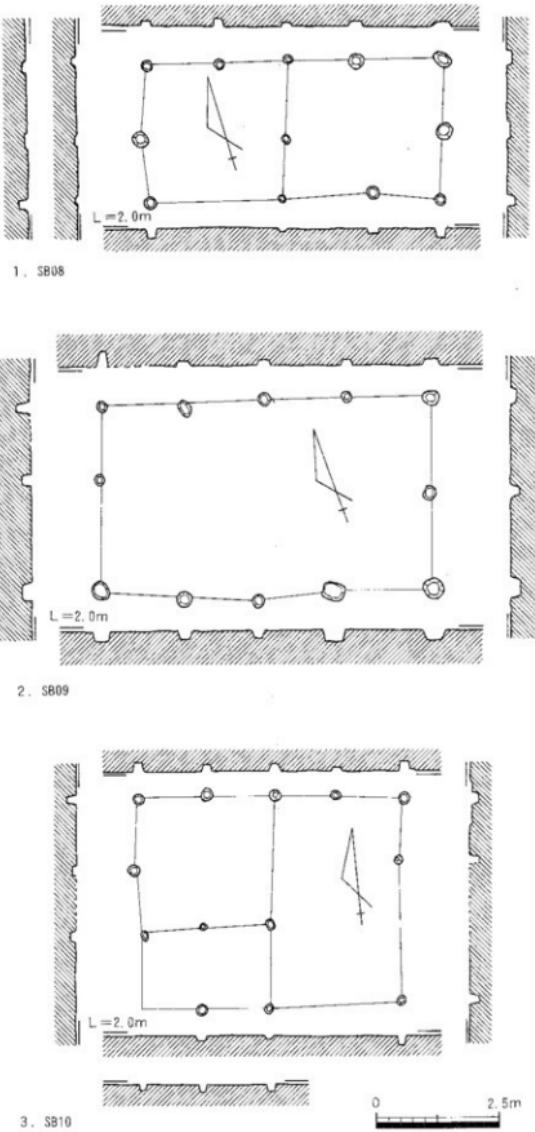
*

以上、W I・II、W I 拡張区を通じ 10 棟の掘立柱建物復元につき試案ともいべき例を示した。復元の限りで南面・平入で床面積は倉庫らしい S B 0 6 を除いて 10.1~33.6m² の範囲にある。

中世村落の構成員は、在地領主、田堵・名主、小百姓、流浪的農民、下人・所從等があるが、本遺跡の掘立柱建物は、前記の〔伊藤1968〕に従えば、被官百姓層～名主層の住居の規模に相当する面積の範囲に収まるようである。

②柱根

調査地は砂質の沖積低地で地下水位も高く、表面精査で確認・掘削した掘立柱痕跡の中には腐蝕をまねがれ原形をとどめた木材が少なくない。いずれも腐蝕で上端を欠損した掘立柱建物の柱根部で、先端加工材である。下記にその実測、樹種鑑定例を挙げた



第39図 S B 0 8 ~ 1 0 平面・断面図

15点を大別すると a. 皮剥及び皮付丸太材と b. 角材を中心に面取り加工が行われたものに分れる。
a. は大口径で大荷重に耐える目的に当てられ、マツ（マツ属複雜管束亜属）を用材とし（根石は見られない）、b. は当初から柱材に当てた物ではなく、貫孔等の存在からみて元来掘立柱材以外の建築部材である物の再利用とみられる例が多い。用材もツガ、クスノキ科、トネリコ属、クリ、コナラ属アカガシ亜属等、堅硬、耐朽性中庸以上の傾向がみえる。

701 (P08 40図) は、ツガ。芯持ちの木取りによる角柱である。端部は柱軸に対しほぼ直角に交わる平坦面に加工される。角材だが端部に向けて断面がほぼ円形となるように削り込む。

703 (P27 40図) は、マツ（マツ属複雜管束亜属）。芯持ちの皮剥丸太材である。皮を剥ぎ先端のみを加工しており、周囲からナタ様工具で低い円錐状に大まかに削り出す。木部最大径は15cmである。材質・規模、使用・加工法等で類似の例が散見される。

709 (P25 40図) は、マツ（マツ属複雜管束亜属）。芯持ちの皮付丸太材である。取上げ後に皮は剥落した。ナタ様工具で先端のみ切断・加工する。端部は極めて低い偏心した円錐状を呈する。木部最大径は15cm。材質・規模、使用・加工法等で類似例が見られる。

721 (P248 41図) は、マツ（マツ属複雜管束亜属）。断面長方形の貫孔痕を持つ削り抜きの、角柱材で建築部材を掘立柱材に再利用したものである。貫孔は年輪・木目に直角方向である。

733 (P41 41図) は、クスノキ科（クスノキ以外、第4章参照）。ほぼ方柱で11.0×11.5cmの丁寧な加工の角材である。材質の面からも本遺跡の柱根では稀少例である。建築部材転用？

736 (P66 41図) は、トネリコ属。部分的に面取りを行うが、全体として不整形であり断面がほぼ三角形や長方形に近い形を示す部位等を含む。先端部は乱雑ともみえる打撃的な加工で、偏心して鋭角的に削り出している。

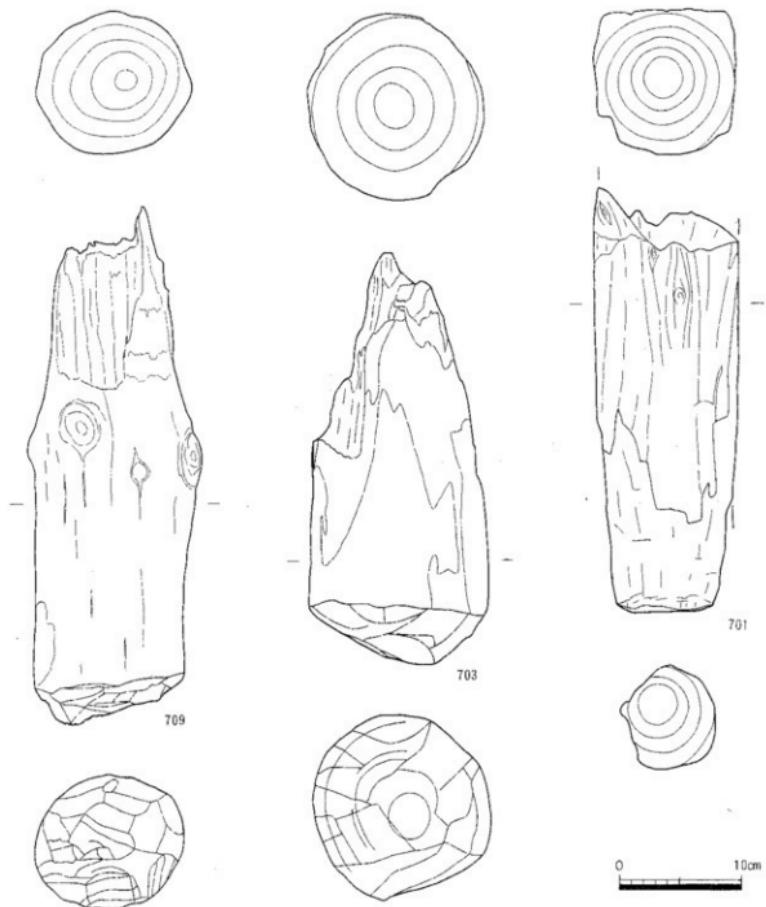
726 (P36 42図) は、マツ（マツ属複雜管束亜属）。芯持ちの皮剥丸太材である。皮を剥ぎ先端のみを加工している。端部は材のナタ等による切断後、対抗する2方向から鉗挽きの加工を行い柱軸に対しほぼ直角に交わる平坦面に仕上げている。木部最大径は11cmである。

739 (P試掘 42図) は、マツ（マツ属複雜管束亜属）。芯持ちの皮付丸太材である。取上げ後表皮は剥落した。先端のみナタ様工具で切断・加工する。端部は低い円錐状ともいえる形状を示すが主な打截は4方向から加えられている。木部最大径は17.5cm。材質・規模（柱直径）、使用・加工法等で類似例が見られる。直径最大の一組に属する。

741 (P30 42図) は、マツ。芯持ちの皮付丸太材。表皮は取上げ時ほぼ完存していた。先端のみナタ様工具で切断・加工し、端部の主な打截は3方向から加える。木部最大径は16.5cm。材質・加工法等類似例中で直径最大群に属する。

718 (P166 43図) は、ツガ。縦方向に分割して断面はほぼ半月形を呈する。チョウナ若しくはナタ等により幅3～4cm単位で全面陥さず面取りを施す。端部は半月形の弧側から弦側向きに斜めの打截を加えて接地位置はほぼ直線状となる。本遺跡で加工方法の類似例はみえない。

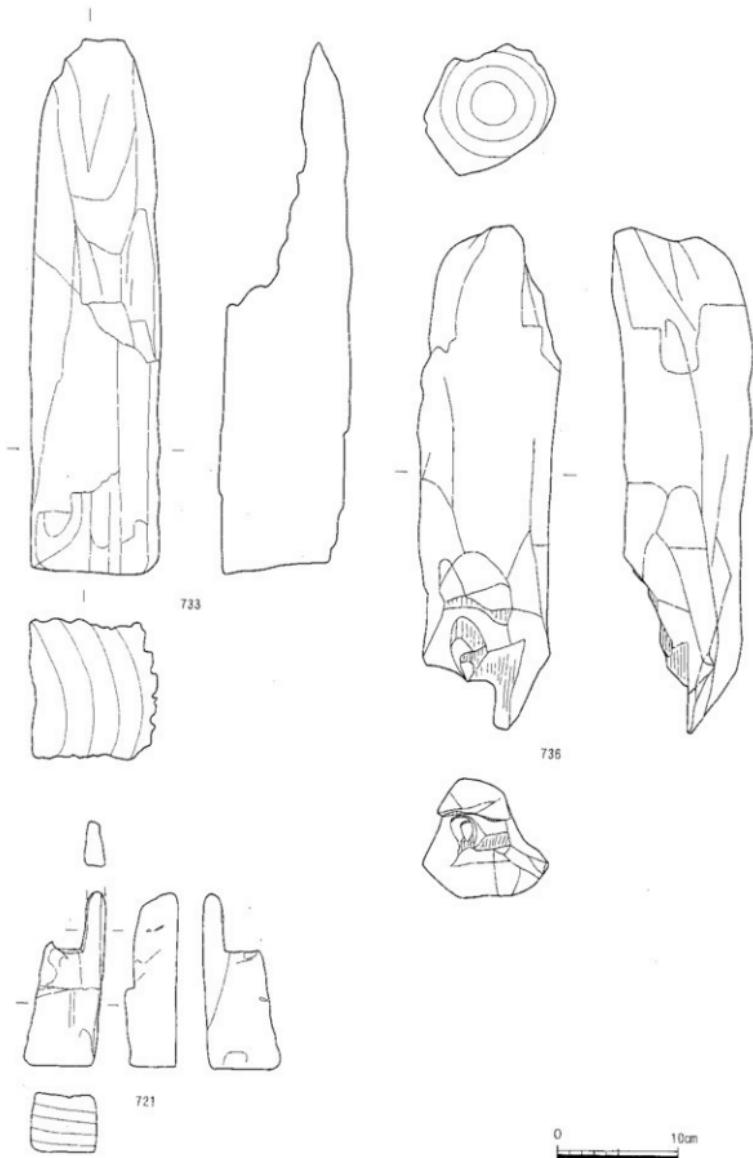
737 (P226 43図) は、コナラ属アカガシ亜属。削抜き加工材であるがかなり腐蝕が進行し、中ほどの削抜き部が欠けか貫孔を含めて確実な原形は断定しがたい。現形状からは鳥形等を模した民俗的器具ともされ、建築部材ともみえる。材質がやや特異である。柱穴からの出土であり、いずれにせよ再利用による柱材である。



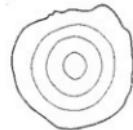
第40図 701/703/709 実測図

738 (P21543図) は、マツ（マツ属複雑管束亜属）。皮剥丸太材に近いが、荒割りした断面で芯を含む約2／3に当る分割材である。部分的に面取りが施される。接地面は打截によりほぼ平坦に加工されている。

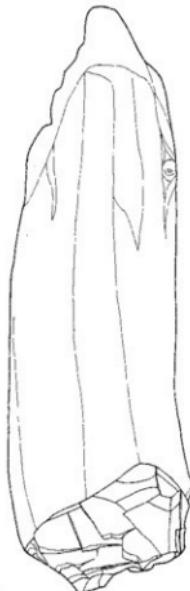
724 (P25344図) は、マツ（マツ属複雑管束亜属）。芯持ち材であるが 738等のような分割材である。但し小振りの柱材として使用されている。



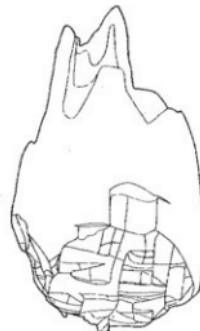
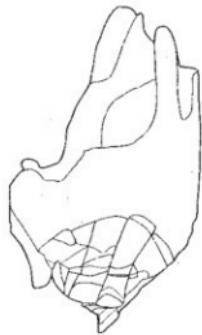
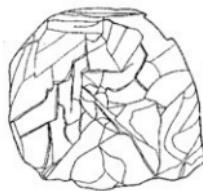
第41図 721/733/736 実測図



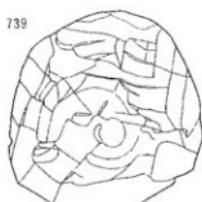
726



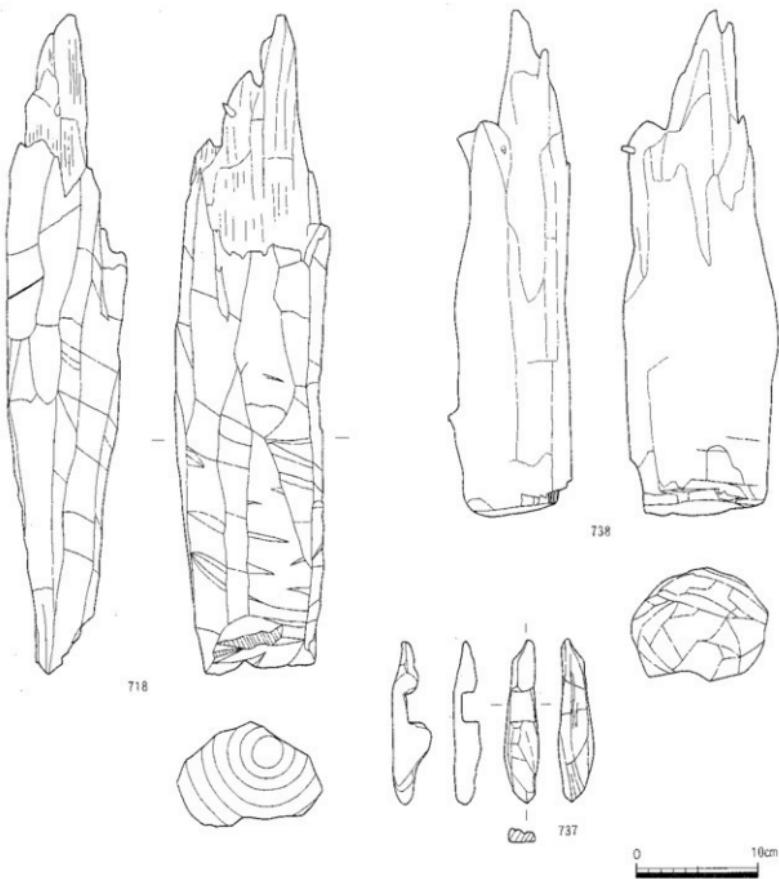
741



739



第42図 726/739/741 実測図

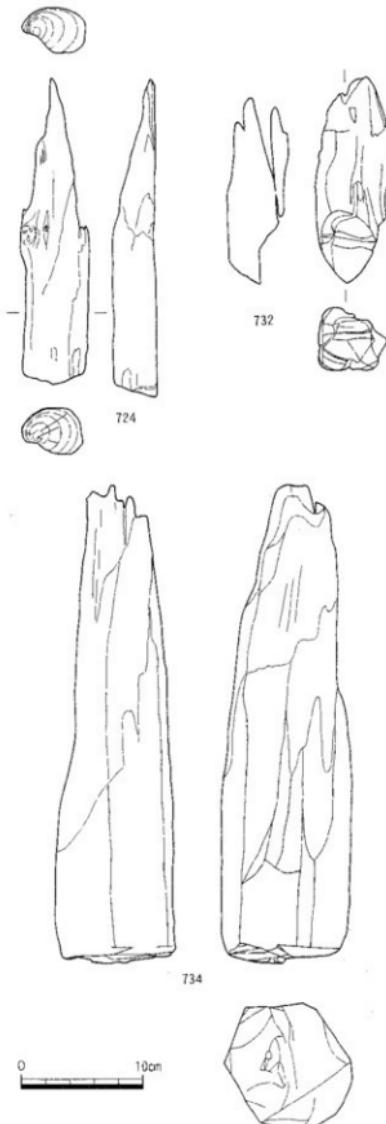


第43図 718/737/738 実測図

732 (P27244図)は、クリ。5.8×5.4cmの角材である。端部は斜めに三方向から鋭角的に打截されるが打込み位置に一方向のみ喰い違いがありその形状は不整である。恐らく建築部材の再利用によるものであろう。

734 (P27344図)は、ツガ。断面は概ね六角形に面取りされる。接地部分の断面は軸方向にほぼ直角をなす平坦面である。

③柱根据方



次図に柱根据方断面の実測例を示した。

13件（14基）を挙げているが、遺構の検出面のレベルは海拔高で1.90mを前後している。

発掘前の耕作土地表面は、図示の検出面から所謂床土層を含めた20~30cm上部である。検出面から柱根下端までの深度では、(P226を除く) 41~62cmの範囲に収まっており、柱の口径による顕著な差はみられず、およそ50cmが平均的な値の様である。海拔高でも2.00m~74~48cmにあり、大差はない。

P66、P166では、残存柱根の全部乃至は下半部で、自然堆積したと考えられる砂質土層に直接木部表面を接しており、根固めや埋戻しによって攪乱された土層は介在していない。

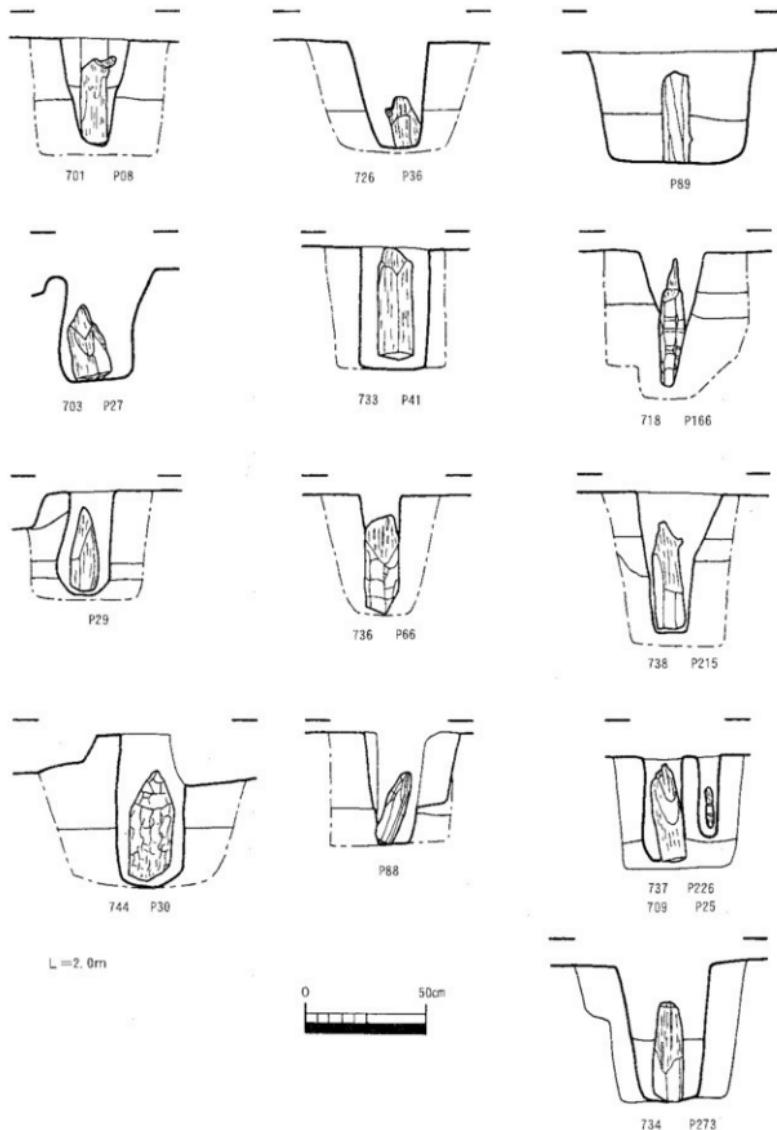
これは、建柱前には特段の「掘方」を掘削することなく、上方からの力により「打ち込む」方法がとられたものと推定される。

そして、用材の形状・性状等から見ると、面取りが行われた転用材らしい点、ツガ、トネリコ属等の樹種であり、他に柱として用例の多いマツの類ではない。

一方、P27、P30に代表的に見られるように、皮付乃至皮剥丸太材を使用した場合には、建柱の際に事前に設けられた掘方から浮く状態か、又は柱材の周囲に根固めの土が充填され埋戻された状態を窺うことが出来る。

図示例でマツ（マツ属複雜管束亜属）丸太材が用いられる場合は、皮付乃至は皮剥の別なく、事前に設けた掘方に柱材を落し込むといった建柱方法が取られた事を推測させており、樹種による用材、建柱方法の選択等の特徴が示される。

第44図 724/732/734 実測図



第45図 柱穴振方断面図

④遺物

P 1 4

322は、染付（青花）碗口縁片である。釉は明オリーブ灰であり、深みのある光沢に富む。口縁はほぼ直立して終わっている。内外両面とも口縁下部に各2条の円囲線文の染付が巡る。16Cの中国輸入品である。

323は、染付（青花）碗底部片である。釉は明オリーブ灰色で柔らかい光沢がある。断面が鋭角二等辺三角形に近い高台の桙付以外は全釉である。高台外側面に1条とその付け根部分に1条、見込みの周縁付近に2条の円囲線文が巡る。

見込みには草花（？）文が描かれる。断続的なケズリが高台の内面にみられ中国製としての特徴を示している。322とは同一遺構の出土でもあり、釉調・胎土等の共通性からみて同一個体の可能性が高い。中国輸入品で16Cのものである。

P 1 5

327は、上師質金口縁小片である。内外両面ともナデ。形骸化した「羽」部は貼付けである。

P 3 1

321は、土師質小皿底部である。復元底径 6cm。ピット底部砂層からの出土である。

P 3 7

328は、土師質捕鉢底部である。復元底径14.3cm。内面ナデ、外面ナデに粗いハケ目調整。

P 4 6

329は、土師質土製品である。現存口径 5.3cm、厚 0.8cm。微砂を含む胎土は良質である。焼成良好。内外面ナデ調整、上面灰白、下面浅黄橙を呈する。側面のみを図示したが、現存する部分の平面形はほぼ正円形である。かなり摩耗があり正確な原形は不詳である。

或いは塙壺の蓋とも考えられるが、周縁にやや凹凸を感じられ、無高台極の底部のみを磨研して再利用した駒石と見られなくもない。

P 5 4

331は、土師質小皿である。低火度、軟質で焼成時炭素吸着によるとみえる黒褐色である。底面と器壁が明瞭な稜を形成。口径に比し底面径大で、本遺跡で希少例に属する資料である。

P 6 0

334は、土師質小皿である。口径 8.5cmである。胎土、器形、法量、調整等は土器埋納遺構 S P - B 出土 607と類似する。

P 7 8

330は、土師質小皿である。口径 6.6cm、高1.1 cm。本遺跡出土の土師皿中で最小である。

P 8 2

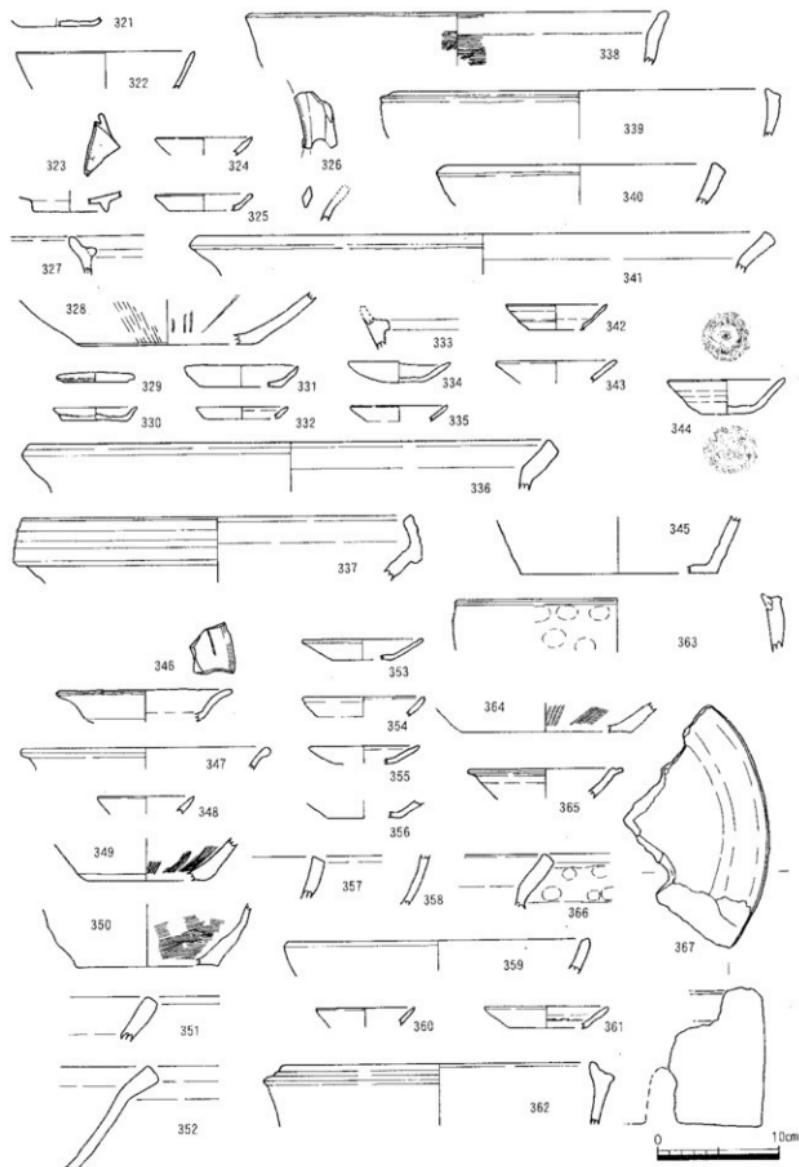
336は、土師質鏽口縁小片である。復元口径42.5cmで内外両面ともナデ調整。

P 8 4

332は、土師質小皿である。復元口径 7.6cmの小型である。内抱えに立上がり中ほどで外反して、口縁端まで直線的にのびるため屈曲点で稜が形成されている。

P 9 2

337は、備前播鉢口縁である。にぶい赤褐を呈する。ロクロ造り、重ね焼きであり口縁端面は幅広く伸び、2条の浅い凹線がめぐりやや内傾する。復元口径32cm。V期、16C後半か。



第46図 P 14～24.5 遺物

P 9 3

346は、青磁輪花皿口縁片である。釉は灰オリーブを呈し貫入がある。器壁は底部から45°前後で立上がり、中程から罐反りに外反し口縁端に至る。

輪花は片流れの波頭状に線どられ、その形状に沿い口縁内側の素地に2条の回線が彫られる。器壁内面の中程にも断続する凹線1条が施される。復元口径14.4cm。

中国輸入品で15Cのものである。

P 1 0 8

353は、土師質坏である。胎土に微砂を含む。器壁は緩傾斜で外反ぎみに口縁端部へ至る。

P 1 1 4

347は、青磁小鉢口縁小片である。灰オリーブの釉は摩耗により光沢を失っている。口縁端は玉縁状に折返す。復元口径20cm。中国輸入品で14~15Cのものである。

P 1 2 0

348は、土師質小皿片である。復元口径 7.9cm。焼成良である。

P 1 2 5

349は、土師質擂鉢底部である。復元底径10cmである。

P 1 3 9

350は、土師質甕（？）底部片である。復元底径11.7cmである。摩耗があるが、内面はナデ及びハケ目調整で明赤褐を呈し、外面ナデ、赤褐を呈する。器表面の色調等からみて二次的な熱を受けていると考えられる。本遺跡の土師質土器の中では、器種・器形ともに異質な1点であり時期的にも遡るとみられる。SD 07、20出土の破片に接合する。

P 1 4 0

351は、土師質鍋口縁片である。

P 1 4 3

352は、土師質鑊口縁である。残存高 8.8cmで、内外面ともナデ。

P 1 5 5

360は、土師質小皿片である。復元口径 8 cm、内外面ともナデ調整。

P 1 5 8

338は、土師質鍋口縁である。復元口径34.2cm、内外面ともにハケ目がみられる。

P 1 6 5

324は、土師質小皿片である。復元口径 7.9cm、内外面ともナデ調整。

P 1 7 6

325は、土師質小皿である。復元口径 8 cm、器高1.35cmで小ぶりのグループに属する。器壁は底部から斜め上方へ直線的に伸び端部を丸くまとめる。胎土は密である。

P 1 7 7

326は、土師質内耳付釜耳部片である。煤付着がみられる。

P 1 8 2

341は、土師質鍋口縁小片である。復元口径46.5cmである。

P 1 8 4

333は、土師質釜小片である。「羽」=鶴の形骸化の程度は 327に類似する。

P 190

335は、土師質小皿片である。復元口径 7.7cmである。

P 191

342は、土師質坏片である。

P 197

343は、土師質小皿片である。復元口径 9.7cmである。

P 200

344は、備前小皿である。にぶい褐色を呈し内面上半部にゴマが著しい。ロクロ造り、底面糸切り痕があり器壁中位から口縁部へかけ外反する。見込み面の一隅に窯印らしい長さ 2cm、2条一対の沈線がある。復元口径 9.6cm。

V期以降、16C後半であろう。

P 205

339は、土師質釜口縁片である。復元口径31cmで、外面に煤付着を見る。

P 207

354は、土師質小皿片である。復元口径 9.9cmである。

P 212

355は、土師質小皿である。復元口径 9.2cm、残存高 1.5cmで内外面ともナデ調整。胎土は1mm以下の角閃石、長石を含み粗い感触がある。

P 213

356は、上師質坏底部片である。復元底径 6cmで、内外面ともナデ調整である。

P 216

357は、土師質鍋口縁小片である。

P 223

358は、土師質釜腰部片である。外面に煤が付着する。

P 225

359は、土師質鍋口縁小片である。復元口径25cm。

P 226

340は、土師質鍋口縁小片である。復元口径22.4cm。

P 227

345は、備前壺底部片である。灰色を呈し、内外面に径数mmの剥落痕がある。III～IV期か。

P 228

363は、土師質釜口縁である。復元口径26.4cmで、外面に指頭圧痕が著しい。

P 230

364は、龟山焼捕鉢底部片である。復元底径14cmである。内外面ともナデで、内面は灰を、外面は灰白を呈する。胎土は密で焼成良好である。

P 231

365は、灰釉、溝縁の唐津陶皿口縁である。P 262の 372と接合し完形に復元。釉は灰白で霜降り状の無光沢である。外面の施釉は口縁から約 2cm の範囲で以下は無釉。復元口径12.4cm。17C初である。

P 236

366は、土師質鍋口縁片である。外面に煤、指頭圧痕がみられる。

P 237

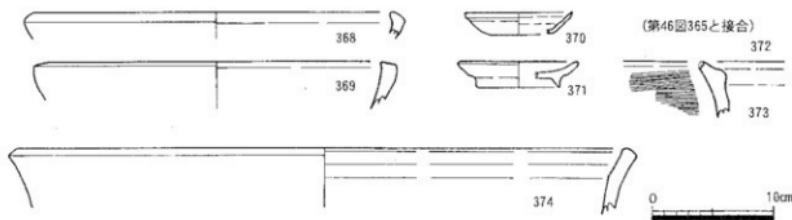
361は、土師質小皿である。復元底径10cmである。

P 241

367は、石臼（上臼）片である。凝灰角礫岩製で、供給孔を含む面で折損し残存高11.2cm。二次的な熱を受け作業面と側面に煤、炭化物の付着が著しい。窓心材等に再利用したらしい。

P 245

362は、土師質釜口縁である。復元口径25.4cmである。



第47図 P 250～277 遺物

P 250

368は、土師質擂鉢口縁片である。復元口径29cmである。胎土は密、焼成良好である。

P 258

369は、土師質釜口縁である。復元口径29.6cmである。「羽」は全く形骸化している。

P 261

374は、土師質鍋口縁である。復元口径50cmである。外面に煤の付着が顯著である。

P 262

370は、土師質小皿である。復元口径 8.8cm。胎土は密である。

372は、灰釉、溝縁の唐津陶皿底部である。焼成不良によって剥めくれ・亀裂がみられる。内面は見込み部分が殆ど無釉で、外面下半部も無釉である。

兜巾の高台は同器種の器と重ねて使用したための岸耗が著しく、基筒底に近くなつて豊付が器の内面に対応する曲面を呈して、滑らかな触感を与える。

底径 4cm。P 231出土の365と接合、完形となる。17C初である。

P 271

371は、土師質小皿である。低火度、炭素吸着により褐灰色を呈し、極めて浅い器形で断面が直角三角形の高台を持つ。特殊な用途の器種とも思われるが未詳。復元口径10cm。焼成良。

P 272

373は、土師質釜口縁部片である。内外面ともナデ。内面はさらにハケ調整を施す。

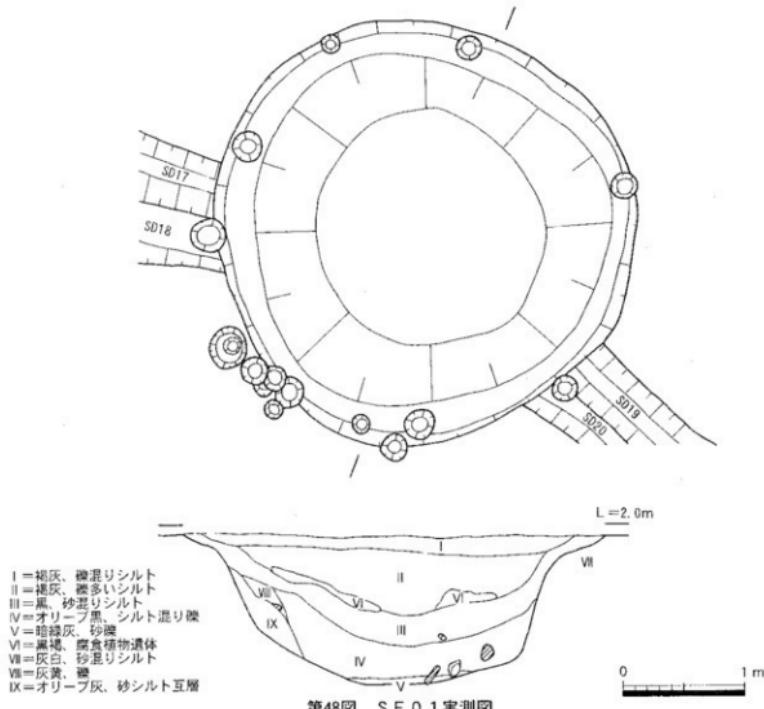
4. 井戸

① S E 0 1

ほぼ円形で直径 3.4m、深さ 1.2m である。三角洲帯 II a に相当する砂疊層に掘りこまれたスリバチ形の素掘り井戸である。少なくとも 3 回以上の浚渫、再掘削が行われ、埋没前の深さは約 70cm であったと考えられる。湧水は活発で調査時にも 8 分程度の涌水がみられた。

井戸を東西に横断して、SD 18～20、SD 17～19 が引かれる。井戸が機能している時期これらの溝を接続し導・排水が行われたものであろう。水の落ち口にあたると考えられる溝から井戸への接続部分では、特に顕著な水流による浸蝕等は認められなかった。このことはこの井戸が、SD 19 及び 20 により上流からの流水を受けて貯水する事を主な機能としたものではなく、主として S E 0 1 の自噴によって満水が可能な状況であったと推定される。これはより小規模ではあるが、類似の形態をみる S K 2 2 でも同様の可能性があるまいか。

井戸の西～西北側縁辺に栗石風の石材や土器片の散布が目立ち遺構面がよく踏み固められており、物洗い場等としての井戸の利用はこの側から行われていた様である。井戸の周縁に沿いほぼ等間隔に柱穴 8 基が検出された。かなり堅牢な上屋、覆屋が設けられていたのであろう。



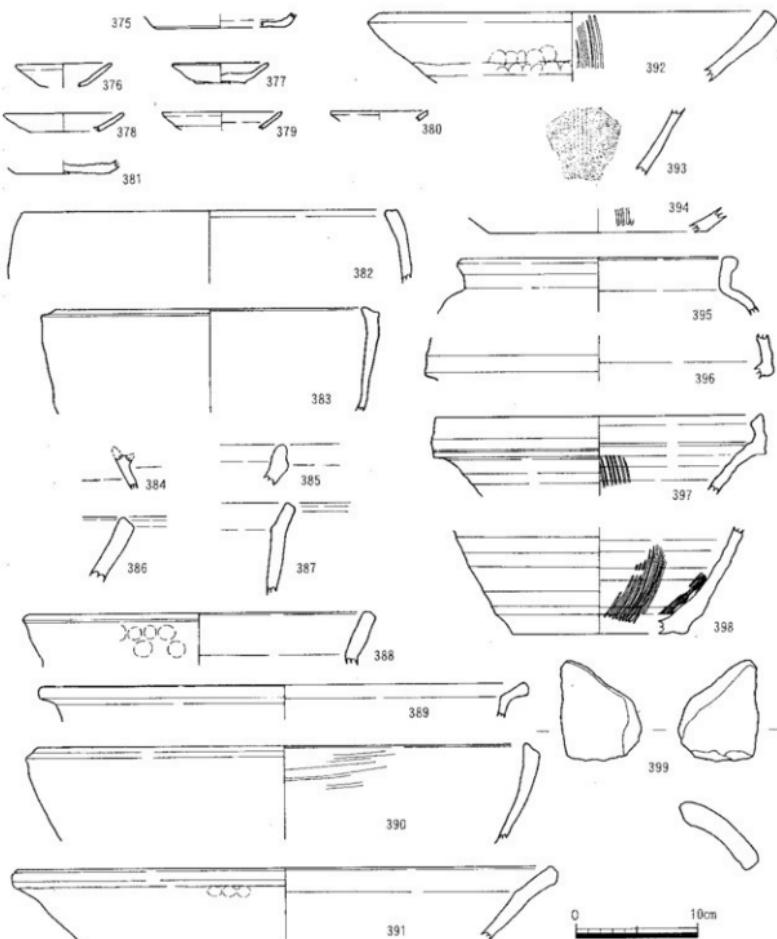
②遺物

遺物は多くない。陶磁は出ず全体として古相で、備前の年代観では16C後半頃とみられる。

375は、須恵質坏底部片である。灰を呈し無高台。摩耗あるがヘラ切りであろう。本遺構の埋土Ⅲ層が切り込むベース面の出土である。381は、土師質坏底部である。底径は7.6cm。

376は、土師質小皿である。口縁僅か外反。復元口径7.8cm。377は、土師質小皿である。灰白を呈し、軟質で低火度焼成。口径8cm。油煙状炭化物が付着する。燈明皿であろう。

378、379、380は、いずれも土師質小皿片である。復元口径は10cm、10cm、8cmである。



第49図 S E 0 1 遺物

- 381は、土師質壺底部片である。復元底径 7.6cmである。胎上密で、回転ヘラ切り離し。
- 382は、土師質金口縁である。内外面ナデ。復元口径29.6cm。383は、土師質金口縁である。内面ハケ口。復元口径25.5cm。384、385は、ともに土師質金口縁片である。386、387は、土師質鍋口縁片である。388は、土師質鍋口縁である。外面指頭圧痕。復元口径28.1cm。
- 389は、土師質粘口縁である。390は、土師質金口縁である。内面ハケ。復元口径40cm。
- 391は、土師質鍋口縁である。外面に指頭圧痕。復元口径44.4cm。
- 392は、土師質擂鉢口縁である。内面ハケにナデ、外面指頭圧痕、ナデ。復元口径32.0cm。
- 393は、土師質擂鉢部体片である。394は、土師質擂鉢底部片である。復元底径18cmである。
- 395は、備前壺口縁片である。灰赤を呈し、短い頸部がやや外傾した玉縁で口線上端は平らに押さえる。V期、16C前半であろう。396は、備前擂鉢口縁片である。口縁端面は灰により自然釉化、浅く幅広い凹線2条がめぐる。櫛がき条溝端は口縁が立上がる基部直近に達する。V期、16C後半であろう。397は、備前擂鉢口縁である。内面灰赤、外面橙を呈する。幅広く伸びほぼ直立する口縁端面に2条の浅い凹線が巡る。口縁上面は少し窪ませ僅かに内傾する。8条/3cmの放射状櫛がき条溝は口縁下部で4cm以上の余白を残す。ロクロ造り。V期、16Cである。398は、備前擂鉢底部である。にぶい橙を呈し、10条/3.5cmの放射状櫛がき条溝は、底面起点で隣接条溝と1.5cmの間隔を置く。内面下半部摩耗で還元状態の胎土を露出させる。ロクロ造り。397と同一個体か。V期、16C。
- 399は、丸瓦片である。焼している。

5. W I・II区包含層の遺物

- 400は、土師質小皿である。復元口径 7.6cmは類品中最小。胎上、調整、焼成等 332号似。
- 401は、上師質小皿である。低火度焼成で炭素吸着、黒褐を呈し、内面に黒色タール状物質が付着、燈明皿と考えられ377、044と同巧。402は、土師質小皿である。復元口径は 8cm。胎土は粗で摩耗顯著である。403は、土師質小皿である。復元口径 9.5cm、径 4cmの底部から極めて緩傾斜で口縁に至るが内面の調整は器壁中位に膨らみを持たせる。口縁端は器壁外側で稜を形成。404は、土師質小皿である。復元口径 9cm。手捏ねふうの不整な成型。器壁外側の一部に油煙とみられる炭化物が付着する。
- 405、406、407、408、409、410、411、412、415、419、420、424は、いずれも土師質小皿口縁片である。復元口径では406の6.9cm~411、412の10cmに亘るが、約8cmのものが大半を占める。413は、土師質小皿である。復元口径 9cm。器高 1.2cm。本遺跡土師質皿・壺類のうち最小径部類に属する。414は、土師質小皿である。復元口径 9.2cm。底部からやや厚目に中位まで立上る器壁は一旦内面をくぼませ口縁端に達するため屈曲部に稜を形成。
- 416は、土師質甕口縁片である。復元口径21cm。胎土はやや粗であり、焼成は堅緻である。
- 417は、上師質釜である。口径32.4cm、残存高8.9cm。外面煤付着、底面格子叩きで焼成良。
- 418は、上師質釜である。復元口径30.0cm、残存高 8.2cmである。外面は指頭圧痕が目立つ。
- 421は、土師質壺底部である。復元底径 6.2cm。422は、土師質小皿底部である。復元底径 4.2cmである。423は、土師質小皿底部である。復元底径 3.9cm。427は、土師質壺である。復元口径11.2cm。径6cmで厚目の底部から外反して伸びた器壁は中位を過ぎ一度内抱えになり、内面に浅いくぼみを作り再度外反し薄くそいだ口縁端に仕上げる。428は、土師質壺である。径6cm弱の底部から緩い傾斜で直線的に

伸びた器壁が端部で丸くまとまる。429は、土師質坏である。底径9cmで、器壁は丸く内抱えに立上り直線的に口縁まで伸びる。復元口径12cmにまとめる。430は、土師質坏片である。復元口径13.9cm。431は、土師質坏小片である。

425、426、432、433、434、435、436、437は、全て土師質釜口縁片である。「羽」=鶴は435～437～432～434～425～433～436～426と変化したとみられる。ともに内外面ナデ調整、うち432内面、436体部外面、434内面はハケ目を施す。435外面は煤が付着。

438は、土師質釜である。残存高7.4cmで口縁端を併かに欠くがほぼ全高に近い。復元口径は25cm程度か。外側面板ナデ、体部下半に格子叩きを施す。胎土に微砂を含む。焼成は良好。

439、440、441、442、443、444は、土師質釜（鍋）脚部である。板ナデ調整である。

445、446、447、448、449、450、451、452、453、454は、全て土師質鍋口縁片である。ほぼ共通に口縁端近くの2cm幅程度を外反させる。端部を丸く收めるもの、断面コ字形のものがあるが、後者は内面側を僅かにつまみ上げるものもある。449、453は外面煤付着。

455、456、457、458、459は、土師質内耳付釜の耳部片である。指頭圧痕がみられる。

460は、土師質壺口縁片である。復元口径37.6cm。胎土はやや粗で石英、長石粒が目立つ。

461は、土師質鍋口縁片である。復元口径51.0cmである。462は、土師質鍋口縁片である。

内外面ともにナデ調整のうえハケ目を施す。復元口径56.4cmである。

463は、土師質捕鉢口縁片である。復元口径44.6cm。両面ナデのうえ内面ハケ。やや浅めの片口部を造り出す。焼成堅緻。464は、土師質捕鉢口縁片である。復元口径41.4cm。

465は、土師質捕鉢片である。復元口径26.4cm。小振りで両面ナデ、内面ハケ目。口縁直近まで7条単位の櫛がき条溝。466は、土師質捕鉢片である。復元口径22cm。小振りで焼成良。

467、479、480は、土師質捕鉢底部片である。内面底径各12cm程度。底面の摩滅が顕著。

468は、瓦質焰口縁片である。復元口径28.6cmである。使用時以外の2次的被熱がある。

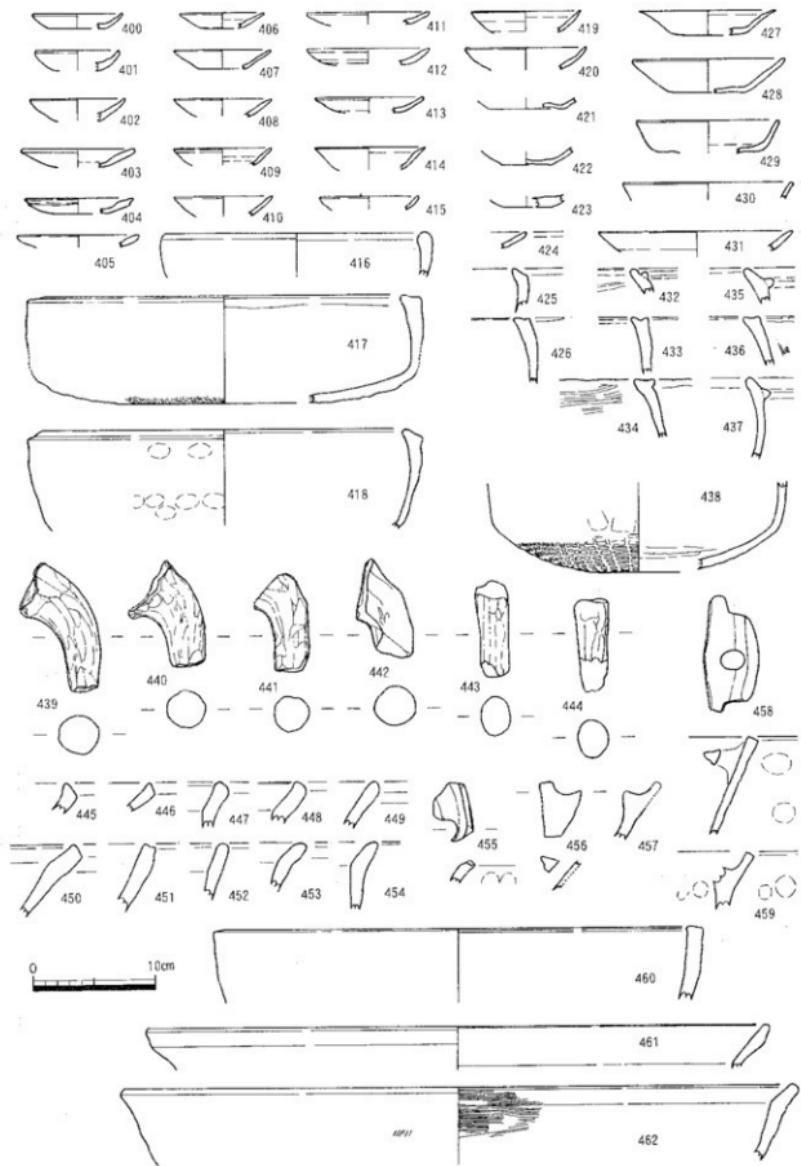
469は、備前壺口縁である。復元口径37cmで頸部短く口縁端にかけ僅かに内傾。幅広い玉縁に造る。IV期、15Cである。470は、備前捕鉢口縁小片である。重ね焼きで褐灰を呈し、口縁端はゴマが目立つ。内傾ぎみに直し口縁上面は内傾する。V期後半、16C末～17C初か。

471は、備前捕鉢口縁小片である。重ね焼きでぶい赤褐乃至褐灰を呈し口縁端は幅3.5cmに浅い凹線3条を持ち内傾ぎみに直立。口縁上面に狭い凹線があり端面は内傾。V期、16C。

472は、備前捕鉢口縁片である。ロクロ造り、重ね焼きで赤乃至暗赤灰を呈し口縁端はほぼ直立して幅3.5cmに浅い凹線3条を持ち口縁上面に凹みを作り僅かに内傾。放射状櫛がき条溝に斜交する条溝が重なる。V期、16C後半。473は、備前捕鉢底部片である。11条／3.5cmの櫛がき条溝で、底面起点で約1cm間隔の余白を置き施す。斜交する条溝も器壁内面に引かれる。ロクロ痕とみられる凹線が横行する。使用時の摩滅で内面の触感は滑らか。V期、16C。

474は、備前捕鉢である。小型で口径19.7cm、底径11.7cm、器高9.2cm。灰白～赤褐を呈し、部位や重ね焼きの影響で発色差が著しい。口縁端面は上下方向に幅広く伸びその下部約1/3幅を占める凹線1条を持つ。11条／2.5cmの放射状条溝を施す。IV期後半、15C後半であろう。

475は、土師質直口壺口縁である。口縁部の復元径13～14cm。胎土粗、焼成は良。本遺跡で土師質「壺」は本1点のみ。476は、土師質鉢片である。復元口径15cm、残存高9.1cm。口縁端部を包むようにヨコナデ。体部内外面ともハケ口。胎土に微砂粒を含み焼成は良好、堅緻。



第50図 W I - II区包含層遺物-1

477は、土師質擂鉢である。復元口径30.6cm。両面にナデ。櫛がき条溝は5条単位に施す。

片口を造り出し、焼成堅緻である。478は、土師質擂鉢片である。復元口径22.7cmで小振り。外側ナデ、内面ハケ目。口縁端をナデで丸く收め、焼成堅緻。灰白を呈する。口縁端部が平坦な面を形成する 466、477等とは別類型に属す1群をなすか。

481は、備前壺口縁片である。褐灰を呈し、短い頸部は僅かに内傾して口縁は幅広い玉縁。IV期、15Cであろう。

482は、備前小皿である。灰赤を呈しロクロ造り。糸切り痕がある。V期、16Cであろう。

483は、備前小皿である。にぶい橙で器壁中位から口縁部へかけ外反。ロクロ造り、糸切痕があり重ね焼き。V期以降、16C後半であろう。484は、備前小皿口縁である。灰黄褐を呈し口縁端がやや外反。V期以降、16C後半であろう。485は、備前小皿口縁である。にぶい赤褐を呈し、斜め上方に伸びた器壁は先端で水平に近く外反。V期、16Cであろう。

486は、備前壺口縁である。SD07の116と接合し、V期、16C後葉。487は、備前徳利又は壺底部片である。灰赤を呈し内面は横ナデによる溝状凹凸が顯著。IV期、15Cであろう。

488は、備前壺肩部片である。内面灰、外面は灰白～灰オーリーブで粗面の自然釉。頸部付根から約4cmの位置には3条/1cmの櫛がき円圏文がめぐる。IV期、15Cであろう。

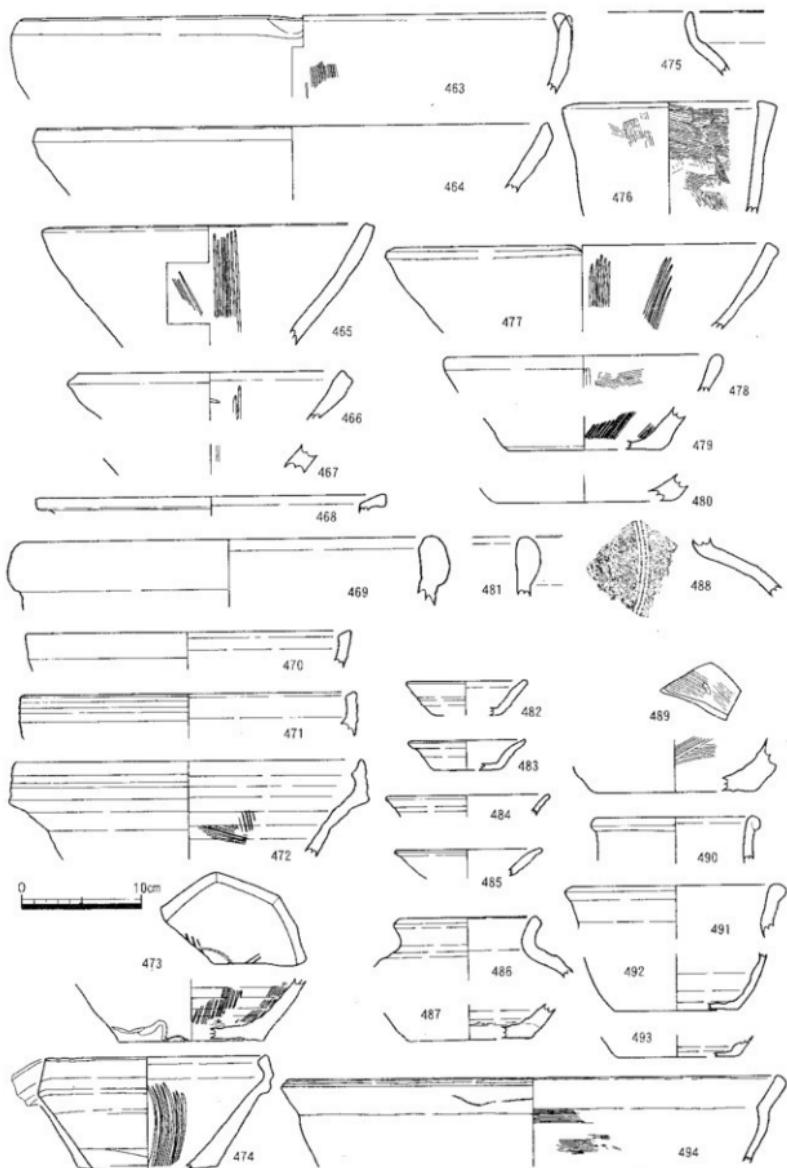
489は、備前壺底部片である。器表は褐灰、断面は還元状態で灰を呈する。底面及び器壁の内面下端部にハケ目が施される。IV期でも早い時期か。

490は、備前壺口縁片である。にぶい赤褐を呈し頸部や内傾、口縁の玉縁は丸く收める。IV期、15Cであろう。491は、備前壺口縁片である。内面褐灰、外面灰白で自然釉に近い粗面の灰斑がある。IV期、15C前半か。492は、備前瓶底部である。黄灰を呈し調整・焼成・胎土とともに493に酷似する。同一個体であろう。493は、備前瓶底部片である。内底面に径数mmのゴマが散在。薄手の器壁は5mm前後。IV期、15Cか。

494は、土師質鍋口縁部である。内面灰白、外面灰黄褐を呈する。復元口径40.4cm、残存高7.2cmである。内外面ともヨコナデ、内面はなおハケ目を施す。焼成良。

495は、青磁輪花皿口縁片である。釉は明緑灰。内面は菊花弁をスキとり外は花弁間を削ぎ落す。龍泉窯、16Cとみられる。496は、青磁碗(?)高台片である。貼付高台が剥落した一部。釉はオーリーブ黄を呈し、貫入があり、外側・疊付全体と内側上半部に施釉。疊付と内側の施釉部分下地に鉄漿がみえる。断面平行四辺形を呈し内側は有段。疊付は内傾する斜面で稜をなした鋭角部分で器を支持。龍泉窯系とみられる。15Cか。497は、青磁碗底部片である。龍泉窯系の輸入品と思われる。釉はオーリーブ灰で貫入がある。印刻、彫花等施文はみえないが見込み周縁部で稜をなす浅い皿状削り込みがある。高台内は周辺まで施釉するが、有段で削り込んで稜をなす部分の内側は無釉。高台の内側面に鉄漿塗布。16Cか。498は、白磁瓶口縁片である。灰白の釉は光沢に富み胎土、調整、成形、焼成とも精良。17C中～後半代であろう。499は、白磁小鉢底部である。中国輸入品の可能性がある。釉は灰白乃至明緑灰の滑らかな光沢に貫入を伴い無文、全釉である。高台内部は浅く削り出し底部が厚く残る。16C頃か。

500は、灰釉、胎土目唐津陶皿である。にぶい黄の釉に細かな貫入がみえる。内抱え気味の口縁外面の下部約1.5cmの範囲に施釉。高台は内反りで甚簡底に近い。疊付は重ねて使用したため摩耗した曲面を呈する。1590～1620年代であろう。501は、灰釉唐津陶皿口縁である。釉はにぶい光沢の灰オーリーブで厚めの器壁が口縁端でやや内抱えに立上がる。17C初である。502は、灰釉、鉄絵唐津陶皿口縁である。



第51図 W I - II区包含層遺物-2

^{ナカ}
灰黄褐の薄文にぶい黄橙の釉をかけ細かい貫入がみられる。口線はやや内抱えぎみ。17C初か。503は、鉄絵肥前陶皿口縁片である。釉は光沢あるオリーブ黄。口縁端部は僅かに内抱え。17C初か。504は、灰釉唐津陶皿口縁片である。釉はぶい黄橙で器壁は一旦外反して内抱えに立上がる。17C初か。

505は、長石釉、溝縁唐津陶皿口縁片である。釉は白濁してザラつき施釉は指ナデ痕が顕著に残る外面の口縁下1cm未満の範囲内である。溝縁は浅く幅広い。17C初であろう。506は、鉄釉、溝縁唐津陶皿口縁片である。にぶい赤褐の釉は極めて薄く内面にムラがあり無釉の斑点もみられる。指ナデ痕の著しい外面は口縁下数mm幅を除いて無釉。17C初か。507は、灰釉、溝縁唐津陶皿口縁小片である。釉は灰白の無光沢でややざらつく。器壁は薄く堅緻で浅い溝縁を持つ口縁端はほぼ水平に外反。17C初か。508は、灰釉、溝縁唐津陶皿口縁片である。釉は灰黄である。17C初であろう。509は、灰釉唐津陶皿口縁片である。釉は光沢ある灰オリーブで口縁は端反り。17C初か。510は、灰釉溝縁唐津陶皿口縁である。釉は灰オリーブで光沢がある。外面下半は無釉。溝成形は浅く広く曇昧である。17C前半。511は、灰釉溝縁唐津陶皿口縁片である。釉は無光沢でざらついた灰白。17C初。512は、鉄釉肥前陶皿口縁である。暗オリーブ褐にぶい光沢の釉に径約1mmの凹みが斑点となって散在。17C前半。513は、長石釉唐津陶皿口縁小片である。釉は光沢のない灰白。器壁薄く胎土精良、焼成堅緻。17C初か。

514は、灰釉唐津陶碗底部である。赤橙顯著な武雄系胎土。白濁の釉が部分的にみられ遺存する体部下半は全く無釉。浅く粗放に削りこんだ高台は疊付が摩耗し曲面をなす。17C前半。515は、灰釉胎土目唐津碗底部である。外面は高台まで1cm内外の範囲を残し暗灰黄釉を施し底部は無釉。低めの輪高台。16C末～17C初であろう。516は、灰釉唐津陶皿底部片である。光沢に富む灰オリーブ釉に貫入。底部は無釉で低く厚み乏しい高台を削り出す。17C前半か。517は、灰釉、鉄絵（？）唐津陶皿底部片である。灰オリーブの釉で底部無釉。低い内反りの高台である。17C初か。518は、長石釉砂目唐津陶皿底部である。釉は無光沢の灰白で底部無釉。低い内反り高台は積み重ねる使用により摩耗し疊付が曲面を呈する。1610～1630年代である。519は、灰釉溝縁唐津陶皿である。釉は灰黄でムラが少なく断面台形で兜巾の高台のみ無釉。17C初である。

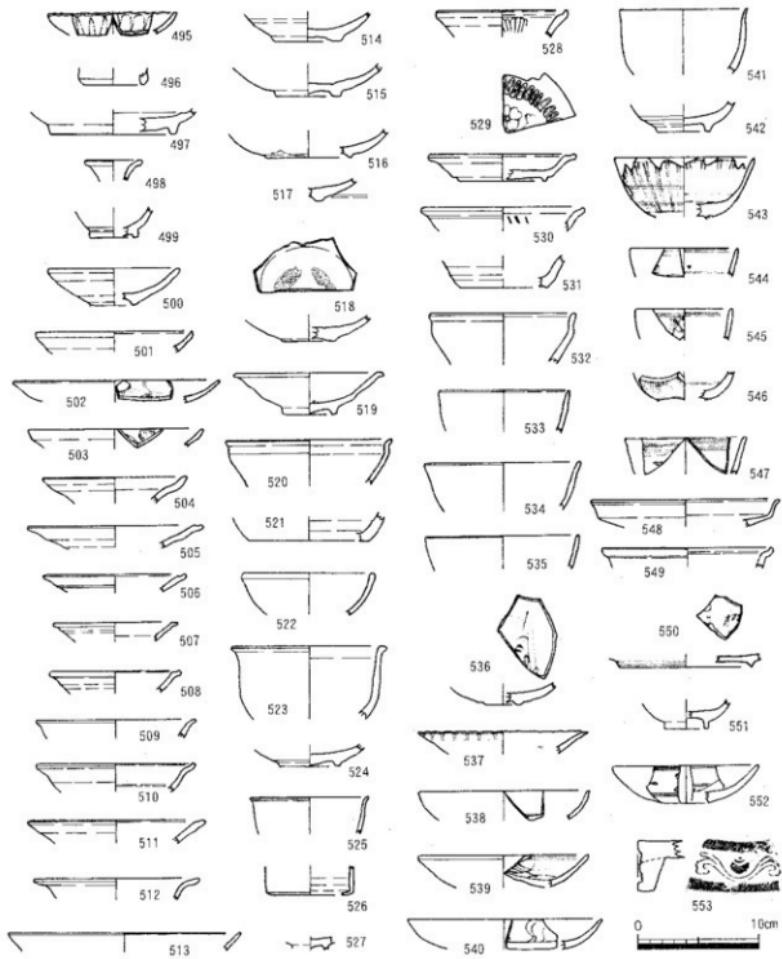
520は、鉄釉唐津天目碗口縁である。釉は黒褐のにぶい光沢。17C前半であろう。

521は、唐津壺（？）底部片である。遺存部分に釉はなくクロクロ削り痕があり内外面とも濃い目にぶい赤褐の鉄漿により発色。破断面に黒褐色付着物が残り漆緞ぎによる補修後も使用したと知れる。17C中葉か。522は、灰釉唐津陶皿口縁片である。口縁はやや内抱え。釉は灰白で武雄系にみるにぶい橙の胎土。16C末か。

523は、灰釉唐津碗口縁である。釉は光沢を持つ灰オリーブに貫入。腰部や下脛で口縁が幾分端反り。17C前半。524は、唐津碗底部である。釉は貫入著しい灰オリーブで、底面は高台外周約1.5cm幅で鉄漿を塗布。17C前半。525は、灰釉唐津向付口縁である。灰オリーブの細かい貫入の釉に光沢。薄い器壁はやや内湾して立上り口縁端部で僅かな端反りを呈する。526は、京焼風唐津向付底部片である。外面下端7mm範囲及び底面無釉。17C中葉～後半か。527は、唐津向付（？）底部片である。低火度で釉剥落があり底部は無釉である。

528は、瀬戸美濃ソギ皿口縁である。釉はオリーブ黄。低火度、軟質で剥落し凹部のみ残る。16C末。

529は、瀬戸美濃、灰釉折縁菊文印花ソギ皿である。釉は光沢に富み、浅黄から凹部の溜りでは灰オリーブを呈する。復元口径10.8cm、器高2.35cm。16C末である。



第52図 W I - II区包含層遺物-3

530は、灰釉折縁瀬戸美濃ソギ皿である。釉はオリーブ黄。ソギ浅くやや形骸化。17C初か。

531は、灰釉折縁瀬戸美濃陶皿底部である。釉は見込みで厚く灰オリーブ。口縁へかけ胎土の影響で淡黄を呈し光沢、貫入あり。ソギその他施文なく「大窯第3段階」16C末であろう。

532は、鉄釉瀬戸美濃天目碗口縁である。釉は黒褐色でぶい光沢がありざらつく。唐津同型品に比し器壁は厚い。16C末であろう。

533は、京焼風碗口縁片である。口縁は殆ど直立し光沢ある浅黄の釉に微細な貫入がある。17C中葉～後半か。534は、京焼風碗口縁である。口縁は僅か外反。浅黄の光沢ある釉に微細な貫入。17C中葉～後半か。535は、京焼風碗口縁である。灰白の釉に貫入。17C前半か。

536は、肥前染付皿底部である。基筒底に近い高台で内面も施釉。見込みには粗放な筆致で草花？文を染付け釉は灰白で外面下半に釉の亀裂、めくれと高台釉際に砂付着が著しい。17C前半であろう。537は、肥前輪花染付皿口縁片である。釉は灰白、均質な焼成で口縁は極めて緩やかに端反り。型打ち成型とみえ、見込み周縁付近に円圈線文が巡る。17C中葉であろう。

538は、肥前染付皿口縁である。釉は明緑灰で見込み周縁に円圈線文が2条。内抱えの器壁が口縁端で僅か端反り。17C中葉か。539は、肥前染付皿口縁である。光沢に富む灰白の釉は貫入が著しい。口縁は僅かに内抱え。内面口縁直下と見込み外周に円圈線文。中に粗放な薄文を染付け外面は無文。17C前半。

540は、肥前染付皿口縁である。明緑灰釉にやや粗放な捩じ花文を染付け。1640年代か。

541は、肥前（？）青磁碗口縁である。内外面にぶい光沢の明オリーブ灰。肉厚の腰部から立上がり口縁で僅かに端反り。18C以降か。542は、肥前染付碗底部である。釉は明緑灰を呈し、全釉であるが豊付の釉は除く。高台は断面台形で釉際に砂付着、内面中央に兜巾状の小突起を持つ。17C前半。543は、肥前染付碗である。見込みに蛇の目釉刺ぎ、高台内も施釉。外面のほぼ全面に格子文、内面口縁下に約1cm幅の格子文帯。見込みとの屈曲部に円圈線文、見込みに草書（？）文様がある。17C初頃であろう。

544は、染付碗口縁小片である。釉は明青灰で光沢に富み内面は口縁直下と器壁中ほどに幅広の円圈線文。外面には口縁直下に幅広の円圈線文があり草（？）文を染付け。輸入の可能性大。16Cであろう。545は、肥前染付猪口口縁片である。釉は明緑灰。口縁は直立に近く内外面口縁下部に幅広い円圈線文各1条がめぐり外面は草木（？）文も染付け。描線は粗放。17C前半。546は、肥前染付碗底片である。外面コバルト色無地でルリ釉掛け分け。見込みから立上がる位置に複線の円圈線文。内面及び高台内部は透明釉となる。17C後半か。547は、肥前染付碗口縁片である。内面口縁寄りに円圈線6条、外面口縁下に円圈帯文と草花（？）文をコバルトで染付け。胎上がやや暗い色調を帯び釉は灰。18C以降。

548は、灰釉唐津浅鉢口縁片である。浅く聞く器壁は口縁近くで屈曲して垂直方向に1cm余立上り端部を僅か外方に折り返す。釉は光沢ある灰オリーブで白濁したムラが多い。

549は、灰釉唐津蓋付鉢（？）口縁片である。釉は灰黄。クランク形に屈曲した蓋受け状口縁部である。

550は、染付磁器皿底部片である。端正な成形、調整、焼成。見込みに馴れた字体で「柄」を口頭に置く章句を染付け。高台内部に1条、外側面と付根に各1条、器壁の外面下端に1条の円圈線文があり豊付付近には淡い鉄漿。清朝康熙代磁器に類似のデザインが知られると言い旧芝離宮出土伊万里に同巧品がある。17C後葉～18C初か。

551は、京焼風碗底部片である。光沢ある浅黄釉に微細な貫入。底部は無釉で精良な胎土を肉薄で断面角形に鋭く深く削り出した高台を持つ。17C中葉～後半か。

552は、肥前染付皿である。器面は胎土の色調も影響し灰～灰オリーブで暗青色に染付け。内外面とも口縁直下に1条と見込みから立上る屈曲部付近に2条の円圈文と草花（？）文がある。基筒底で高台内は施釉し豊付の部分のみ無釉。17C初とみられる。

553は、軒平瓦片である。燒し焼成で、中心に宝珠文を持ち蕨手様の文様が左右にのびる。

第5節 E I・II区の遺構と遺物

E区は、北上する二つの旧河道が、下流で再び合流する地点の内（南）側で、中洲状に形成された微高地であるW I・II区の東側に接し、旧河道に漸移しながら落ちこむ東西幅約50mの範囲である。現況は、W区との間は南北方向の農道・灌漑用水路が併走して筆界となり、東西に二分されている。中世後期以降の農耕域であると考えられ全城にわたって溝及び溝状遺構がみられる。これらの「溝」乃至「溝状遺構」は、幅20cm未溝、深さ10cm未溝程度で、不規則な曲線状に延びるものが多い。用排水目的に開削、利用された通常の溝なら、その埋土は有機質に富む類黑色粘質土や粗粒の砂である。しかし、この「溝状遺構」としたものは遺構掘りこみ面と対比した埋土の色調や土壤組成に、極めて僅かな差しか認められない。遺物も殆ど皆無で埋土の色調が掘りこみ面よりやや暗くて、そこに含まれる砂粒が僅かに粗い点で辛うじて識別できる程度である。従って、この「溝状遺構」には、常時水が流れていたとは見受けられず、且つ機能した期間も極めて短いのではないかと想定される。

I区（南半）とII区（北半）は、掘削深度差の影響もあるが様相が異なり、I区は主として東西方向の溝（及び犁による耕起跡）が並列し、南西隅に少数の柱穴がみられた。II区では、東西と南北の溝及び「溝状遺構」が直交するものが多く、ほぼ地割方向に則ったものと見受けられる。そして、これらと不規則に斜交する溝が、無秩序ともいえるような重複を繰り返した遺構群を形成するほか、I区に比較するとやや疎らながら犁耕起跡も残されている。

本調査区では犁による耕起跡がほぼ全域にみられ、見かけ上は溝状を呈して特にI区の現存コンクリート畦畔南側部分に顕著である。また、密度はこれに及ばないがII区南半部でもほぼ満遍なくみられた。これら犁跡周辺一帯で偶蹄類とわかる蹄の痕跡が多数検出された。爪先の方向に西及び東があり、上記犁耕起跡とともに東西方向に折り返して牛耕作業が行われたことを示す。但し、これら犁耕起跡・蹄痕跡は溝及び溝状遺構検出にあたり削除したため図示したのは一部の残余であり遺構番号は付していない。

犁耕起跡は平面的には細長い紡錘形をみせる。図上で小ピット状に示されている蹄痕跡は、熟練者が掘削すれば蹄の形状を検出できる程度の遺存例も少なくなかった。

E I・II区では、上記「溝状遺構」を含む溝48条を検出したが、調査期間の制約もあり完掘に至っておらず、その延長や切り合い関係には未確認の部分が多く残された。このため、先後関係の考察・記述は検出済遺構による所見範囲内のものとなり、不確定要素が含まれることとなった。いずれにしても本調査区は、現在も踏襲される筆界を介して、西側に接した居住域であるW I・II区とはほぼ同時期に並行して存続した農耕域であると考えられ、土地条件に見合う意図的な利用区分が行われて来たものと認められる。

1. 溝及び溝状遺構 (E S D 0 1～E S D 4 8)

以下、「溝」及び「溝状遺構」の形状・切り合い関係などについて検討する。

検出された合計48条の溝及び溝状遺構のうちで、幅51cm以上で東西・南北の方向性が明確であって、地割に沿う直線状のものについては通常の溝の概念に含めてよいものと考える。この概念から外れて、流路の形状・方向性が不規則であり幅も広くないものがみられる。これらは概して、埋土の観察でも恒常に活発な水流があったとみえず、みかけ上も通常の溝の機能を持つものとは捉えにくい。従って、

第9表 溝状造構分類 (A方向、B溝幅、C先後関係、D形状)

A. 流路の方向による分類

a.1)東西方向のもの	a.3)地割線に斜交するもの	E S D 2 7
E S D 0 1	E S D 3 7	E S D 2 8
E S D 0 7	E S D 4 2	E S D 3 0
E S D 0 8	E S D 4 5	E S D 3 2
E S D 0 9	E S D 4 8	E S D 3 3
E S D 1 0		E S D 3 6
E S D 1 4	b.緩やかに湾曲(屈曲)するもの	E S D 4 1
E S D 1 6	b.1)東西を指向するもの	
E S D 3 5	E S D 0 6	b.3)斜行するもの
E S D 3 8	E S D 1 1	E S D 0 5
E S D 4 7	E S D 2 6	E S D 1 9
a.2)南北方向のもの	E S D 4 0	E S D 2 5
E S D 0 3	b.2)南北を指向するもの	E S D 2 9
E S D 1 3	E S D 0 2	E S D 3 4
E S D 1 8	E S D 0 4	
E S D 2 3	E S D 1 2	c.蛇行するもの
E S D 2 4	E S D 1 5	E S D 1 7
E S D 3 9	E S D 2 0	E S D 3 1
E S D 4 4	E S D 2 1	E S D 4 3
E S D 4 6	E S D 2 2	

B. 流路の幅(最大幅)による分類 (C1~C14は先後関係順位)

a.~20cm			
C1) E S D 0 4	C1) E S D 0 5	C2) E S D 1 2	C2) E S D 1 5
C1) E S D 1 0	C1) E S D 4 7	C4) E S D 2 4	C5) E S D 2 2
C7) E S D 2 7	C8) E S D 2 9	C3) E S D 1 7	C4) E S D 1 8
C9) E S D 3 3	C10) E S D 3 4	C4) E S D 1 9	C4) E S D 2 0
C10) E S D 3 6	C12) E S D 3 9	C5) E S D 2 1	C5) E S D 2 3
C9) E S D 3 1	C9) E S D 3 2	C5) E S D 2 6	C6) E S D 2 5
C14) E S D 4 1	C14) E S D 4 2	C7) E S D 2 8	C8) E S D 3 0
C14) E S D 4 3	C14) E S D 4 4	C10) E S D 3 5	C11) E S D 3 7
b.21cm~50cm			
C1) E S D 0 2	C1) E S D 0 3	C11) E S D 3 8	C13) E S D 4 0
C1) E S D 0 6	C1) E S D 0 8	C14) E S D 4 5	
C1) E S D 0 9	C1) E S D 1 1	c.51cm~	
C2) E S D 4 6	C2) E S D 1 3	C1) E S D 0 1	C1) E S D 0 7
C3) E S D 4 8	C3) E S D 1 6	C2) E S D 1 4	

C. 先後関係による分類（切り合い関係による新一旧順）

1) ESD 0 1	ESD 0 2	ESD 2 3	ESD 2 6
ESD 0 3	ESD 0 4	6) ESD 2 5	
ESD 0 5	ESD 0 6	7) ESD 2 7	ESD 2 8
ESD 0 7	ESD 0 8	8) ESD 2 9	ESD 3 0
ESD 0 9	ESD 1 0	9) ESD 3 1	ESD 3 2
ESD 1 1	ESD 1 7		ESD 3 3
2) ESD 1 2	ESD 1 3	10) ESD 3 4	ESD 3 5
ESD 1 4	ESD 1 5		ESD 3 6
ESD 4 6		11) ESD 3 7	ESD 3 8
3) ESD 1 6	ESD 1 7	12) ESD 3 9	
ESD 4 8		13) ESD 4 0	
4) ESD 1 8	ESD 1 9	14) ESD 4 1	ESD 4 2
ESD 2 0	ESD 2 4		ESD 4 3
5) ESD 2 1	ESD 2 2		ESD 4 5

D. 流路の形状による分類 (C1~C14は先後関係順位)

a. 直線ないしほぼ直線状のもの			
a.1) 東西方向のもの		c5) ESD 2 6	
C1) ESD 0 1	ESD 0 7.	C13) ESD 4 0	
ESD 0 8	ESD 0 9.	b.2) 南北を指向するもの	
ESD 1 0	ESD 4 7.	C1) ESD 0 2	ESD 0 4
C2) ESD 1 4		C2) ESD 1 2	ESD 1 5
C3) ESD 1 6		C4) ESD 2 0	
C10) ESD 3 5		C5) ESD 2 1	ESD 2 2
C11) ESD 3 8		C7) ESD 2 7	ESD 2 8
a.2) 南北方向のもの		C8) ESD 3 0	
C1) ESD 0 3		C9) ESD 3 2	ESD 3 3
C2) ESD 1 3	ESD 4 6.	C10) ESD 3 6	
C4) ESD 1 8	ESD 2 4.	C14) ESD 4 1	
C5) ESD 2 3		b.3) 斜行するもの	
C12) ESD 3 9		C1) ESD 0 5	
C14) ESD 4 4		C4) ESD 1 9	
a.3) 地割線に斜交するもの		C6) ESD 2 5	
C3) ESD 4 8		C8) ESD 2 9	
C11) ESD 3 7		C10) ESD 3 4	
C14) ESD 4 2	ESD 4 5	c. 蛇行するもの	
b. 緩やかに湾曲（又は屈曲）するもの		C3) ESD 1 7	
b.1) 東西を指向するもの		C9) ESD 3 1	
C1) ESD 0 6	ESD 1 1	C14) ESD 4 3	

他の何らかの目的・機能を持つとするのが妥当と考えて、仮に「溝状遺構」として観察した。

A = 流路の方向性

B = 流路幅

C = 切り合いでによる先後関係

D = 流路の形状に区分し、第9表に示した。

ESD 0.1, 0.7, 1.4は、幅51cm以上で東西方向の直線状を示し、現存コンクリート畦畔に近い点からも、明らかに筆界を兼ねた用排水機能をもつ溝であろう。埋土も常時滞水していたとはみられないものの、他に比べてより容易に判別できるものであった。先後関係は、いずれも最も後出に属し、現存畦畔に継承されたものであろう。流路幅と時期=先後関係を重ねると、例外はあるものの、21cm~50cmのものが後半期に属し、20cm未溝のものが前半期に集まる傾向が窺われる。

流路幅と形状・方向の相関はさほど明瞭でないが、20cm未溝では地割方向の規制が強いとはみえず、形状もよりランダム・非直線的と見受けられる（絶対数では異なるが構成比で補正）。さらに、時期=先後関係と形状・方向について、対象をほぼ折半し、新1)~5)と旧6)~14)に2分して比較すると、前半期に20cm未溝が、後半期に21cm~50cmが偏倚する。

埋土の遺物は皆無に近く絶対的年代は不詳であるが、これらを併せ考えると、流路幅が20cm未溝で形状・方向性が不規則なものは概ね前半に当る時期に開削されたとみることができる。その際は、東西に直線状のESD 0.1, 0.7, 1.4等はもとより存在せず、南北方向のESD 0.2, 1.3等もみられなかった。明瞭な方格地割がない立地条件下で恒久的とはみられない狭小且つ不規則な「溝状遺構」が営まれたのである。埋土の色調等からは、それらが機能した時間幅は極めて短いものであったと考えられる。あるいは一年以内、2毛作ならばその一耕作期間か、長くても数年以内ではなかろうか。

E I 区南寄りの一部を除き柱穴等の居住を示す遺構は皆無であり、現在に至るまで農耕域であった。包含層遺物でみて遺構面成立の上限はおよそ15C後半頃ではなかろうか。

*

春日川・新川（吉田川）による三角州帯II aがその頃までによく安定し、西接するW区での居住も可能になるとともに、E区もより低温（？）不安定であるが農地としては開拓可能で、ほぼ同時に利用され始めたであろう。屈曲する「溝状遺構」は不安定な可耕地を縁どりながら灌漑或いは干穀目的の一つに排水を置き、海に近い立地から塩分排除もあわせて意図しながら一定期間に亘る耕作を行い、状況の変化に応じ「溝状遺構」を引きなおす過程が繰り返されたのではなかろうか。

「溝状遺構」で囲む範囲に歟跡にあたるような遺構は認められず、稻株跡等の所見も後世の耕起に伴って除去されたものか無い。水田として拓いたものと見たいが陸田又は畠作の可能性も絶無でなかろう。後記の引用資料は「海辺・河原などの」綿栽培とその利点等に触れて、商品作物としての有用性とともに、輪作による土壤改善の効用についても言及している。

因みに寛永19(1642)年「讃岐国高松領小物成」で「春日村」の綿 476.5匁は、山田郡山間部植田地区を除いては、平地部での最高額である。

本遺跡E区「溝状遺構」の所属時期は、中世末～近世初頭と考えられる。当該遺構が上記の綿栽培に関連するか否かであるが、一般に綿作は、江戸時代中期から盛況を呈したといわれ、直ちに是認は出来ない。しかし、本県域で既に室町期には三豊郡仁尾に綿座があったとされており「讃岐三白」の一つとして、以後、特に西讃地域で盛行したという。

本遺跡でもその様な商品作物として盛行する前段階において「海辺・河ばたなどの」開拓地として総栽培が試みられた可能性を排除すべきでないかも知れない。

なお、本例のような「溝状遺構」について、今回発掘まで調査者は未見であったが、後日、本遺跡の南西2km余にある市内林町所在の、林町60号線道路拡幅工事に伴う立会調査において、弯曲しつつ交差する類似遺構を検出した。林地区は『弘福寺領田図』の存在からも、相対的に早期からの開発が進められたと思われるが、局地的に類似の立地条件下では類似の手法で農地開発が行われたのであろう。この立会調査も遺物は僅少で明確な時期は特定できないが、土層堆積状況、土色等から本遺跡例とかけ離れた時期の所産とはみえない。類似例を待ちたい。

当該時期より成立は新しいが、近世の農書から関連するかと思われる記述を下記に引いた。

「農業全書」宮崎安貞『近世科学思想上（岩波）』

卷之一 農事総論 水利第七 ○…木綿・藍其外菜の類にも極熱の中は畦の溝に折々水をそそぎ引てうるほすべし。…時々しばらく水をそそぎ引て、陰気をやしなふべし。…

卷之二 五穀之類 稲第一 ○水のかけ引の事…泥田・深田は折々水を落して…年によりては指引あるべし。所によりて陰気のつき田は、水を落す手立もなくて叶はぬ事なり。

卷三 菜之類第八瓜之類 ○又東寺鳥羽にて瓜を作る法、…畦作り、横はば一間、溝一尺余。横一間の内両方の端に少よせて堅筋をかき、麦を蒔置、中のあきたるところを…

卷六 三草之類木綿第一 ○同く種る地の事、さのみ肥へたる深き柔かなるを好まず。…とかく沙少雜りて性よく強き中分の地…すべて何土にてもあれ、湿氣はよくもれて、旱に水を引便りあるところは…なを又海辺・河ばたなどの風のよく吹通りて日当のよきところはすぐれて木綿によろしき物なり。○又年々相つづきて同所に作る事はいむ物なり。

一两年若は三年までは作るべし…其後又稻を作れば、地氣新にして、必二年ばかりの取実もあるものなり。草も生ず、糞も多く入らずして利潤甚多し。

「錦圖要務 乾之巻」大蔵永常『近世科学思想上（岩波）』

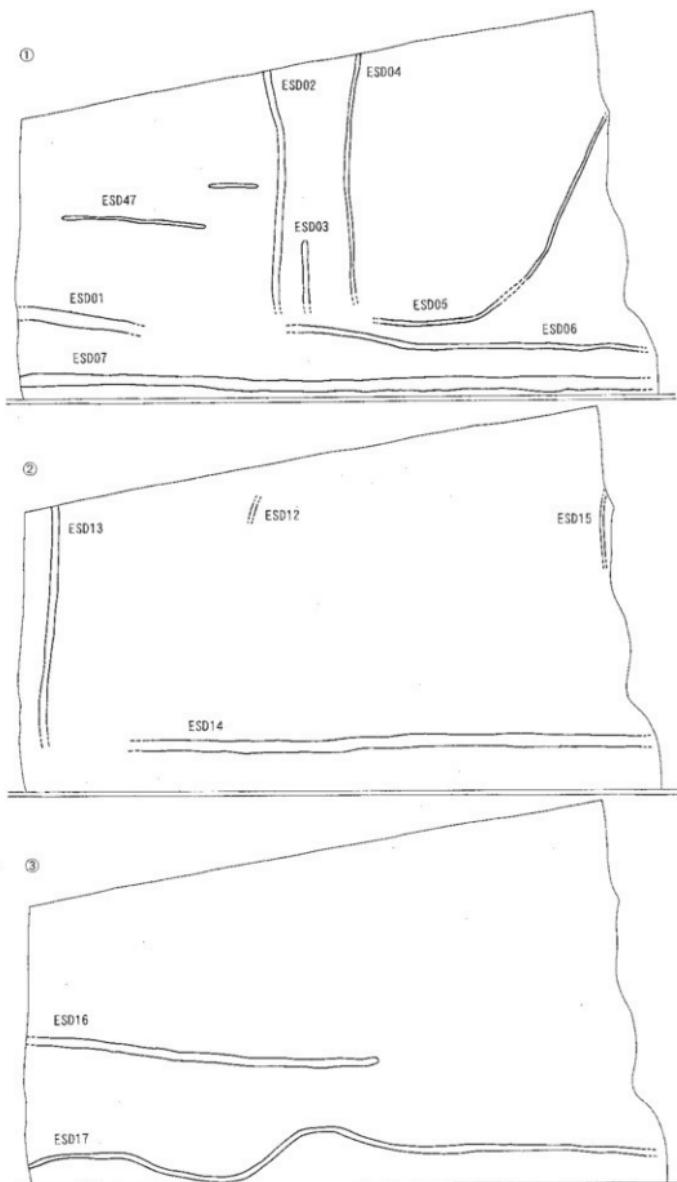
惣論 …尤此繩を作る事は大和国に始て作り、夫より河内・山城・摂津・和泉の國々専ら丹誠して作り党、又大より播磨・備前・備中・備後又四国に弘り、多く作て諸国へうり出す事にて、其余にも作る國々ありといへども、纔か其國にて用ふる程にも至らず。殊に作り方も未熟と…地こしらえ様の事…先麥を蒔に、畦を一尺七八寸より武尺に切て蒔べし。又摂州辺の畑にては一面に地ならしして、其畑の向ふと手前に二尺二寸に印を付、

是に水繩をはり其繩の根を目當にして、小歛をもって引通り引通りして筋を付、其筋の通りを二挺掛といふ輩にては引ば其筋を真中に二筋の溝うね出来る也。此二すぢのうねの間わづか七寸なり。然して此切たる畦の上を足にてふみ付ゆく其跡より麦を行く行に蒔て行、…此巾七寸の行せうねのごとくに…其麥の両脇へ締たねを蒔おろすなり。

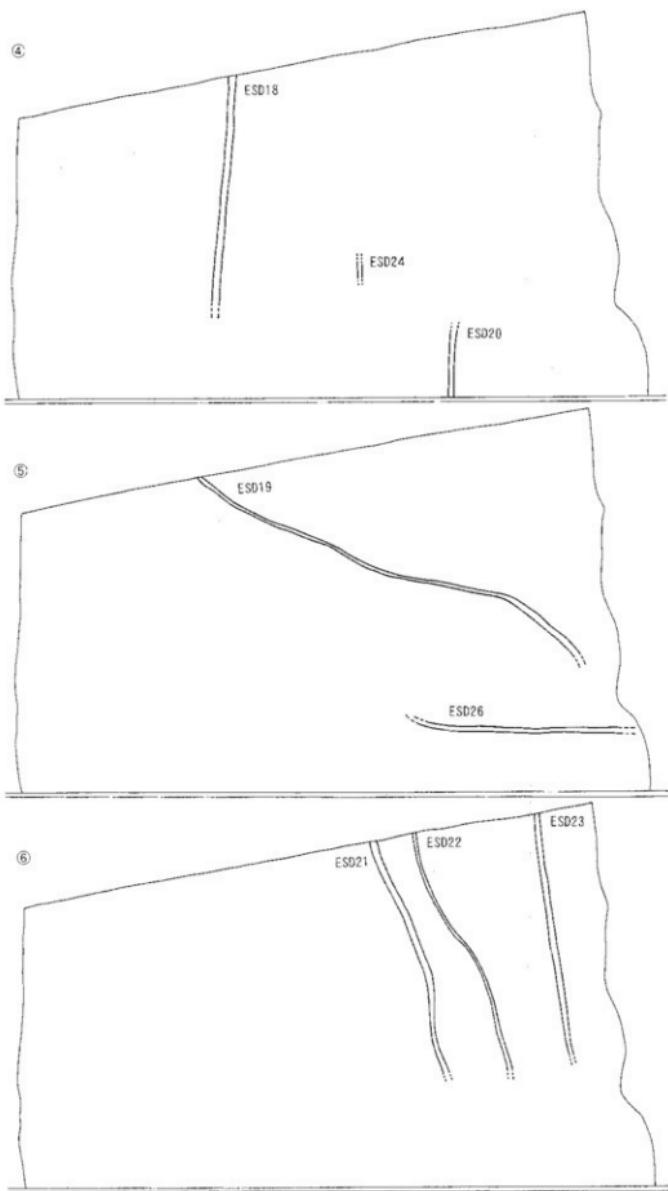
「農業自得」田村仁左衛門吉茂『近世科学思想上（岩波）』

卷上 水利 …力田の場所、凡毫町歩余も真平にして、溝もなき場所は堵の能少し。依て所々の溝を掘り、悪水を防ぐべし。…

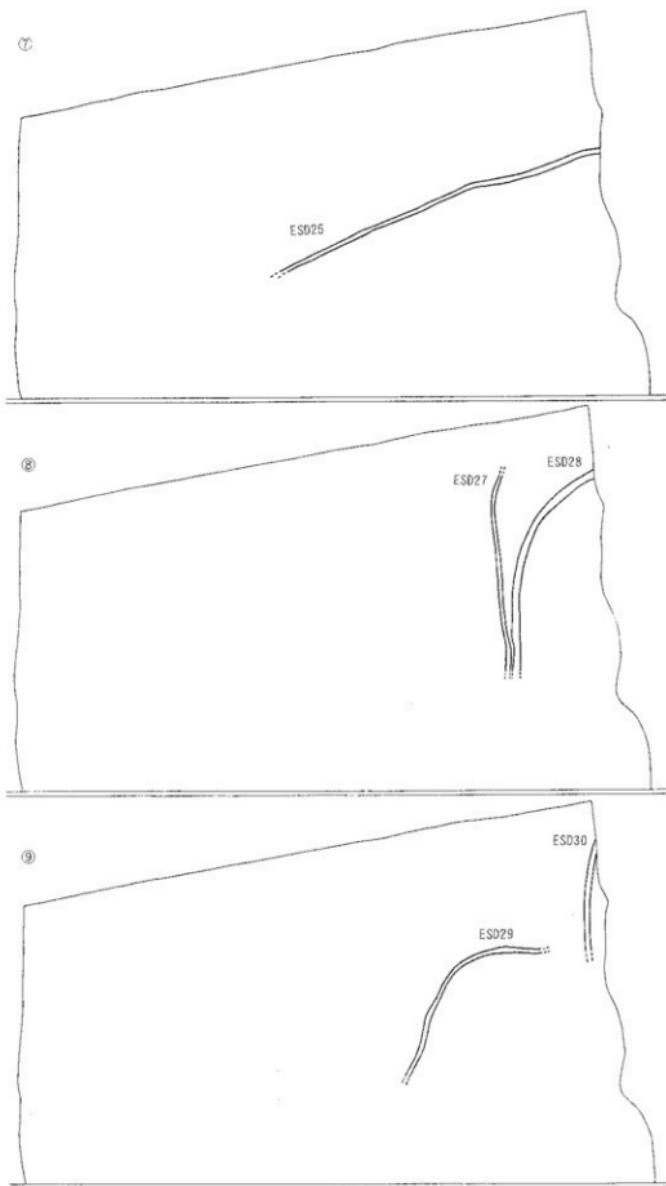
溝状遺構の推移を、第53図 溝状遺構変遷図-1～第57図 溝状遺構変遷図-5に示した。



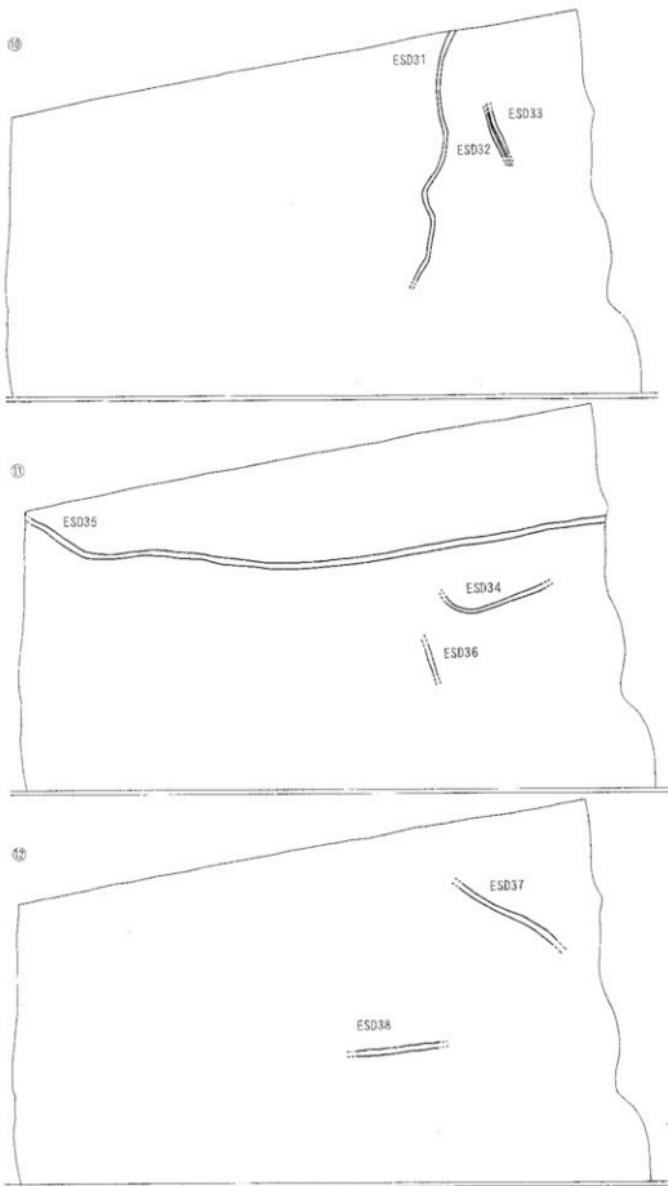
第53図 溝状遺構変遷図-1



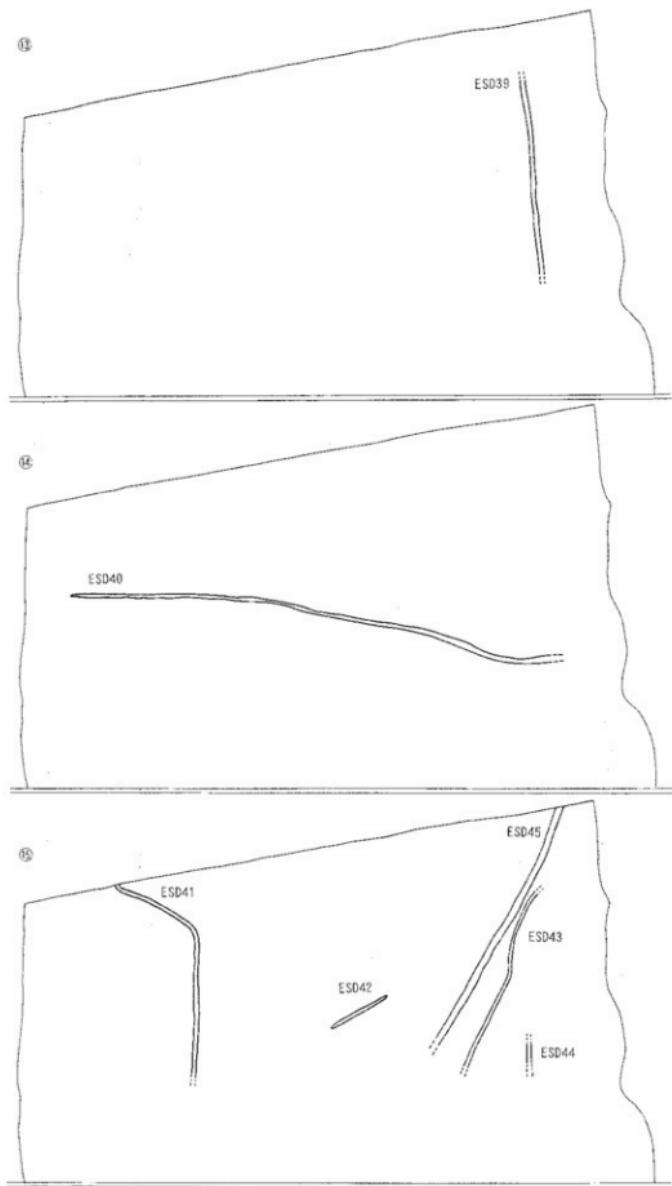
第54図 溝状造構変遷図-2



第55図 溝状透構変遷図-3



第56図 溝状造構変遷図-4



第57図 溝状遺構変遷図-5

2. その他の遺構

①犁耕起跡（I 区 16 条 II 区 6 条）

I・II 区とも、その南半部分ではほぼ全域にみられた。溝及び溝状遺構検出のために、犁跡の記録作成を省略したまま掘削作業を進める結果となった。

I 区の南半部において、掘削をやや手控えた部分を中心に 16 条を検出している。II 区では、犁跡（及び蹄痕跡）の深い部分のみが残り、掘削後の遺構面で 6 条が検出できた。

②牛蹄痕跡

①項と同様な条件で、I 区で 35 点、II 区では 21 点の蹄痕跡を掘削したが、このほかに緻密に観察、掘削すれば確認可能なものがほぼ同程度残存していた。

③その他

近世後期の洪水砂と思われる II 層を削除したところ、下記の状況が確認された。

床土層直下にあたる溝及び「溝状遺構」の検出面は平坦で畦畔等の高まりはみられなかった。東西又は南北方向の溝に沿う畦畔（又は農道）が設けられていた可能性が想定できるが、遺構としては検出していない。但し I 区に現存する東西方向のコンクリート畦畔に沿った ESD 01、ESD 07、ESD 14 の周辺では犁跡・蹄痕跡がみられない。当然ながら、筆界線としての効用も果たすこととなる部分である。現況からは、後世にも踏襲された筆界線であったと推定でき、両溝に沿って遺構を欠く部分は大畦畔ないし農道であったのであろう。これは南北方向の ESD 13 についても同様と思われる。

またピット 3 カ所が検出されたが、調査区南側へ続く建物の一部と考えたい。

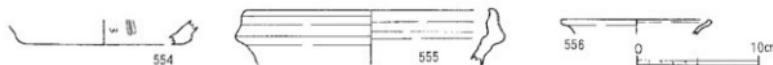
3. 遺物

ESD 01

554 は、土師質捕鉢底部片である。復元内底面径 11.5cm。555 は、備前捕鉢口縁片である。にぶい棱を呈する。口縁外側に形骸化した凹線 2 条が浅くめぐり、上下端部に重ね焼き痕跡。口縁上面を少しづぼませ内傾させる。V 期、16C であろう。

ESD 05

556 は、灰釉溝縁唐津陶皿口縁片である。オリーブ黄の釉は光沢に富み微細な貫入がある。器壁は薄手である。17C 初であろう。



第58図 ESD 01/05 遺物

E I・II 包含層

557 は、白磁小壺口縁片である。釉は灰白。口縁端部で端反りに開く。中国輸入品の可能性も考えられる。16C か。558 は、白磁小碗底部片である。釉は灰白。高台は深く削り込み疊付を狭くして、断面は台形であり内面も施釉する。器体の大きさに対し底部が極めて厚い。中国輸入品の可能性がある。17C 前半か。

559 は、白磁小碗口縁片である。釉は灰白。外面は摩耗があり光沢を失っている。口縁端部はほぼ直立。中国輸入品とみられる。

560は、土師質壺底部片である。復元底径は7.4cm。561は、土師質壺底部片である。復元底径は6cm。562は、土師質小皿口縁片である。復元口径8cm。563は、土師質小皿である。完形に復元され、口径9.8cm。内外面に煤層が付着した燈明皿である。

564は、土師質壺口縁である。復元口径34cm。内外面とも灰白を呈し焼成良好、堅緻である。

565は、土師質釜口縁である。復元口径20.8cm。

566は、土師質擂鉢口縁である。復元口径は22.5cm。灰白を呈し、焼成良好で堅緻である。

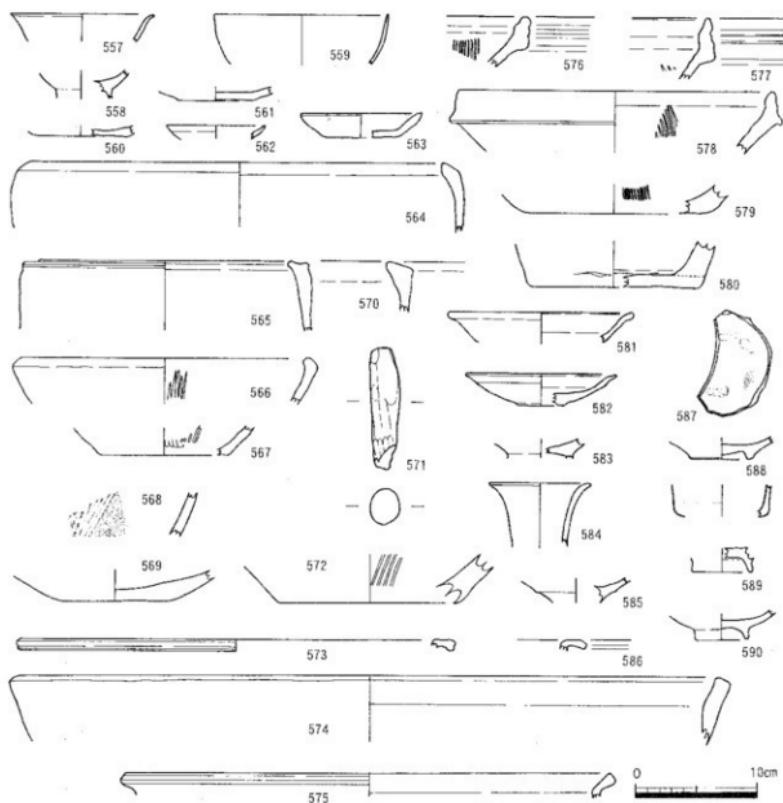
567は、土師質擂鉢底部である。復元口径は10.4cm。焼成は566に類似し良好で堅緻である。

568は、土師質擂鉢片である。内面には顯著なハケ口調整を施し、焼成は良好で堅緻である。

569は、土師質壺底部である。復元底径9cmで、焼成良好。

570は、土師質釜口縁片である。

571は、土師質釜（鍋）脚部片である。



第59図 E I・II区包含層遺物

572は、土師質擂鉢底部片である。復元底径は14cm。

573は、瓦質焰口縁片である。復元口径32.7cm。

574は、土師質鍋口縁片である。復元「口径」58cmは、破片の局部的な形状による見掛上の過大な数値であろう。

575は、土師質土鍋口縁片である。復元口径39.9cm。焼成良。

576は、備前擂鉢口縁小片である。重ね焼きで灰褐色／赤橙を呈し、直立した端面に凹線2条がめぐる。上面内側を僅かに凹ませるが上端は丸くおさめる。V期終末、16C末～17C初か。

577は、備前擂鉢口縁小片である。褐灰を呈し、ほぼ直立して幅広く伸びた端面に凹線3条が巡り、内面上部を引上げ僅か内側に凹ませる。V期、16C後半であろう。

578は、備前擂鉢口縁片である。褐灰を呈する。内面にはゴマがみられる。7条／2.2cmの放射状溝があり條溝がある。隣接条溝との間隔は口縁端直下で約4cm以上であろう。口縁端面の幅は約2.5cmで、横ナデ痕はあるが凹線は形成されず、内傾ぎみながら直立に近い。口縁内側端部を約1cmつまみ上げる。

本遺跡の備前擂鉢のうちで最も古相に属する1例である。IV期、15C中葉であろう。

579は、備前擂鉢底部片である。復元底径は14.4cmである。

580は、備前壺底部片である。にぶい橙を呈し、復元底径は約15cm。V期、16Cであろう。

581は、灰釉、溝縁唐津陶皿口縁である。釉は灰黄を呈する。口縁の溝は浅く外面は指ナデがみられ、下半部が無釉である。17C初であろう。

582は、灰釉、砂目溝縁唐津陶皿である。釉は暗灰黄で施釉にムラがあり、厚い部分に貫入がある。外面指ナデされ口縁端の一部を除き露胎。高台は低い内反りである。17C初である。

583は、灰釉、瀬戸美濃瓶（？）底部片で、全体に摩耗・剥落がある。釉は浅黄で、高台内も施釉するが高台自体は欠失部分が多く不詳である。内面は無釉で、口縁部が狭まる器形かとみられる。17C中葉か。

584は、青磁瓶口縁片である。釉は明緑灰で拡大鏡で見ると気泡が溝遍なく含まれている。内面の施釉は口縁から3～4cmの範囲内である。端反りした口縁は上端では水平に近くなる。輸入品か。

585は、肥前青磁皿底部片である。釉は明緑灰であり、蛇の目釉剥ぎとなっている。釉剥ぎ部分に対応する外面下半が無釉となる。中国輸入品の可能性も考えられる。17C前半か。

586は、土師質鍋口縁片である。胎土やや密で焼成良好、堅緻。

587は、灰釉、砂目唐津陶皿底部である。釉はにぶい黄褐色で細かい貫入がある。高台は深く削り込まれ、低めではあるが兜巾状を呈する。胎土はにぶい赤橙で武雄系であろう。

17C前半である。

588は、肥前染付猪口底部片である。釉は灰白で内面は無釉である。直線的に立上る器壁の基部に沿っては2条、やや隔てた上部には1条の円周線文が巡っている。17C中葉であろう。

589は、京焼風碗底部片である。釉は淡黄であり微細な貫入がある。高台は、内部へ向って斜め方向に1cm以上深く削り込んで、外方へやや傾いていた造りである。17C後半であろう。

590は、京焼風碗底部である。釉は浅黄で均一な全釉に施釉され極めて微細な貫入がある。高台は内面を深くなだらかに削り込んで、断面が台形に近い。17C中葉～後半とみられる。

第6節 その他の遺構・遺物

1. 土器埋納遺構

近年、県内でも土器を意図的に埋納したとみられる「祭祀」的遺構が出土・報告され、注目されはじめている（山元敏裕「古代から中世にかけての上器埋納遺構」『香川考古No.6』1997等）。

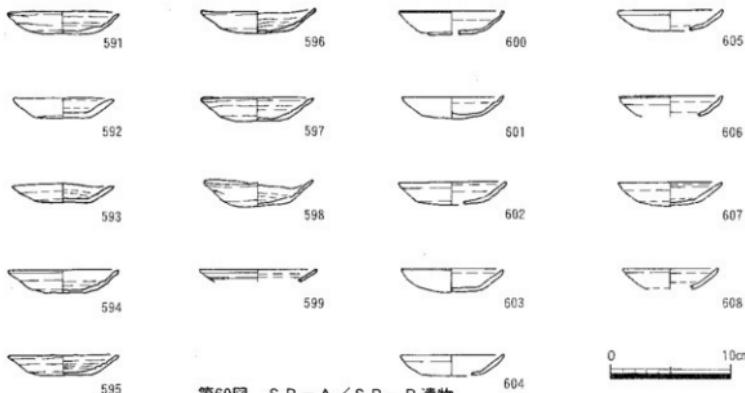
本遺跡でも住居域とみられるW I・II区の比較的近接した位置で類似する土器埋納遺構2例が検出された。地鎮祭祀遺構とみられるが、建物のプラン復元が困難で、遺構と建物との明確な位置関係等の把握は未了である。類例からは建物東北隅近辺に設けたともみられるが、建物プラン復元も待って解明しなければならない。

S P - A 遺物 (W II = 9 個体。ヘラ切り2、水簸段付7。上向き4、下向き5。)

591は、土師質小皿である。胎土は水簸されたとみえ密。外面ヨコナデ、内面は螺旋状の条溝、外面はこれに対応した位置に「段」形成。592は、土師質小皿である。内外面ヨコナデで底面はヘラ切り後ヨコナデ。胎土は径2mm前後の砂粒を含む。593は、土師質小皿である。外面ヨコナデ、底面ヘラ切りで板目痕跡。胎土は1mm以下の砂粒含む。器形、調整は592に酷似。594は、土師質小皿である。胎土、成型・調整、焼成等591に酷似。595、596、597は、土師質小皿である。591にはほぼ同巧。597は胎土が僅かに粗。598は、土師質小皿である。591にはほぼ同巧。類品に比べ器形の歪み大。599は、土師質小皿口縁小片である。

S P - B 遺物 (W I = 9 個体。ヘラ切り2、水簸段付7。上向き5、下向き4。)

600は、土師質小皿である。604に類似。601は、土師質小皿である。607と同巧。底面はヘラ切り後ナデで板目痕も僅かに残る。602、603とも土師質小皿であり607と同巧。604は、土師質小皿である。607に類似するが胎土がやや粗。605、606は、土師質小皿である。胎土、法量、調整等607に類似。607は、土師質小皿である。胎土に径2mm前後の砂粒を若干含む。外面ともヨコナデ、底面はヘラ切り後ナデ。608は、土師質小皿口縁小片である。



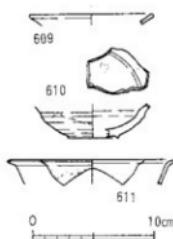
第60図 S P - A / S P - B 遺物

2. 性格不明遺構

S X O 1 は、浅い凹地状で不整形・性格不明遺構である。下部に軟弱な滞水層がある模様で、完掘に到らなかったが井戸の可能性が考えられる。下記の遺物がみられる。

609は、土師質小皿口縁小片である。復元口径は10cm。610は、灰釉胎土目鉄絵の唐津陶皿底部片である。釉は灰色で光沢、貫入がみられる。鉄絵は絵柄不明。外面下半は無釉。高台は内反りに削り込まれ碁笥底に近いが疊付部分が僅かに突起する。17C初である。

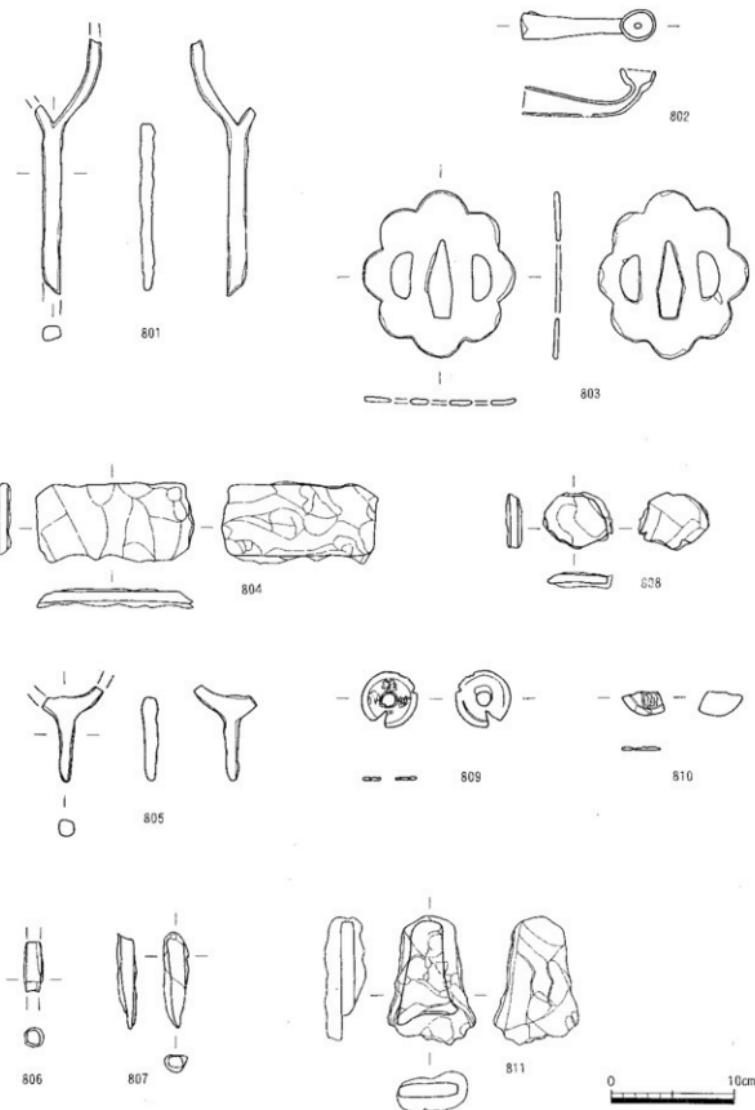
611は、染付（青花）碗口縁片である。釉は灰白、口縁端部はほぼ水平に約7mm幅で外反し器壁は薄く約2mmである。円囲線文が口縁上面に1条、器壁が外反した外面に3条巡る。外面は唐草文が染付けられ内面は囲線以外の施文はない。16Cの中国輸入品である。



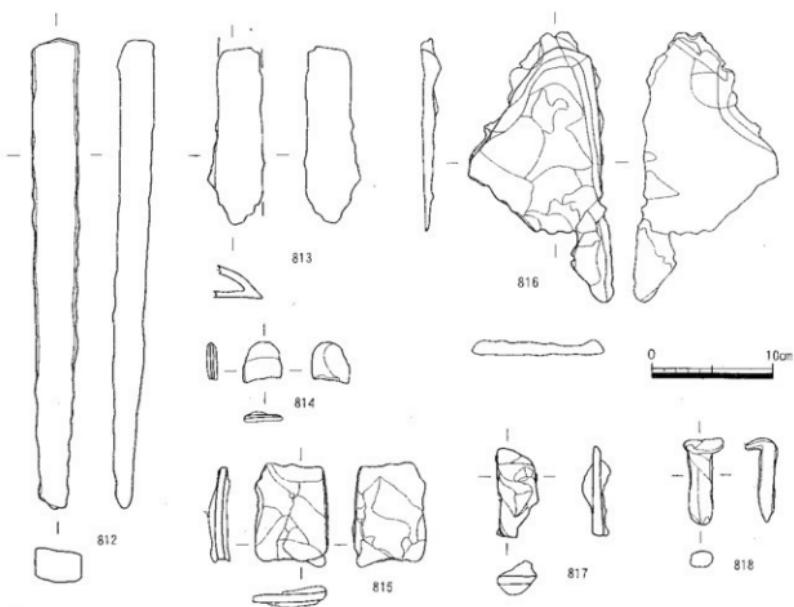
第61図 不明遺構遺物

3. 金属製品

- 801. 鉄鎌(?)片 W I 包含層。鉄製。狩(雁)股鎌か。残存長105mm、茎部股側断面8×6mm。
- 802. キセル W II 包含層。銅製。火皿(口径13~15mm)側残存長52mm、高22mm。
- 803. 鐸 W I区西端、S D 1 0 、1 8 交点付近のIV a 包含層で出土。直接関連する遺構や其伴遺物はない。八方木瓜形で鍔目ののみの無文、鉄地銅張。小柄横・笄横有し切羽台、セキガネ装着せず。67×62×1.5 mm。腐蝕若干あるが完形。江戸期に厚手になるが本品は薄手で16C~江戸初期。IV a 層時の実戦用か。他に鉄鎌等出土があり本遺跡の性格の一端を示唆する。
- 804. 刃器・刀(?)片 S E 0 1。鍛鉄製。64×30×6 mm。長方形板状。
- 805. 鉄鎌(?)片 W II P 79。鉄製。鎌ならば狩(雁)股か? 残存長38mm、股残部の両端間26mm、茎部股側断面5×6mm。内耳付土釜片に共伴。
- 806. 鉄釘片 W II P 192。鍛鉄製(鉄鎌片?)。20×7×6 mm。
- 807. 鉄釘片 W II S D 42。鍛鉄製釘先端部。40×8×7mm。
- 808. 不明鉄片 S E 0 1。鉄。30×23×6 mm。
- 809. 銭貨 W I P 151。祥符通宝。北宋1008(09)初鑄。
- 810. 銭貨片 W I 包含層。宋錢か。地位置の行書体「通」部分。県内(鶴羽出土)備蓄例では「通」字行書体は北宋1078元豐通宝、1086元祐通宝、1098元符通宝のみでその内一種か?
- 811. 刃器基部 W I P 19。鋸による層化剥離、53×35×17mm。土鍋小片共伴。
- 812. 馬鎌先 S D 2 4 西端、III層。長方錐形鉄製。残存長196mm。断面20mm×10mm以上。
- 813. 犀(鑿)先片 S D 2 4。鉄製。残存刃先部68×22mm、横断面V字形。
- 814. 不明鉄器 W I 包含層。鍛鉄(?)。17×15×3 mm。土鍋小片共伴。
- 815. 刀身(?)片 E II 包含層。鍛鉄製。45×30×8mm。断面二等辺三角形。鋸で層化剥離あり。
- 816. 鑄バリ(?)片 W II S D 4 2。鍛鉄か。80×56×8mm。
- 817. 不明鉄器 W II 包含層。鍛鉄製。鋸止加工武具片か。36×16×14mm。
- 818. 鉄釘片 W II 包含層。鍛鉄製頭頂部。26×9×7mm。頂部17×12mm。先端部欠。



第62図 金属遺物-1

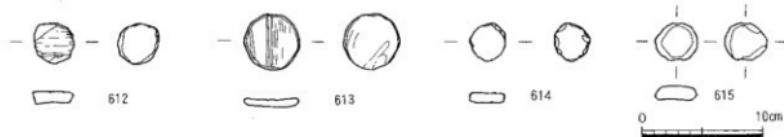


第63図 金属遺物-2

4. 円盤状土製品（駒石）

先の金属製品では武器の出土もみられたが、合せて下記の様に土器片を再利用し娯楽・遊戯～賭博具ともされた「円盤状土製品」=駒石がある。

612は、唐津鉢の体部片を打ち欠き不整な円形に整える。内側全面の灰白釉には摩耗があり使用痕とみられる。外面は無釉でにぶい黄橙のケズリ調整面に一部摩耗のない灰白釉がのる。SK17の出土。
613は、土師質擂鉢片を打ち欠いて円形に整えた「円盤状土製品」=駒石。焼成良好で堅緻な破片の周縁を丁寧に研磨する。WII区包含層出土。614は、土師質土器体部片を打ち欠き不整円形に整える。灰白を呈し良好、堅緻な焼成。原器種は不明であるが土師質擂鉢で類似の胎土、焼成の例がある。615は、明赤褐色を呈し、胎土や粗で3mm以下の石英、長石、角閃石を含み、焼成も前2者に比べ低火度、軟質。土師質釜又は鍋片の再利用である。



第64図 円盤状土製品（駒石）

第7節 調査のまとめ

比較的最近まで、中～近世遺跡は、それ以前のものに比し発掘調査の機会が少なかった。今回の調査地は、三角洲帯沖積地の水田地帯であり、中～近世遺物のみの包含層上部および下部はほぼ無遺物の砂～砂質土で、比較的限られた中世後葉から近世前葉の期間内に存続したとみられる集落・耕作地遺跡であった。

本遺跡の遺物は、過去に高松市行った調査ではあまり得られなかつた時期の資料が中心であり、本報告書では、土師質土器および陶磁器類の出土遺物についてはかなり微小な破片をも含め収録することに努めた。但し、記録のみに終つて適確な分類・編年を行うまでに至らず、今後の課題となっている。

出土の殆どを占める土師質土器及び陶磁器類遺物は、17C後半までの時期のもので終末を迎えており、極めて例外的な幾つかの例を除き18C以降の遺物は基本的には見られない状況であった。

必ずしも量が多いといえないが、青・白磁等の中国輸入品で14～5Cのものが見られて、唐津・肥前系を中心に瀬戸・美濃系をmajいた陶磁器類は16Cから17C前半のものがその多くを占めている。大半が壺鉢からなる備前焼もかなりの比重をもって出土している。こちらには、15Cと考えられるものも一定量が見受けられた。

既述のように、調査地は①噴砂検出区、②居住域（W I・II区）、③耕作域（E I・II区）に大別でき、居住域と耕作域の別が画然としている。隣接しながら明確な利用区分が行われている事が窺われる点からみて、ある程度計画的な開発が行われたものではないかと推測される。これは、SD07を初めとした条里制地割の規制によるとも考えられる南北・東西方向の直線溝群の存在についても同様である。

周辺では、近距離に立地条件等での類似点も少なくない「東山崎・水田遺跡」が所在する。同遺跡は、集落としての時期・存続期間に調査地区単位ごとに差がある事が報告されている。しかし、総じて同遺跡と本・川南・西遺跡とはその盛時に併存したと考えられるが、本遺跡の方が遅れて成立し、早く廃絶を迎えている様である。

廃絶の理由については、社会的なそれと自然的な理由が有り得るが、当地域では近世の洪水による被害が高い頻度で伝えられている。又、近世初期に新田開発事業が行われたという地域もある。

中～近世の歴史については、伝承や文献記録等も少なくなく、かなり自明の事という感覚もなしとしないが、現実に残された出土遺構・遺物を通じ、文献等には現れないより具体的、在地的且つ生活的な中～近世像を再現し、地域住民・市民に提供するのは、大いに意義のある事ではないかと思われる。本調査結果がその一助ともなれば幸いである。

なお、今回調査では、人為的な遺構・遺物ではない“自然史的遺物”ともいえる「噴砂跡」について触れている。「地震考古学」の事例も今後更に豊富になるものと思われる。

加えて、未整理で検討も不充分なまま、素材の羅列に終りかねないことも恐れずに、「水田関連？土坑」と、「溝状遺構」について触れている。従来の調査の折に目にする機会が何度かありながら「浅い」「新しい」ものとして看過していたが敢えて収録したものである。独断も少なくないと思われ、ご批判を期待している。

第4章 木製品の樹種について

川南・西遺跡出土木材及び炭化材の樹種同定

1. 試料

試料は、川南・西遺跡出土の中世から近世の木材及び炭化木材40点と炭化材1点の計41点である。試料の記載は一覧表に示す。

2. 方法

木材はカミソリを用いて新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。炭化材は割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

結果は表2に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

a. モミ属 *Abies* マツ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1～4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、モミ属に同定される。モミ属は日本に5種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの4種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

b. ツガ *Tsuga sieboldii* Carr. マツ科

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞及び放射仮道管から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、スギ型でややヒノキ型の傾向を示し、1分野に2～4個存在する。

放射仮道管が存在し、その壁には小型の有縁壁孔が存在する。わずかではあるが、樹脂細胞が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、ツガに同定される。ツガは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。常緑高木で通常高さ20～25m、径50～80cmである。材は耐朽、保存性中庸で、建築、器具、土木、薪炭などに用いられる。

c. マツ属複合管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

表1 川南・西遺跡出土木材及び炭化材

実測図番号	出土場所	器種
701	W-I P28 (P08)	角柱
702	W-I SD24	杭or柱材
703	W-I P27	皮剥丸太
704	W-I 仮SD-30 №6	建材木片
705	W-I SE-01 N層底面	桶片
706	W-I 仮SD-03 №5~6間	木葉
707	W-II 西 SD-03 底部	箱材 竹釘穴
708	W-I SE-01 N層底面	箱材片
709	W-I P25	柱根
710	W-I SE-01 N層底面	箱側板
711	W-I 仮SE-30 №5~6間	木の葉
712	W-II 西 SD-03 底部	箱材 竹釘穴
713	W-I 仮SD-30 №10	曲物底板 塗り? 円形
714	W-II 大溝埋土中	赤漆? 塗り 厚手
715	W-I SE-01 II・N層	建具端材?
716	W-I SE-01	男根木製品
717	W-I SK-22	手桶材?
718	W-I P166	柱根
719	W-I SK-22	手桶材?
720	W-I SK-22	桶材 取っ手孔あり
721	W-I 拡張区 P248	建築材
722	W-I SE-01 II・N層	建具部材?
723	W-II 大溝埋土中	経木 曲物側板?
724	W-I 拡 P253	柱根
725	W-I・II 仮SD-40 埋土中	付札? 板 ひも孔
726	W-I P36	柱材 柱根 丸太 底平 鋸挽
727	W-I SK-22	板材 鋸挽
728	W-I 拡張区 仮SD-25 №7	曲物材
729	W-I 西半 SP-()	漆椀
730	W-II SD-01 中層 埋土	椀
731	W-I SK-() SE-02?	片口椀(漆)
732	W-I P272	柱根 1.5寸角端部斜切

実測図番号	出土場所	器種
733	W - I P41	柱根 角 端部斜削鋭角
734	W - II P273	柱根 面取六角低平
735	W - III 坪境 大溝	タガ
736	W - I P66	柱根 面取端部鋭角／割れ
737	W - I P226	柱根 加工木端部切欠き
738	W - I P215	柱根 2/3荒削低平
739	W - I 試掘 カラソ 検出面(-)70cm 端部斜削鈍角	
740	W - I SK-22	板材 鋸挽 割
炭化材	W - I 拡張区	(SK-19火葬墓床面、火葬入骨片に伴出)

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。
接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。
以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

d.スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

e.ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1~15細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

f.ヒノキ科 *Cupressaceae*

横断面、放射断面、接線断面共にヒノキ科の特徴を示し、分野壁孔の型及び1分野に存在する個数が不明瞭なものはヒノキ科とした。

g.ハンノキ属ハンノキ節 *Alnus sect. Gymnothrysus* カバノキ科

横断面：小型で丸い道管が、放射方向に連なる傾向をみせて散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20~30本ぐらいである。放射組織は同性で、すべて平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で単列のものと大型の集合状のものからなる。

以上の形質よりハンノキ属ハンノキ節に同定される。ハンノキ属ハンノキ節は落葉の低木から高木である。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

h.クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列

する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

i. ブナ *Fagus crenata* Blume ブナ科

横断面：小型でやや角張った道管が、単独あるいは2～3個複合して密に散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は緩やかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが、ときに上下端のみ方形細胞が見られる。

接線断面：放射組織はまれに上下端のみ方形細胞が見られるが、ほとんどが同性放射組織型で、単列のもの、2～数列幅のもの、大型の広放射組織のものがある。

以上の形質よりブナに同定される。ブナは、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ35m、径1.5m以上に達する。材は堅硬、緻密、韌性あり、保存性は低い。容器などに用いられる。

j. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

k. コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～2列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靭で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

1.コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強韌で弾力に富み、建築材などに用いられる。

2.クスノキ科 Lauraceae

横断面：中型から小型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して、平等に分布する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅である。上下の縁辺部のみ直立細胞である。

以上の形質よりクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シロダモ属などがある。なお本試料は道管径の大きさから、クスノキ以外のクスノキ科の樹種のいずれかである。

3.トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科

横断面：年輪のはじめに、大型で厚壁の丸い道管が、ほぼ単独で1～3列配列する環孔材である。孔圈部外では、小型でまるい厚壁の道管が、単独あるいは放射方向に2～3個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。内部にはチローシスが著しい。本部柔組織は早材部で周囲状、晩材部では翼状から連合翼状である。放射組織は同性である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の形質よりトネリコ属に同定される。トネリコ属にはヤチダモ、トネリコ、アオダモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉または常緑の高木である。材は建築、家具、運道具、器具、旋作、薪炭など広く用いられる。

4.タケ亜科 Bambusoideae イネ科

横断面：基本組織である柔細胞の中に並立維管束が不規則に分布する。並立維管束は木部と師部からなり、その周囲に維管束鞘が存在する。

放射断面及び接線断面：柔細胞及び維管束、維管束鞘が桿軸方向に配列している。

以上の形質よりタケ亜科に同定される。

4. 所見

同定された樹種は、マツ属複維管束亜属10、ヒノキ7、ツガ属4、モミ属4、スギ3、クリ3、ヒノキ科2、コナラ属コナラ節1、ハンノキ属ハンノキ節1、ブナ属1、コナラ属アカガシ亜属、クスノキ科1、トネリコ属1、タケ亜科1であった。全体としては、マツ属複維管束亜属、ヒノキ、モミ属、スギの針葉樹が多い傾向がある。柱材や角材の建築材では、マツ属複維管束亜属とツガ属が多い。ヒノキは箱や曲物などに使われる。椀類はクリとブナ属であり、中近世で用いられる用材である。

参考文献

- 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100.
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、296p.

表2 川南・西遺跡出土木材及び炭化材の樹種同定結果

試 料	樹 種	(和 名 / 学 名)
701	ツガ	<i>Tsuga sieboldii</i> Carr.
702	コナラ属コナラ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>
703	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>
704	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
705	モミ属	<i>Abies</i>
706	ヒノキ科	Cupressaceae
707	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
708	ヒノキ科	Cupressaceae
709	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>
710	モミ属	<i>Abies</i>
711	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
712	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
713	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
714	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
715	モミ属	<i>Abies</i>
716	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>
717	モミ属	<i>Abies</i>
718	ツガ	<i>Tsuga sieboldii</i> Carr.
719	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>
720	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
721	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>
722	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
723	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
724	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>
725	ツガ	<i>Tsuga sieboldii</i> Carr.
726	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>
727	ハンノキ属ハンノキ節	<i>Alnus</i> sect. <i>Gymnothrysus</i>
728	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
729	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
730	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
731	ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blume
732	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.

試 料 樹 種 (和 名 / 学 名)

733	クヌキ科	Lauraceae
734	ツガ	<i>Tsuga sieboldii</i> Carr.
735	タケ亜科	Bambusoideae
736	トネリコ属	<i>Fraxinus</i>
737	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
738	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
739	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
740	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>

炭化材 コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus*

川南・西遺跡出土種実の同定

1. 試料

試料は川南・西遺跡出土の16~17世紀の種実2点である。

2. 方法

試料を肉眼および実体顕微鏡によって観察し、同定を行った。

3. 結果

結果、モモ核2が同定された。

モモ *Prunus persica* Batsch 核 バラ科

黄褐色~黒褐色で橢円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。本試料は核の表面に小孔が著しい。左右が著しく非対称なる特徴を有す。

金原正明（1996）によってモモ核の形態分類が行われており、本遺跡の試料は中世以降に存在する形態のものと一致する。

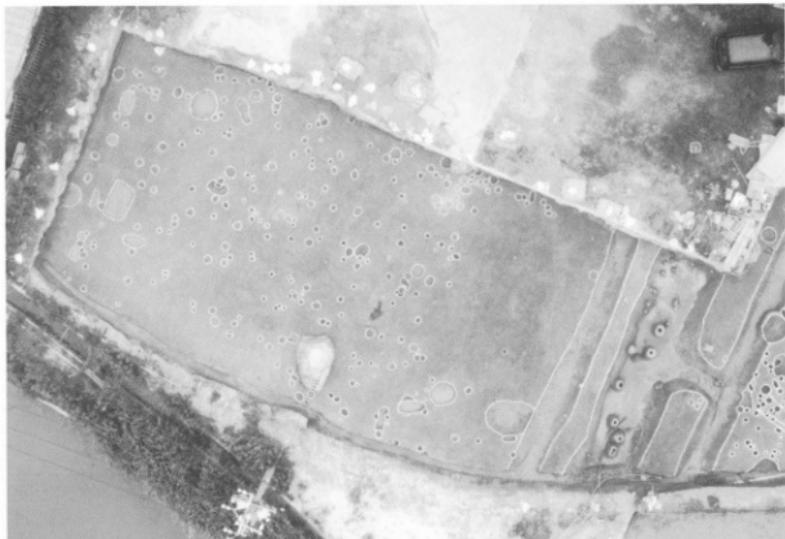
参考文献

金原正明（1996）古代モモの形態と品種、月刊考古学ジャーナルNo.409、ニューサイエンス社、p.15~19.

都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査事業
出土木製品樹種同定業務報告書

環境考古研究会 (金原 明)

写 真 図 版



A) W I 拡張区完掘状況（空撮平面）



B) W I + II 区完掘状況（空撮平面）

図版2



A) E I + II 区完掘状況（空撮平面）



B) 噴砂跡検出状況（試掘区・平面）



A) 噴砂跡検出状況（試堀区・断面）

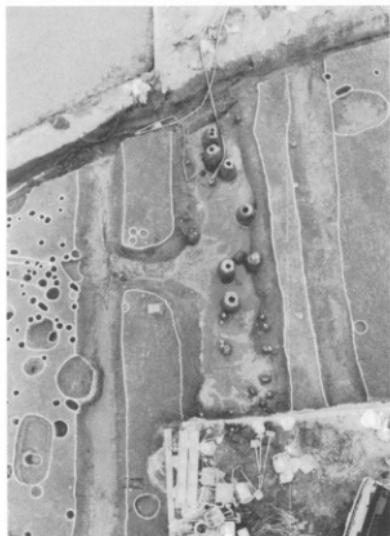


B) 噴砂跡検出状況（調査区・平面）

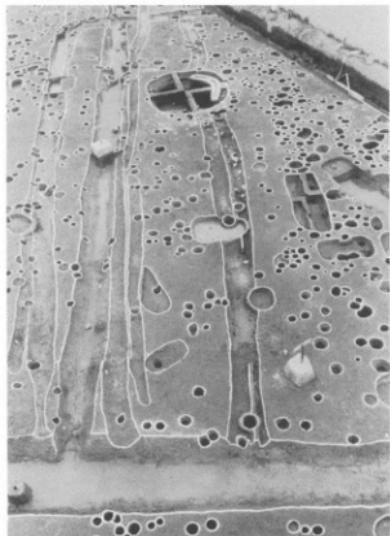


C) STO 1 火葬墓検出状況

図版 4



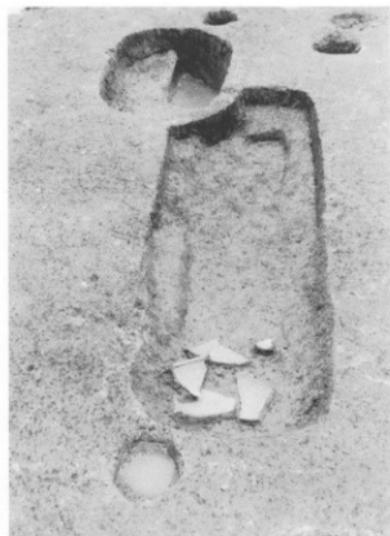
A) SD 01/07/10 完掘状況



B) WI 区完掘状況



C) SD 3 2 検出状況



D) SK 1 4 完掘状況

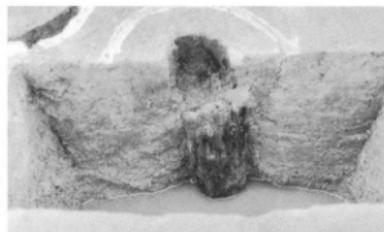


A) S E 0 1 完掘状况



B) S K 2 2 完掘状况

圖版 6



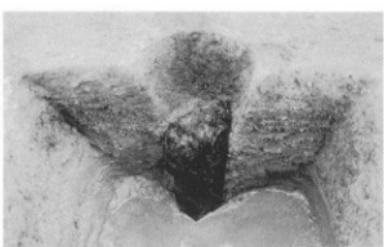
A) P 0 8 出土狀況



E) P 4 6 出土狀況



B) P 2 5 出土狀況



F) P 6 4 出土狀況



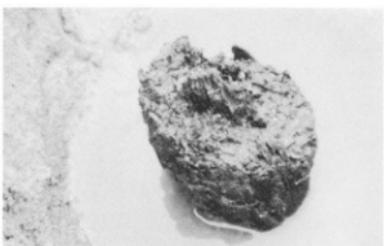
C) P 2 7 出土狀況



G) P 8 8 出土狀況



D) P 2 9 出土狀況



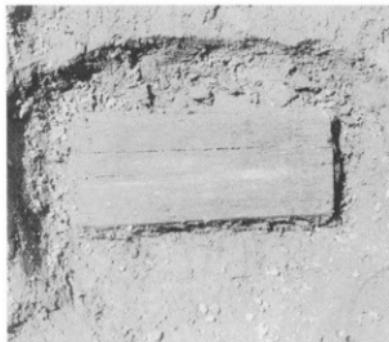
H) P 試掘出土狀況



A) SD 17 完掘状況



D) SD 17 青磁碗出土状況



B) SD 17 木製品出土状況



E) SD 3 2 捣鉢出土状況

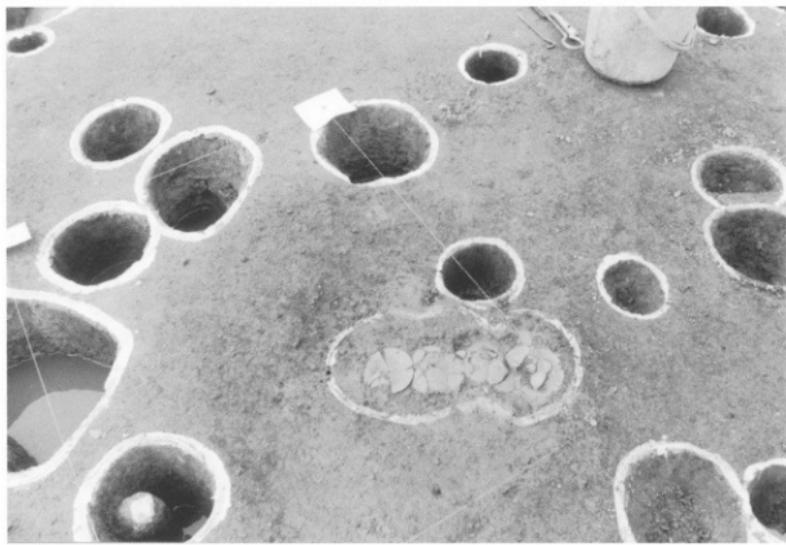


C) SD 3 2 捣鉢出土状況

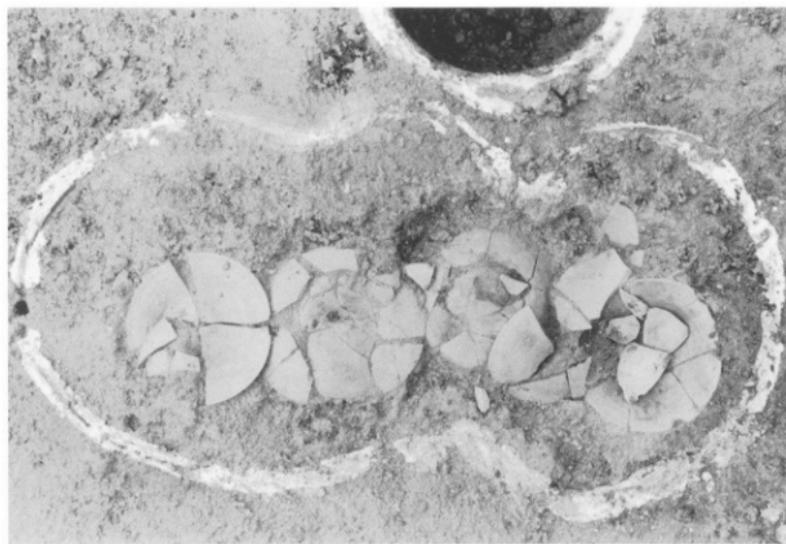


F) SD 0 7 瀬戸ソギ皿出土状況

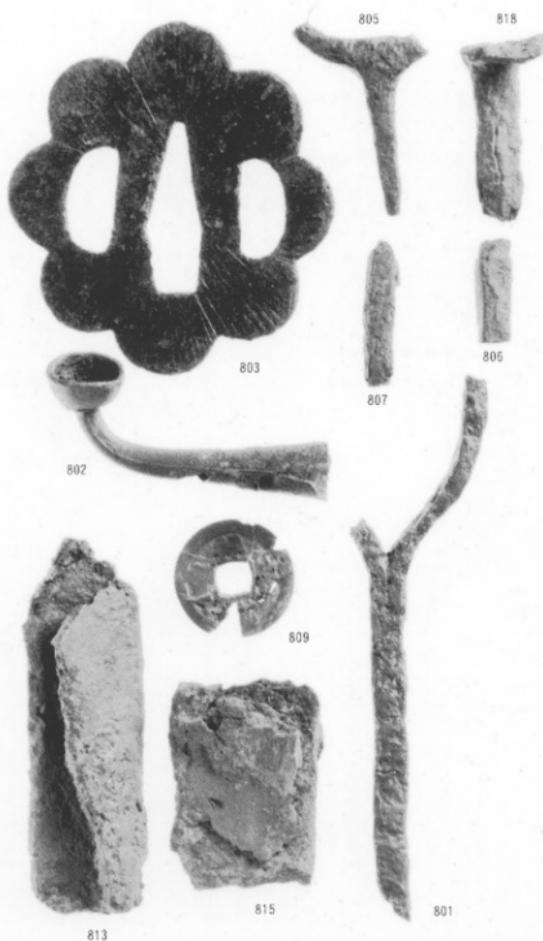
図版 8



A) 埋納土器群 B 出土状況- 1



B) 埋納土器群 B 出土状況- 2



金屬製造物



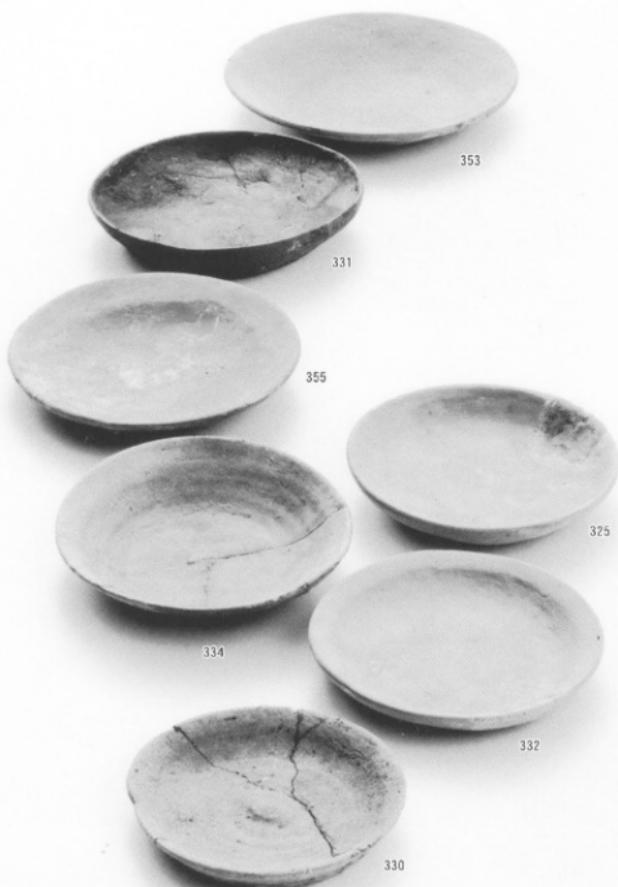
土師質小皿（埋納土器群A）



土師質小皿（埋納土器群B）



土·陶磁器皿等-1



土・陶磁器皿等-2



土・陶磁器皿等-3



土・陶磁器皿等-4



044



365



371



039



105



582



104



124



147



308



313



123



206



198



115



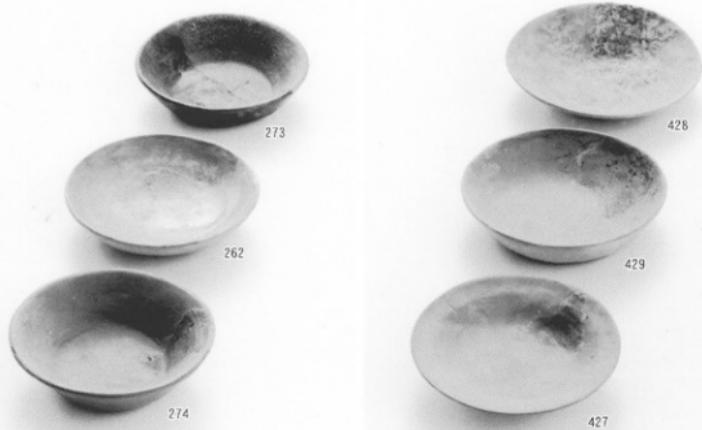
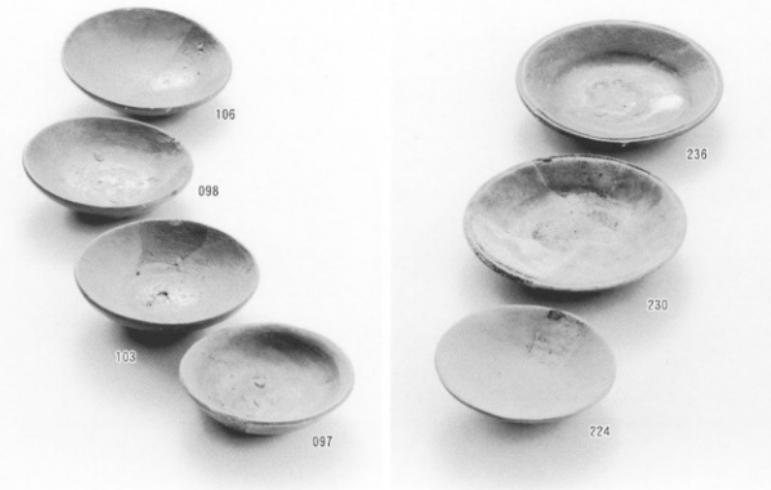
482



344



483



土·陶磁器皿等-7



土・陶磁器皿等-8、瓦質擂鉢片等



A) 陶器片口鉢

119



D) 肥前磁器碗

543



B) 青磁碗

214



E) 肥前磁器水滴

037



C) 瓦質茶釜

320



F) 肥前磁器碗

138



082



474



162



279

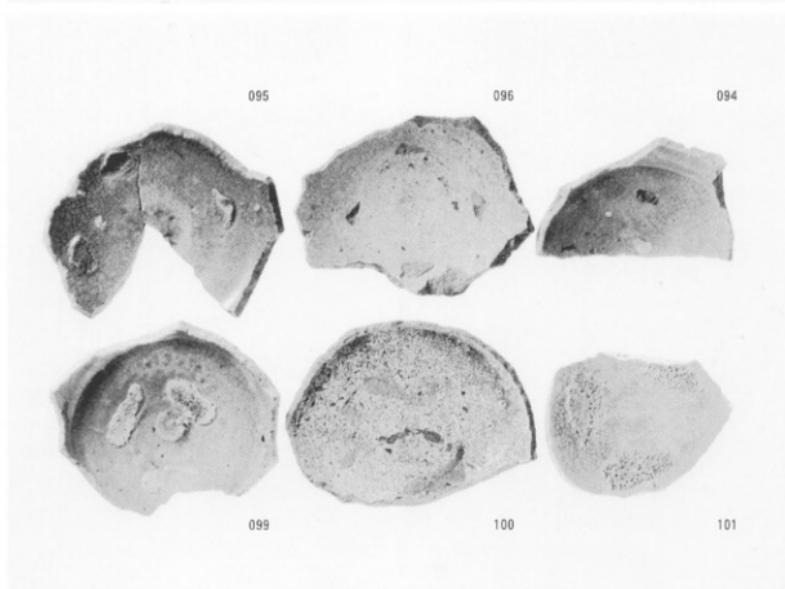
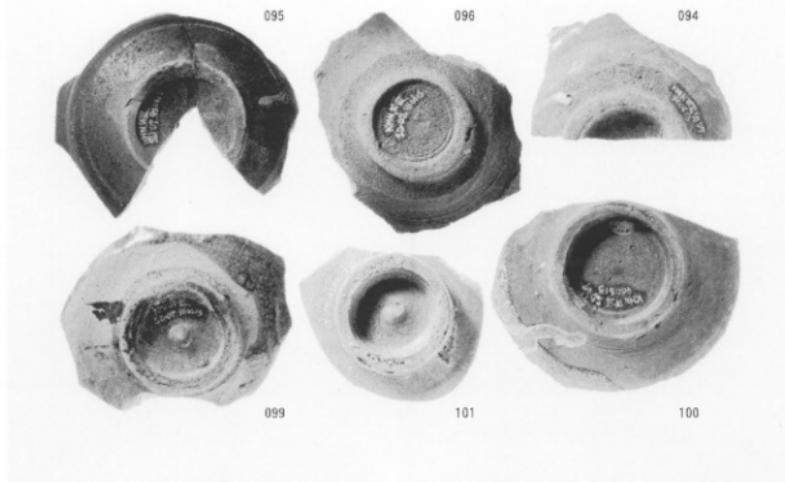


312



270

備前焼・土師質擂鉢



陶磁器片-1